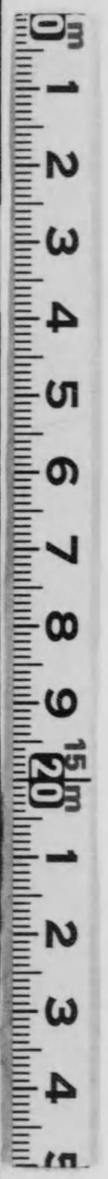


14.21  
134

大正十四年度  
業務功程

愛知縣立農事試驗場



始



1424  
134

正十五年八月

大正十四年度 業務功程

愛知縣立農事試驗場



緒言

本報ハ大正十四年度本場ニ於ケル業務ノ  
梗概ヲ輯録シタルモノナリ

大正十五年八月

愛知縣立農事試験場

大正  
15. 11. 18  
内交

14.24-134

# 大正十四年度業務功程

## 目次

水稻耕種梗概	種	藝	部	一
氣象及作況概要	：	：	：	一
水稻試驗	：	：	：	六
一、豊凶考照試驗	：	：	：	九
二、品種改良ニ關スル研究	：	：	：	
イ、品種見本栽培	：	：	：	
ロ、純系分離	：	：	：	
ハ、原種保存栽培	：	：	：	
ニ、人工交配ニ依ル新品種育成	：	：	：	
ホ、品種系統及收量比較試驗	：	：	：	
三、普通作	：	：	：	
四、栽培法ニ關スル試驗	：	：	：	
イ、乾田直播試驗	：	：	：	
ロ、直播ニ關スル委託試驗	：	：	：	
ハ、地力増進試驗	：	：	：	
ニ、挿秧ノ方式ニ關スル試驗	：	：	：	

麥耕種梗概	種	藝	部	二
氣象及作況概要	：	：	：	二
麥作試驗	：	：	：	二五
一、豊凶考照試驗	：	：	：	二八
二、品種改良ニ關スル研究	：	：	：	
イ、品種見本栽培	：	：	：	
ロ、原種保存栽培	：	：	：	
ハ、人工交配ニ依ル新品種育成	：	：	：	
ニ、純系分離	：	：	：	
ホ、品種及系統收量比較試驗	：	：	：	
三、普通作	：	：	：	
陸稻作	：	：	：	三五
耕種梗概	：	：	：	三五
作況概要	：	：	：	三六



大正十四年度業務功程  
農務省  
農務局  
農務課



一、陸稻品種比較試験	三七
二、人工交配第二世代栽培	三七
甘藷品種比較試験	三七
綠肥	三八
米麥原種圃	三九
水稻原種圃	三九
麥原種圃	四二
種苗配付	四四
農藝化學部	
水稻耕作	四五
水稻耕種梗概	四五
一、三要素適量試驗	
二、紫雲英ニ石灰加用試驗	
三、紫雲英ニ磷酸加用試驗	
四、紫雲英ニ對スル磷酸分施肥試驗	
五、紫雲英施用方法試驗	
六、紫雲英トザイトウ、ツケン肥効比較試驗	
七、有機質肥料肥効比較試驗	
八、磷酸アルミナ肥効比較試驗	
九、紫雲英地上部地下部肥効比較試驗	
一〇、麥作紫雲英作跡地比較試驗	

一、加里用量試驗	五八
二、木灰施用方法試驗	五八
三、紫雲英ニ對スル石灰窒素加用試驗	五八
四、有機質無機質肥料連用試驗	五八
五、窒素被吸收歩合査定試驗	五八
六、磷酸被吸收歩合査定試驗	五八
七、鶏糞施用方法試驗	五八
八、沈降磷酸三石灰肥効試驗	五八
九、大豆粕粒形分施深度試驗	五八
一〇、磷酸分施肥試驗	五八
一一、加里分施肥試驗	五八
一二、鶏糞施用方法試驗	五八
一三、割乾肥料ニ關スル試驗	五八
麥耕種梗概	五八
一、三要素適量試驗	
二、石灰加用試驗	
三、割乾肥料ニ關スル試驗	
四、窒素被吸收歩合査定試驗	
五、磷酸被吸收歩合査定試驗	
六、磷酸ニ關スル試驗	
七、加里ニ關スル試驗	
八、割乾肥料ニ關スル試驗	
分析調査	六三

一、依頼分析	六六
二、研究資料分析	六六
施肥標準調査	六六
一、施肥慣行調査	
二、三要素試驗	
三、委託試驗	
四、土壤ノ分析調査	
五、生産力不其土壤ノ改良ニ關スル試驗	
鶏飼料試驗	六九
病虫ノ部	七〇
病理部	七〇
稻ノ病虫害ニ關スル試驗	七〇
一、稻熱病ニ對スル稻品種及系統ノ抵抗力檢定試驗	
二、稻品種ノ稻熱病本田調査	
三、稻熱病豫防藥劑撒布試驗	
四、稻白葉枯病ニ對スル稻品種ノ抵抗力比較委託試驗	
五、稻白葉枯病病原菌接種ニ依ル被害影響試驗	
六、稻麴ニ關スル試驗	
七、二化性螟虫越冬年狀況調査	
八、二化性螟虫發生狀況調査	
九、誘蛾燈下二化性螟虫産卵數トノ關係調査	
一〇、誘蛾燈光力ト誘蛾數トノ關係調査	
麥ノ病害ニ關スル試驗	七五

一、大麥ノ斑葉病豫防ニ關スル試驗	七八
二、小麥ノ葉枯病ニ對スル品種ノ抵抗力比較試驗	七八
三、小麥ノ葉枯病被害影響調査	七八
四、種子處理ニ關スル試驗	七八
園藝作物ノ病虫害ニ關スル試驗	七八
一、西瓜ノ病害防止上藥劑撒布ノ被害及効果ニ關スル試驗	
二、胡瓜ノ露菌病藥劑豫防試驗	
三、瓜類ノ蔓割病並蔓枯病病原菌ノ病原性ニ關スル試驗	
四、十字科作物ノ根腐病豫防種子消毒ニ關スル試驗	
五、梨ノ介殼虫驅除ニ關スル試驗	
六、特殊害虫ノ分布調査	
七、ルビ一蠅虫ノ發生及驅除	
野鼠チブス菌ニ關スル試驗並配布	八二
農具試驗部	八三
普及獎勵事業	八三
一、農具運轉實演	
二、農具貸與	
三、農具設置及修理指導	
四、講習講話	
五、農具見習生ノ養成	
六、農具試驗說明ノ配付	
試驗事業	八四
一、トラクター	

- 二、播種器
- 三、水田直播機
- 四、水田除草機
  - イ、水田畜力除草機
  - ロ、畜力除草機ト作付方式トニ關スル試驗
- 五、乾燥機
- 六、石油發動機
- 七、石油發動機燃料節減ニ關スル調査
- 八、勞力節減ニ關スル試驗
  - イ、水稻作
  - ロ、水田裏作
- 九、農具ノ比較試驗

園藝部

- 果樹
  - 一、梨品種試驗
  - 二、桃品種試驗
  - 三、葡萄品種試驗
  - 四、柿品種試驗
  - 五、柑橘種類試驗
- 蔬菜
  - 一、橋田茄子比較試驗
  - 二、茄子品種試驗

- 三、茄子連作病害豫防試驗
  - 四、茄子一代雜種優劣比較試驗
  - 五、節成胡瓜優良系選拔試驗
  - 六、胡瓜品種試驗
  - 七、葱品種試驗
  - 八、葱頭品種試驗
  - 九、甘藍品種試驗
  - 一〇、西瓜品種試驗
- 秋作
- 一、結球白菜品種試驗
  - 二、宮重大根抽葉期ニ於ケル枝狀態ト根部伸長トノ相關關係調査
  - 三、宮重大根長太系及堀江大根尻細系選拔試驗
  - 四、水田裏作委託試驗
- 蔬菜種子ノ改善
- 種苗配布
- 温室及促成栽培
- 一、マスクメロン品種試驗
  - 二、葡萄品種試驗
  - 三、茄子品種試驗
  - 四、メロン交雜試驗
  - 五、茄子連作試驗
  - 六、胡瓜品種試驗
  - 七、試作及品種試驗
- 加工

漬物ニ關スル研究

- 一、茄子漬漬試驗
    - イ、呼水ノ多少
    - ロ、鹽量ノ多少
    - ハ、茄子漬漬成績
  - 二、越冬奈良漬試驗
    - イ、青瓜漬込法試驗
    - ロ、漬替法試驗
    - ハ、漬替調味料比較試驗
    - ニ、鹽漬瓜奈良漬試驗
  - 三、越冬品種試驗
  - 四、深庵大根品種試驗
  - 五、深庵漬壓石重量試驗
  - 六、深庵大根乾燥對鹽量試驗
  - 七、淺漬深庵調味材料混入試驗
  - 八、深庵漬用器試驗
  - 九、食鹽品質試驗
- 罐詰ニ關スル研究
- 一、グリーンピース品種試驗
  - 二、ソース用トマト品種試驗
  - 三、トマトソース製法試驗
  - 四、トマトソース濾過法試驗
  - 五、罐詰用トマト品種試驗
  - 六、各種罐詰製造

乾燥ニ關スル研究

- 一、大根切干品種試驗
  - 二、乾燥程度試驗
- 成鶏飼料配合表
- 一、原種蕃殖
    - イ、白色レグホーン種
    - ロ、三河種並名古屋種
    - ハ、産卵能力調査
  - 二、種鶏無償配布
  - 三、種卵ノ拂下
  - 四、試驗事項
  - 五、家禽現在數
- 一、場員出張
- 二、印刷物
- 三、文書受發件數
- 四、參觀人
- 五、質問應答
- 六、職員
- 七、農業練習生
- 八、見習生

畜産部

雑ノ部

# 大正十四年度業務功程

## 種 藝 部

### 水 稻 作

#### 水稻耕種梗概



種子ノ豫措

種ニ子

選種

浸種

代

整地

當場生産ニ係ルモノヲ用フ

數回唐箕ヲ以テ秕ヲ除去シタル後比重一・二三ノ苦鹽汁ニテ選別ス

五日間清水ニ浸漬シ毎日換水ヲ行ヒ且種糲ヲ上下ニ攪拌ス

#### 水田苗代ノ部

冬季打起シテ寒氣ニ曝露シ春季ニ至リ耕耙シテ土塊ヲ碎キ更ニ細碎シテ稻株ヲ出シ播種凡ソ一週間前  
 灌水シテ代搔ヲ行ヒ區劃ヲ定メ藁灰ヲ施シ土中ニ混シ播種ノ前日更ニ攪拌シテ平坦トナシ八反摺ニテ  
 縱横ニ搔キ均シ平鍬ニテ擦リ均シ棉實粕及過燐酸石灰ヲ撒施シ肥料ノ動搖セサル様再ヒ平鍬ニテ擦リ  
 直ニ播種シ鍬ニテ種子ノ移動セサル様土中ニ擦リ込ミ後灌水ス

播代ハ幅四尺長サ二十七尺ノ短冊形トナシ各播代ノ間ハ一尺五寸ノ踏切ヲ置キ異品種ノ境界ハ總テ横板ヲ立テ種子ノ混淆ヲ防ク

乾田苗代ノ部

冬季休閑トナシ四月二十日頃ニ至リ草搔ヲ以テ雜草ヲ削リ取り株拔ニテ稻株ヲ堀リ起シ數日間放置シテ乾燥スルヲ待テ稻株及雜草ノ根ニ附着セル土壤ヲ打落シタル後搔キ集メテ之ヲ他ニ搬出シ直ニ區劃ヲ定メテ畔切鎌ニテ切りタル後溝トナルヘキ部分ノ土ヲ床面ニ浚へ上ケ乾クヲ待チテ叮嚀ニ粉碎シ平坦ナラシム播種ニ先チ更ニ床面ノ土ヲ淺ク攪拌均平ナラシメ種子ヲ播下シ棉實粕及過磷酸石灰ヲ撒施シ鍬又ハ鋤ニテ叮嚀ニ叩キ付ケ後河砂ヲ種子ノ隠ル、迄覆ヒ雀ノ害ヲ防ク爲白糸ヲ張り徐々ニ灌水シテ床面ニ水ヲ飽和セシム

播代ハ四尺幅(床面ノ幅ハ四尺三寸)溝ノ幅一尺トシ整地ノ際特ニ注意シテ床面ヲ水準ナラシム

肥料 坪當左ノ如シ

木 葉 過 硫 綿 棉 磷 酸 アン モ ニ ア 實 粕 石 灰 灰 粕	元	肥	元	肥
	六月一日頃追肥	六月廿日頃追肥	六月一日頃追肥	六月廿日頃追肥
水田苗代	150	30	160	40
乾田苗代	100	30	100	40

綠苗ノ部分ノ坪ニ勿施用

ハ、播種期 五月十二日乃至十四日

ニ、播種量 播代一步ニ對シ浸種後ノ容量ニテ三合五勺ヲ標準トシ粒ノ大小ニ依リ多少増減ス、一本植トナスモノハ一合五勺播トス

ホ、苗代管理

水田苗代ノ部

播種後二三日間ハ深水ニ保チ萌芽スルニ至レハ常ニ田面ニ水ノ浸潤スル程度ニ淺水トナシ時々夜間排水シテ苗ノ徒長ヲ防ク様注意ス苗ノ二三寸ニ伸ヒタル後ハ常ニ淺ク湛水シ時々落水シテ田面ヲ温メ苗ノ強剛ナル發育ヲ圖ルモノトス

乾田苗代ノ部

播種後直ニ深ク湛水シテ土中ニ水ヲ飽和セシメ後減水シテ播床ノ肩ニ達スル迄溝ニ水ヲ湛へ爾後床面ノ乾固セサル程度ニ時々溝内ニ送水ス挿秧當日床面ニ深ク水ヲ湛へ苗ヲ取り易カラシム  
其ノ他苗代期中常ニ巡視シテ自生苗、稗其ノ他ノ雜草ヲ除キ且苗ノ密生セル部分ハ間引ヲナシ害虫發生ノ虞アルトキハ遲滯ナク之カ驅除豫防ヲナス

三、本 田

イ、整 地

休 閑 田

冬季切藁反當五十貫ヲ撒布シタル後犁ニテ畦形ニ耕起シ鬼車ヲ以テ粗ク土塊ヲ碎キ三月中下旬再ヒ切藁五十貫ヲ施シ鋤返シヲナシ鬼車ニテ土ヲ碎ク三月末藁種種子ヲ撒播シ置キ四月中下旬三度切藁五十



貫ヲ撒布シ溝土ヲ浚ヘ置キ六月上中旬更ニ鋤返シヲ行ヒ挿秧前灌水シテ代掻ヲナシ肥料ヲ施シ人力ヲ以テ鋤代ヲ搔キ挿秧ニ供ス

五月中下旬畔塗ヲ行フ

紫雲英栽培田

五月中旬紫雲英ヲ刈取リ田面ニ擴ケテ乾燥セシメタル上之ヲ搔キ集メテ搬出シ直ニ切藁百貫ヲ撒布シテ畦形ニ鋤キ起シ六月中旬鋤キ返シテ土塊ヲ碎キ休閑田ト同様代掻整地ヲナス

株數 普通作及收量試驗ハ坪五十株(一尺×七寸二分) 一本植ハ三十六株(一尺×一尺)

ハ、一株苗數 試驗ノ目的及品種ニ依リ一定セサルモ普通作ニ於テハ左記標準ニ依ル

早稻 六本 中稻 五本 晚稻 四本

ニ、插秧期 六月二十九日ヨリ三日間

ホ、除草

- 一番除草 植付後一週間
  - 二番除草 一番除草後一週間
  - 三番除草 七月十五日頃
  - 四番除草 七月二十四日ヨリ二十六日頃第一回追肥
  - 五番除草 八月一日ヨリ五日頃
  - 六番除草(止草) 八月五日ヨリ十日頃第二回追肥
- 外ニ一本植ニ限リ六番除草後手ヲ以テ叮嚀ニ除草ヲ行フモノトス
- 回轉除草機使用  
全  
手取(元搔)  
除草機使用  
除草機使用  
除草機使用

ハ、灌溉 挿秧當時ハ稍深水ニ灌溉シ活着後ハ常ニ淺ク水ヲ湛ヘ除草ノ都度落水シテ田面ヲ空氣ニ接

セシメ土用明後止草ノ終ルヲ待テ三四日間斷水シテ土ヲ固メ穂孕中ヨリ出穂期ニ至ル迄ハ稍深ク灌水シ稻穂ノ傾垂スルニ至レハ全ク落水シテ田土ヲ固メ過度ニ乾燥スルトキハ短時間水ヲ走ラセ直ニ排水スルモノトス

ト、害虫驅除 害虫發生シタルトキハ遲滞ナク驅除ヲナス

チ、收穫 大部分ノ粃ガ綠色ヲ失ヒ黃變シタルトキヲ適期トシ刈取リタルモノハ地乾二三日間又ハ稻

架乾五六日間ノ後二日間以上莖乾ヲ行ヒ十分乾燥シタル粃ヲ摺摺白ニテ脱稈シ精選ス

リ、肥料表(何レモ一反歩當トス)

肥料名	元肥			第一回追肥		第二回追肥		備考
	(六月末)	(七月二十日頃)	(八月七日頃)	(作柄ヲ見テ五貫以内施用)				
大豆 粗粉	四・八〇〇	四・八〇〇	七・〇〇〇					
全粗粉	七・〇〇〇	七・〇〇〇	七・〇〇〇					
硫酸アンモニア	二・〇〇〇							
過磷酸石灰	五・〇〇〇							
硫酸加里	三・五〇〇							
石灰	一・〇〇〇							代掻前施用
乾燥紫雲英	四・〇〇〇	四・〇〇〇						
硫酸アンモニア	二・〇〇〇							
過磷酸石灰	五・〇〇〇							
硫酸加里	三・〇〇〇							
紫雲英跡地 普通作	三・〇〇〇							
硫酸加里	三・〇〇〇							
過磷酸石灰	五・〇〇〇							
硫酸加里	三・〇〇〇							

肥料名	元肥		第一回追肥	第二回追肥	備考
	(六月末)	(七月二十日頃)	(八月七日頃)		
石 灰	二〇〇〇〇	三・五〇〇	三・五〇〇	代播前施用	
大豆 粕 粉	三・五〇〇	三・五〇〇	三・五〇〇	代播前施用	
全 粗 粉	五・〇〇〇	五・〇〇〇	(作柄ヲ見テ 少量施用)	代播前施用	
一毛乾田 硫酸アンモニア	二・〇〇〇				
一本植 過 磷 酸 石 灰	五・〇〇〇		五・〇〇〇		
硫 酸 加 里	二・五〇〇				
石 灰	一〇〇〇〇			代播前施用	
堆 肥	二〇〇〇〇			插秧五日前	
大 豆 粕	二〇〇〇〇				
硫酸アンモニア	一・五〇〇				
過 磷 酸 石 灰	六・〇〇〇				
藥 灰	一〇〇〇〇			插秧五日前	

氣象及作況概要

イ、苗代期 苗代期中ノ天候ハ敢テ不良ト謂フニ非サルモ五月中下旬ニ於テ著シク低温ナリシ爲苗ノ伸長遅延シ且麥類ノ收穫等一般作業ノ進マサリシ關係上概シテ插秧期二三日以上遅延セリ

ロ、插秧期前後 插秧最盛期タル六月下旬ヨリ七月初旬ニ亘ル氣象ハ略ホ適順ニシテ用水潤澤ナルヲ得テ縣下一般順調ニ插秧ヲ終レリ七月六日ヨリ十八日ニ至ル約半ヶ月間曇雨連續シ平年ニ比シ二度乃至三度低温ニシテ肥料ノ奏効惡シク稻ノ發育ハ著シク阻滯セラレ早クモ稻熱病ノ發生ヲ見ルニ至レリ螟

虫及螟蛉ノ發生ハ大ニ遅延セルモ被害概ネ甚大ナラス

ハ、生育盛期 土用中ノ暑熱極メテ緩ニシテ近年比類ナキ低温ヲ示シ稻ノ發育大ニ遅延シ且軟弱トナリ稻熱病ノ發生次第ニ多キヲ加ヘ來レリ八月十四日短時間ニ未曾有ノ豪雨ヲ齎シ縣下各地ニ浸水ノ被害ヲ見タリ八月下旬急ニ暑氣ヲ加ヘ稻ノ發育良好ニ赴キ稍愁眉ヲ開クニ至レリ

ニ、出穂期前後 稻ノ出穂期ハ例年ヨリ三四日促進シ其ノ最盛期タル九月上旬ハ無難ニ經過シタリシカ九月十一日朝暴風雨襲來シ當時抽穂中ノ最晚稻ハ著シク擦傷ヲ受ケタリ此ノ暴風雨ニ依リ屢ニ浸水被害ヲ蒙リタル地方ハ一層ノ慘狀ヲ呈スルニ至レリ

ホ、稔實期 九月下旬ノ平均氣温ハ平年ニ比シ二度五低ク稻ノ稔實ヲ害シタルコト頗ル甚シキヲ認ム穂首稻熱病ノ發生ハ此ノ頃ヨリ急ニ増加シ縣下一圓稀有ノ被害ヲ見タリ白葉枯病ハ例年ヨリ稍少ク螟虫浮塵子等ノ發生モ多カラス十月五日ヨリ六日間霖雨連續シ爾後收穫期ニ至ル迄天氣晴朗ナリシカ氣温ハ平年ニ比シ著シク低シ

要スルニ本年ノ稻作ハ苗代期ヨリ收穫前ニ至ル迄常ニ冷濕ナル天候ナリシ爲肥効十分ナラス草丈低ク莖葉軟弱ニシテ稻熱病ノ被害殊ニ甚シク出穂期ノ暴風ト稔實期ノ低温多濕ニ依リ一層米質收量ヲ損シ大正十年ニ亞クノ不作ヲ見ルニ至レリ

大正十四年 稻作期中氣象表

月旬	五月				六月				七月				八月				備考
	全月	下旬	中旬	上旬	全月	下旬	中旬	上旬	全月	下旬	中旬	上旬	全月	下旬	中旬	上旬	
午前十一時氣温	一九・九	一九・九	一九・九	一九・八	二二・八	二二・八	二二・八	二二・八	二二・八	二二・八	二二・八	二二・八	二二・八	二二・八	二二・八	二二・八	
毎日最高氣温	二二・一	二二・一	二二・一	二二・一	二二・七	二二・七	二二・七	二二・七	二二・七	二二・七	二二・七	二二・七	二二・七	二二・七	二二・七	二二・七	
毎日最低氣温	一〇・二	一〇・二	一〇・二	一〇・二	一〇・五	一〇・五	一〇・五	一〇・五	一〇・五	一〇・五	一〇・五	一〇・五	一〇・五	一〇・五	一〇・五	一〇・五	
日照時數(積算)	七五・四	七五・四	七五・四	七五・四	四四・三	四四・三	四四・三	四四・三	四四・三	四四・三	四四・三	四四・三	四四・三	四四・三	四四・三	四四・三	
降水回数	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	
降水量	七三・二	七三・二	七三・二	七三・二	二二・一	二二・一	二二・一	二二・一	二二・一	二二・一	二二・一	二二・一	二二・一	二二・一	二二・一	二二・一	
畑地温(午前十一時平均)	一五・一	一五・一	一五・一	一五・一	一五・五	一五・五	一五・五	一五・五	一五・五	一五・五	一五・五	一五・五	一五・五	一五・五	一五・五	一五・五	
田面水温(午前十一時)	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	
田面地温(午後三時)	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	
備考	微霜三回雨天多シ	微霜三回雨天多シ	微霜三回雨天多シ	微霜三回雨天多シ	曇天多シ	曇天多シ	曇天多シ	曇天多シ	曇天多シ	曇天多シ	曇天多シ	曇天多シ	曇天多シ	曇天多シ	曇天多シ	曇天多シ	

一、豊凶考照試験

水稻試験

月旬	九月				十月				十一月				備考
	全月	下旬	中旬	上旬	全月	下旬	中旬	上旬	全月	下旬	中旬	上旬	
午前十一時氣温	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	霖雨 (十一日暴風 最大秒速廿三米) 極メテ冷温 曇天多ク濕潤 適順 低温 廿六日初霜 適順 適順 雨多シ 適順
毎日最高氣温	二六・八	二六・八	二六・八	二六・八	二六・八	二六・八	二六・八	二六・八	二六・八	二六・八	二六・八	二六・八	
毎日最低氣温	一九・三	一九・三	一九・三	一九・三	一九・三	一九・三	一九・三	一九・三	一九・三	一九・三	一九・三	一九・三	
日照時數(積算)	四七・〇	四七・〇	四七・〇	四七・〇	四七・〇	四七・〇	四七・〇	四七・〇	四七・〇	四七・〇	四七・〇	四七・〇	
降水回数	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	
降水量	八八・九	八八・九	八八・九	八八・九	八八・九	八八・九	八八・九	八八・九	八八・九	八八・九	八八・九	八八・九	
畑地温(午前十一時平均)	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	二二・四	
田面水温(午前十一時)	二二・六	二二・六	二二・六	二二・六	二二・六	二二・六	二二・六	二二・六	二二・六	二二・六	二二・六	二二・六	
田面地温(午後三時)	二二・六	二二・六	二二・六	二二・六	二二・六	二二・六	二二・六	二二・六	二二・六	二二・六	二二・六	二二・六	
備考	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	
	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	
	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	霖雨	

毎年同一品種ヲ同一ノ耕種法ヲ以テ同一地ニ栽培シ所定ノ時期ニ調査セル生育狀況ヲ既往ノモノト比較對照シ之ニ基キ其ノ年ニ於ケル水稻ノ豊凶ヲ考照セムトスルモノニシテ既記ノ如ク本年ハ稻作期中常ニ低温ニシテ生育十分ナラス稻熱病ノ發生多ク且成熟期ノ低温ニ依リ稔實不良ニシテ收量平年ニ比シ早稻一割八

分九厘中稻一割四分八厘晚稻一割二分三厘ノ減少ヲ見タリ即チ左ノ如シ

品 種	大正十四年		平 年		比較増減(△ハ減)
	收 量	一升重量	收 量	一升重量	
早稻三種平均	一・九〇三	三七七	二・三四六	三八〇	△〇・四四三
中稻三種平均	二・二三三	三八三	二・四九二	三八二	△〇・三六九
晚稻三種平均	二・二七四	三八一	二・四八〇	三八二	△〇・三〇六

二、品種改良ニ關スル研究

イ、品種見本栽培

優良品種育成用母本ヲ選擇シ且水稻ノ諸形質研究上ノ參考ニ資セムカ爲縣ノ内外ヨリ取寄セタル優良形質又ハ特殊ノ形質ヲ具備スルモノ百三十種ヲ栽植シ之カ特性ヲ調査セリ

ロ、純系分離

左記在來品種ニ就キ簡易ナル純系分離ヲナシ該品種ノ改良ヲナサムトスルモノニシテ何レモ第一年選抜圃トシテ作付セリ

品 種 名	栽植株數	品 種 ノ 特 徵
道 德	一四七六	海岸地方ニ普及シ耐潮性ニ富ム
尾張坊主	一四七六	東三河一帯ニ普及シ強健ナル品種
春 糯	一四七六	渥美郡ノ一部ニ於テ收量多ク強健ナル糯
石 上 糯	九五〇	朽木縣ニ於テ品質優良ナル糯

ハ、原種保存栽培  
現在本縣獎勵品種トシテ原種圃ニ供用シツ、アル各品種並將來獎勵品種ニ編入サルヘキ見込ヲ有スル品種ニ就キ各數系統ニ分チテ栽植シ各系統ノ形質ヲ調査シテ原々種ヲ決定セリ

ニ、人工交配ニ依ル新品種育成

組 合	交 配	育 種 ノ 目 的
白 千 本 × 愛 中 九	白 千 本 × 愛 知 旭 二 號	中稻短稈強健品種ノ育成
白 千 本 × 愛 知 旭 二 號	愛 知 旭 一 號 × 白 千 本	千本型良實種ノ育成
支 晚 三 三 號 × 白 千 本	支 晚 三 三 號 × 白 千 本	同
中 辨 一 二 二 號 × 戰 捷	中 辨 一 二 二 號 × 戰 捷	中辨型稻熱病抵抗品種ノ育成
中 辨 一 四 七 號 × 戰 捷	中 辨 一 四 七 號 × 戰 捷	早熟中辨型稻熱病抵抗品種ノ育成
白 千 本 × 滋 賀 關 取 一 一 號	白 千 本 × 滋 賀 關 取 一 一 號	千本型白葉枯病抵抗品種ノ育成
道 德 × 京 都 旭	道 德 × 京 都 旭	耐潮性良實種ノ育成
滋 賀 關 取 一 一 號 × 中 辨 一 二 二 號	滋 賀 關 取 一 一 號 × 中 辨 一 二 二 號	中辨型白葉枯病抵抗種ノ育成
伊 豫 辨 慶 一 號 × 白 千 本	伊 豫 辨 慶 一 號 × 白 千 本	千本型良實種ノ育成
白 千 本 × 戰 捷	白 千 本 × 戰 捷	千本型稻熱病抵抗性品種ノ育成

(二) 第一世代

組合七  
 愛中八號 × 晚白  
 白千本 × 愛知旭二號  
 白千本 × 白玉  
 支晚三三號 × 中神五號  
 支晚三三號 × 仙石九四號  
 神力四〇四號 × 滋賀關取一號  
 支晚三三號 × 滋賀關取一號  
 小雄七六號 × 滋賀關取一號  
 小穀四二四號 × 伊豫辨慶二號  
 小穀四二四號 × 仙石九四號

(三) 第二世代

育種ノ目的  
 中稻短稈強健種ノ育成  
 千本型真實種ノ育成  
 同  
 中熟短稈豐產種ノ育成  
 強稈優良種ノ育成  
 白葉枯病抵抗種育成  
 同  
 早稻優良種育成  
 短、強稈種育成

組合七  
 小雄七六號 × 仙石九四號  
 小穀五三〇號 × 仙石三〇六號  
 小雄七六號 × 滋賀關取一號  
 戰捷 × 支晚三三號

育種ノ目的  
 短強稈種育成  
 早熟短強稈種育成  
 白葉枯病抵抗種育成  
 稻熱病抵抗性品種育成

栽植株數  
 三六〇〇  
 三六〇〇  
 三六〇〇  
 三六〇〇

選拔株數  
 〇  
 五四  
 七  
 二九

全 (畑作)

(四) 雜種系統比較

道早二號 × 愛早一號  
 榮神力 × 赤穗  
 組合七  
 小穀四二四號 × 嘉十一七號  
 小雄七六號 × 山重一號  
 小穀四二四號 × 山重一號  
 榮神力 × 源一本  
 京都旭 × 愛早一號  
 平和糯 × 畿內剛力  
 愛知糯一號 × 京都旭

(五) 分系統栽培

系統名  
 中神五號 × 辨慶  
 小神力 × 穀良都  
 小神力 × 雄剛  
 器量好 × 畿內剛力

陸稻真實種育成  
 早熟短強稈種育成  
 白葉枯病抵抗種育成

系統數  
 一五  
 一九  
 一〇  
 一四  
 三  
 一二  
 一六

選拔系統數  
 〇  
 〇  
 〇  
 一  
 二  
 〇  
 七

選拔株數  
 一六  
 九  
 〇  
 〇  
 〇  
 一三  
 五  
 四九

栽植系統數

三九  
 三六  
 二七  
 一一

ホ、品種及系統收量比較試験  
 新ニ育成シタル品種又ハ他ヨリ取寄セタル品種ニ就キ其ノ收量並特性ヲ調査シ之カ優劣ヲ比較セムトス  
 ルモノニシテ早稻六種、中稻六種、晚稻十二種ヲ供用セリ（一區五坪四・二區制）

品 種 名	來 歴	收 量 玄米反當 量	重 量 玄米一升 量	米 質	摘 要
比較用 伊豫辨慶二號	愛媛縣ヨリ取寄	二・二六二	三七三・〇	良	短稈、早熟種、稻熱病、菌核病ノ被害多シ
伊豫早生神力	同	二・〇九七	三七七・〇	稍良	早熟、短、細稈稻熱病ノ害多シ
愛 國 三 號	本場育成(分離)	二・一九七	三八〇・五	稍不良	在來ノ愛國ト同形ニシテ米質良好
富山銀坊主一五三	富山縣ヨリ取寄	二・四三六	三八〇・〇	中	早熟、草丈稍高キモ稻熱病少ク有望
愛知早稻一號	本場育成(交配)	二・二九二	三七五・〇	良	早熟、短細稈、稻熱病多キモ有望
小穀五〇・八九・八七・五九	愛媛縣ヨリ取寄	二・二三八	三八一・三	良	最短期、稻熱病及菌核病極メテ多シ
小穀 五〇・八九・八七	同	二・二〇五	三八四・三	良	同
比較用 仲 好	本場育成(交配)	二・〇三二	三七八・九	良	中熟短稈ノ良種ナレトモ稻熱病特ニ多シ
伊豫辨慶一號	愛媛縣ヨリ取寄	二・二〇〇	三八一・〇	良	中熟短稈、稻熱病アリ
道後中稻一號	全	二・〇六六	三八二・五	良	最短期、稻熱及菌核極メテ多シ
器 量 好 二 號	本場育成(分離)	二・一〇七	三八〇・〇	中	在來器量好ノ米質稍良好トナリタルモノ
愛知中稻九號	同 (交配)	二・二二三	三八五・五	中	中熟短稈ノ有望種ナレトモ稈稍弱シ
中辨ニ・〇四七・二三〇	愛媛縣ヨリ取寄	二・〇四〇	三七四・八	稍良	短稈早熟ニシテ有望ナルモ稻熱病多シ
中辨ホ・〇三三・三三	同	二・二五一	三八二・五	良	中熟短稈ニシテ有望稻熱病アリ

三、普通作

左ノ各品種ヲ稍大面積ニ普通作トナシ品種取扱上ノ參考ニ資スルト共ニ參觀者ノ便宜ニ供セリ耕種ノ方  
 法ハ總テ前掲耕種標準ニ則リ前作物ノ種類、土地ノ肥瘠並品種ノ特性ニ依リ幾分宛ノ變更ヲ加ヘタリ

品 種 名	栽培面積 畝歩	出穂期 月日	成熟期 月日	收 量 玄米反當 量	米 質	生 育 狀 況
愛 國 三 號	三・一五	八・二九	一〇・七	二・〇九七	稍不良	順調
比較用 榮 神力	本場育成(交配)			二・三二二	稍良	神力ニ似テ稻熱病ニ強シ
神力×剛力七	同			一・九六〇	良	神力ニ似テ脱粒難、見込少シ
愛知旭一・二・一五	同			二・三八七	良	京都旭ニ似テ脱粒難、最有望
愛知旭二・一・一〇	同			二・四二七	稍良	同
愛知晚稻二五號	同			二・四四五	良	神力ニ似テ脱粒難、稍有望
支晚三三・五・五四	愛媛縣ヨリ取寄			二・三三六	中	畿内剛力ニ似タルモノ
支晚三三・五・五三	同			二・四三七	中	神力又ハ榮神力ニ似タルモノ
支晚一〇・二	同			二・二四九	中	畿内剛力ニ似タリ稻熱病稍多シ
小雄七六四二六・七・二	同			二・二三〇	良	最短期、穗淋シク稻熱病菌核病多シ
小雄七六四二二・一〇・一	同			二・〇九六	良	同
中辨一七六・一二・四	同			二・二〇九	稍良	短稈ニシテ形態良好ナルモ稻熱病多シ
中辨五六九・八・五	同			二・三三〇	稍良	同
白 千 本	本縣在來種			二・二六二	(不長小粒)	短稈強健種ナレトモ生育十分ナラス作柄不長

品 種 名	栽培面積	出穂期	成熟期	玄米反當量	米 質	生 育 狀 況
器量好二號	三・二五	九・三	一〇・三	二・二二	中	稻熱病多シ
仲 河 錦 三 號 好	三・二五	九・四	一〇・四	一・九八	稍良	同
榮 神 力 三 號	三・二五	九・三	一〇・七	二・二九	良	順調
神 力 三 號	三・二五	九・六	一一・六	二・四三	良	同
畿 内 剛 力 號	三・二五	九・七	一一・四	一・八三	稍良	稻熱病極メテ多ク慘狀ナリ
京 都 旭 旭 力	三・二五	九・八	一一・七	二・三六	中	稻熱病多シ
愛 知 旭 旭 力	九・六	九・八	一一・三	二・三四	良	暑順調ナルモ出穂期暴風ノ爲擦傷ヲ受ク
平 和 旭 旭 力	九・六	九・六	一一・三	二・五四	良	順調
中 辨 一 四 七	三・二五	八・八	一〇・三	二・四〇	稍良	暑順調、僅ニ風害アリ
中 辨 一 二 二	三・二五	九・六	一一・六	二・〇八	中	順調ナレトモ稻熱病アリ
伊 豫 辨 慶 二 號	三・二六	八・二	九・三〇	一・七〇	良	稻熱病ノ爲慘害ヲ受ク
白 千 本	三・二六	九・八	一一・二	一・七八	不長(小粒)	順調ナレトモ稻熱病アリ
伊 豫 早 生 神 力	五・二	八・五	一〇・八	一・七三	中	順調、稻熱病アリ
道 後 中 稻 一 號	五・〇〇	九・五	一〇・九	二・二四	良	稻熱病及腐核病多シ
愛 知 糯 一 號	七・〇〇	九・六	一一・三	二・〇二	良	順調ナレトモ稻熱病アリ

前記ノ如ク本年ハ氣候不良ノ爲稻草ノ發育不十分ニシテ軟弱トナリ稻熱病ノ慘害ト稔實期ノ冷濕ニ依リ結實ヲ不良ナラシメ收量米質共ニ著シク不成績ヲ示シタルハ遺憾ナリ

四、栽培法ニ關スル試驗

イ、乾田直播試驗

乾田式直播ノ成績ヲ知り併セテ該法ニ適應スヘキ品種ヲ檢知セムトスルニ在リ(一品種二十五歩宛、五月二十五日播種、七月十五日灌水)

品 種 名	玄米反當收量	玄米一升ノ重量	生 育 狀 況
銀 坊 主	二・三〇八	三二二・〇	最モ順調ニ生育セリ
三 河 錦 三 號	二・二一〇	三七九・〇	同
榮 神 力	二・三三七	三八二・〇	稻株過度ニ繁茂シ穂短小トナル
京 都 旭	二・〇二九	三八〇・〇	生育遲延シ風害多シ

右ノ成績ニ依レハ乾田直播ニ供用スヘキ品種ハ銀坊主ノ如ク早熟強健ニシテ分蘗力強カラサル品種ヲ適當トスルカ如シ

ロ、直播ニ關スル委託試驗

乾田直播ノ適否ヲ檢セムカ爲縣下三箇所ニ委託シテ之ヲ施行セリ其ノ成績左ノ如シ

試 驗 地	玄米反當收量	附近通常田反當收量	生 育 狀 況
知多郡富貴村	二・三六九	二・五〇八	暑順調ナレトモ稍不齊ナリ
額田郡幸田村	二・四二三	二・五四三	發芽不良ノ爲所期ノ成績ヲ得サリシモ將來有望ト認ム
渥美郡田原町	二・七三五	二・三四六	暑順調(畦幅廣キニ過キタリ)

ハ、地力増進試験

本試験ハ大正七年以降繼續施行セル耕勸ノ深淺ト肥料トノ關係試験ノ殘試験ニシテ同試験ニ供セシ土壤ノ一部ヲ移シテ新ニ開始シタルモノナリ(一區十五歩)

試験區別	施用肥料	玄米反當收量	玄米一升重量	摘	要
堆肥區	堆肥ヲ主トシ少量ノ硫酸及過燐酸石灰ヲ加フ	二・二〇八	三九三・〇	順調ノ生育	
硫酸區	硫酸、過燐酸石灰、葦灰ヲ用フ	二・〇〇八	三九一・〇	終始生育不頁	
無肥料區	大正二年以來無肥料ニテ栽培ス	〇・七九二	三九四・〇		

ニ、插秧ノ方式ニ關スル試験

中耕除草等ノ作業能率ヲ高ムルニ便ニシテ而モ收量ニ惡影響ナキ插秧方式ヲ知ラムトスルニ在リ成績左ノ如シ(一區十二歩弱、一株四本植)

試驗區別	一坪株數	畦幅	株間	條列間隔	玄米反當收量	玄米一升重量	葦反當收量
標準區(二區平均)	四三	一・〇〇	八・五七	五寸	二・三六七	三八八・五	一一九・四
一尺二寸五分單條	四三	一・二五	六・八五	五寸	二・四九四	三七九・〇	一二三・〇
一尺五寸單條	四三	一・五〇	五・七一	五寸	二・三二〇	三八八・〇	一〇八・〇
一尺七寸五分單條	四三	一・七五	四・九〇	五寸	二・二〇三	三八七・〇	九六・八
二尺單條	四三	二・〇〇	四・二九	五寸	二・一五六	三八五・〇	一〇三・八
二尺五寸復條	四三	二・五〇	六・八五	五寸	二・二〇六	三九〇・〇	一〇八・八

右ノ成績ニ依レハ一尺二寸五分乃至一尺五寸ヲ限度トシ夫レ以上ニ畦幅ヲ廣クスルコトハ收量ニ惡影響アルモノノ如シ

ホ、肥料分施ニ關スル試験

本試験ハ左ノ二様ニ分チテ之ヲ施行セリ

其一、所定ノ肥料ヲ悉ク元肥一回ニ施用シタル場合ト之ヲ數回ニ分施シタル場合トノ得失ヲ知ラムトスルモノ

其二、土用明頃ニ於ケル追肥ノ効果ヲ知ラムトスルモノ

各區反當施肥量大豆粕細粉九貫六百匁全粗粉十九貫硫酸二貫過燐酸石灰十貫硫酸加里三貫五百匁石灰十貫トシ、其二ニ於ケル無追肥區ハ八月上旬追肥トシテ施スヘキ粗粉大豆粕五貫ヲ省キタルモノトス(品種榮神力一區二十歩二區制)

試驗區別

玄米反當收量

生育狀況

試驗區別	玄米反當收量	生育狀況
其一 分施區(元肥、七月二十日、八月八日ノ三回ニ分施)	二・四二三	順調ノ生育ナレトモ稍軟弱ノ嫌アリ
其二 追肥區(挿秧ノ際全量施用)	二・三九一	強剛ノ發育ナレトモ肥料ノ缺乏稍早キニ過キタリ
其三 無追肥區(全施用セス)	二・四六七	順調

右ノ成績ニ依レハ稻ノ肥料ハ適當ニ分施スルヲ得策トスルカ如キモ本年ノ如キ氣候ニテハ其ノ効果顯著



ナラス尙繼續試驗ノ要アルヘシ

ハ、紫雲英施用法試驗(二年目)

生産費ノ節減、地力ノ増進並收量ノ増加ヲ圖ルノ目的ヲ以テ紫雲英ヲ主肥トセル稻作ノ適法ヲ知ラムトスルモノニシテ施肥量左ノ如シ

甲、一毛乾田紫雲英施用區

乾燥紫雲英	五〇・〇〇〇	第一回追肥 (六月末)	五〇・〇〇〇	第二回追肥 (七月二十二日)	一五・〇〇〇	計	一一五・〇〇〇
硫酸アンモニア	二・〇〇〇			(八月八日)	二・〇〇〇		二・〇〇〇
過磷酸石灰	五・〇〇〇				五・〇〇〇		一〇・〇〇〇
硫酸加里	三・〇〇〇				三・〇〇〇		三・〇〇〇
石灰	二〇・〇〇〇				二〇・〇〇〇		二〇・〇〇〇

乙、紫雲英刈跡紫雲英施用區

甲ノ乾燥紫雲英三十五貫ヲ減シ元肥四十貫第一回追肥四十貫トシ第二回追肥ヲ省略ス  
試驗ノ成績左ノ如シ(一區三畝十五歩)

區別	玄米反當收量	玄米一升重量	生育狀況
一毛乾田紫雲英施用區	二・三八四	三八〇・〇	最も順調ノ生育ナリシモ風害アリ
紫雲英刈跡紫雲英施用區	二・四四〇	三八一・〇	同
比較用普通肥料區	二・二四〇	三八二・〇	前二區ニ比シ生育劣レリ、風害同様

### 麥 耕 種 概 作 (大正十四年收穫)

#### 麥 耕 種 概

##### 一、種子ノ豫措

イ、種子 當場生産ニ係ルモノヲ用フ

ロ、選種 颯扇及篩ヲ用ヒテ十分精選シタル後大麥ハ比重一・二五稈麥小麥ハ比重一・二二ノ苦鹽汁ニテ選別シ清水ニテヨク洗滌シ鹽分ヲ去リタル後乾燥貯藏ス

ハ、消毒 大麥ニ限り斑葉病豫防ノ爲硫酸銅〇・五%液ニ六時間浸漬シ之ヲ生石灰一%液中ニ浸シタル後陰乾トナシ播種ニ供ス

二、播種期 十一月中旬ヨリ下旬ニ至ル間ニ播種ス但シ移植ヲ行フヘキモノハ十月中旬苗床ニ播種ス

三、苗床 移植スヘキ麥ノ苗床ハ十月中旬畑ヲ耕起シ土塊ヲ碎キ平坦トナシ幅四尺通路二尺ニ繩ヲ以テ區別ヲナシ更ニ播代ヲ淺ク耕起シテ土壤ヲ細碎シ平鍬ニテ壓シ均シ人糞尿ヲ施シ直ニ播種シ種子上ニ糞灰ヲ撒布シ五分内外ノ厚サニ網鋤簾ヲ以テ通路ノ土ヲ篩ヒ掛ケ薄ク糞ヲ被ヒ置クモノトス播代一坪ニ對スル肥料及播種量左ノ如シ

肥料 人糞尿(四倍ニ稀釋シタルモノ) 九 升

灰 三 升

播種量 大麥 一 合 稈小麥 七 勺

四、播種量 本圃一反歩當播種量左ノ如シ

通常播

外國種大麥	四升
日本種大麥	三升
裸小麥	二升五合
廣播(單條式) 大麥	四升
裸小麥	三升三合

但シ粒ノ大小ニ依リ適宜加減ス

五、播種法

前作物收穫後犁ヲ以テ耕起シ石灰ヲ施用スヘキモノハ之ヲ施用シタル後馬肥ヲ以テ縱横ニ搔キ土塊ヲ粉碎シ畑ノ周圍ヲ整形シ備中鍬ニテ土塊ヲ細碎シツツ高低ヲ均シ更ニ廣幅備中鍬ニテ表面ヲ搔キ均シ平坦トナシタル上稍深ク播溝ヲ切り大豆粕過磷酸石灰硫酸加里等ノ固形肥料ヲ施シ平鍬ニテ薄ク間土ヲナシ鍬又ハ足ニテ鎮壓シ液肥ヲ施シ之カ土中ニ滲透スルヲ待チテ種子ヲ播下シ堆肥ヲ施シ然後堆肥ノ隠ルル迄土ヲ覆フ

六、畦

通常播 畦幅 二尺 播幅 三寸内外  
 廣播(單條式) 畦幅 二尺三寸 播幅 八寸

七、移植

十一月下旬乃至十二月上旬之ヲ行フ播種ノ場合ト同様整地ヲ行ヒ畦幅二尺ニ溝ヲ切り人糞尿(若ハ他ノ液肥)ヲ除ク肥料ヲ溝底ニ施用シ深ク土ヲ覆ヒ之ニ株間五寸一本植トナシ液肥ヲ根元ニ施用ス

八、肥料

通常播ニ於ケル反當施肥量左ノ如シ

元肥	追肥	計	施用	法
	一月中旬	二月下旬		

堆肥	200.000		200.000
大豆粕	8.000		8.000
智利硝石		2.000	2.000
人糞尿	70.000		70.000
過磷酸石灰	7.000		7.000
硫酸加里	1.500		1.500
石灰 <small>(小麦ニハ之ヲ省ク)</small>	20.000		20.000

水一斗ニ付三十匁ノ割ニ溶解シ麥條ノ上ニ施用ス  
 四倍ニ稀釋シ麥條ノ上ニ施シ乾クヲ待テ土入ヲナス

廣播普通作ニ於ケル反當施肥量左ノ如シ

堆肥	400.000	追肥	400.000	計
大豆粕	10.000			10.000
全(細粉)		8.000		8.000
人糞尿	140.000			140.000
智利硝石		2.500		2.500
過磷酸石灰	15.000			15.000
硫酸加里	3.000			3.000
石灰	20.000			20.000

小麦ニハ施用セズ

一本植ノ場合ニ於ケル施肥量左ノ如シ

	元肥		追肥		計
	一月中旬	二月下旬	一月中旬	二月下旬	
堆肥	200.000	100.000			300.000
大豆粕	6.000				6.000
全(細粉)		5.000			5.000
人糞尿	40.000				40.000
智利硝石				2.000	2.000
過磷酸石灰	8.000				8.000
硫酸加里	2.000				2.000
石灰	20.000				20.000

小麦ニハ施用セス

九、管理

イ、中耕

- 第一回 一月中旬 第一回追肥後
- 第二回 二月下旬 第二回追肥後
- 第三回 四月上旬
- 第四回 出穂前 根寄

ロ、覆土及踏壓

- 第一回 一月上中旬網鋤簾ヲ以テ四五分ノ厚サニ畦間ノ土ヲ篩ヒ掛ケ土ノ乾クヲ待テ足ニテ踏ミ固ムルモノトス
- 第二回 二月中下旬 前回全様之ヲ行フ

出穂前 倒伏ノ虞アルモノニ就テハ出穂前一二寸ノ深サニ土入ヲナスモノトス

10、收穫

大部分ノ穂ガ黄色ニ變シタル時ヲ適期ト定メ刈取ヲ行フ

11、調製

刈取後圃場ニ擴ケテ乾カシタル後脱穀機ニテ扱落シ藁ニ擴ケテ十分乾燥シ麥摺(大麥ハ白ニテ搗ク)ヲナシ颯扇及篩ニテ精選シ更ニ晴天一日陽乾シ包裝貯藏ス

氣象及作况概要

イ、播種及發芽期 十一月中ノ氣象ハ著シク低温ニシテ十日降雪ヲ見、雨量ハ稍多キ感アリシモ播種當時土濕適當ニシテ作業順調ニ行ハレタリ十二月ニ入り低温乾燥ノ天候打續キ麥ノ發育ハ幾分頓挫ノ傾向ヲ示セリ

ロ、生育初期 一月九日十耗ノ降雨アリタルノミニシテ依然乾燥ニ失シ一月二十九日約二寸ノ積雪アリ

ハ、生育盛期 三月下旬ヨリ四月上旬マテハ晴雨交々到リ氣温ノ昇騰ト適度ノ水濕トニ依リ麥ノ生育ハ益々良好ニ赴キタリ然レトモ平年ニ比シ多少遅延セルノ感アリ

ニ、出穂開花期 四月下旬ハ八回ノ降雨アリ極メテ濕潤ナリシカ四月三十日ヨリ數日間好晴ノ天氣持續

セリ五月七日ヨリ四五日間ハ恰モ梅雨ノ如キ陰鬱ナル天候ニシテ當時出穂開花期ニ際スル大麥稈麥ノ被害ヲ憂ヘタルモ幸ニ前年程ノ大害ナク爾後常ニ低温ナリシモ麥ニ對シテハ何等ノ支障ナク大麥晚熟種並小麦ハ意外ノ增收ヲ見ルヲ得タリ

概言スレハ本年ノ麥作ハ播種前後順調ニシテ其ノ後寒中ヨリ早春ニ亘リ低温乾燥ノ爲生育遅延ノ觀ヲ呈セ

六月				五月				四月				三月				二月			
全月	下旬	中旬	上旬	全月	下旬	中旬	上旬	全月	下旬	中旬	上旬	全月	下旬	中旬	上旬	全月	下旬	中旬	上旬
二二・二	二五・八	二三・〇	二二・八	一九・二	一九・九	一八・九	一八・八	一四・〇	一五・六	一四・四	二二・〇	七・九	九・六	七・一	六・九	三・七	二・二	四・八	三・九
二五・五	二七・四	二五・三	二三・七	二二・六	二二・七	二二・一	二二・一	一七・一	一八・〇	一八・四	一五・一	一一・四	一三・二	一〇・二	一〇・五	七・〇	五・八	七・八	七・二
一六・八	一八・九	一六・一	一五・六	一〇・五	一一・〇	一〇・二	一〇・二	六・六	一〇・〇	四・四	五・四	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
一六九・三	六四・七	六〇・三	四四・三	一八〇・三	四五・四	七五・四	五九・五	一七七・七	二七・八	七九・八	七〇・一	一六八・四	五六・九	五〇・八	六〇・七	一一九・二	二二・八	三九・四	五六・〇
一一	四	三	四	八	一	四	三	二	七	二	三	六	二	三	一	七	二	二	三
二二三・六	七一・五	一七・五	二四・六	一九九・二	一三・九	二二・一	七三・二	一六・五	六九・九	一五・一	三二・五	五〇・一	二九・四	一六・五	四二・二	四九・七	二・三	二・三	四五・一
二〇・六	二二・一	二〇・〇	一九・六	一六・二	一七・七	一五・五	一五・一	一〇・三	一三・四	九・一	八・四	五・一	六・七	五・一	三・五	二・九	二・八	三・三	二・七
	二十六日ヨリ霖雨	温潤	曇り勝、極メテ低温	低温	曇天多シ、低温	一日微霜、雨多シ		温潤	十七日最低零下一度一					十二日雷雨突風(十七八米)	二日強風(十四米五)				低極零下六度九(二日)

シモ四月ニ入り順調トナリ早熟種ノ大麥稈麥ハ霖雨ノ爲多少ノ被害アリタルモ小麥ハ最稔實宜シク銹病等ノ發生ハ一般ニ少クシテ稍平年ニ優ルノ作柄ヲ見タリ

大正十四年  
麥作期中氣象表

月	旬	氣		温		日照 (積算)	降		水 降水量	地温 午前十時 午後十時 廿日平均	備考
		午前十時	氣	氣	氣		回数	降水			
一月	全月	四・二	七・五	(-)	二・二	一七〇・五	三	一五・六	二・九		
	下旬	二・四	六・五	(-)	三・五	五〇・〇	一	四・五	一・九	寒氣酷烈	
	中旬	三・八	六・七	(-)	一・九	六四・六	一	〇・七	二・六	降雪ニ回微量 乾燥	
	上旬	六・六	九・四	(-)	一・〇	五九・九	一	一〇・四	四・三		
前年	全月	六・五	一〇・〇	(-)	〇・二	二二八・三	三	一六・一	四・七		
	下旬	五・三	九・四	(-)	一・〇	六三・七	一	九・二	四・〇	十二日積雪一寸二分 低温	
	中旬	六・一	九・一	(-)	一・〇	六一・八	一	四・五	三・九		
	上旬	八・二	一一・七	(-)	一・四	五二・八	一	二・四	六・四		
前年	全月	一一・〇	一四・七	(-)	三・一	一五九・一	五	五〇・七	九・二		
	下旬	九・九	一三・三	(-)	二・〇	四六・二	一	三・七	八・五	低温	
	中旬	一〇・二	一四・四	(-)	〇・二	六四・二	一	四・〇	七・九	十日朝積雪 極メテ低温	
	上旬	一二・八	一六・一	(-)	五・二	四八・七	三	一五・〇	一一・四		

麥作試驗

一、豊凶考照試驗

毎年同一品種ヲ同一ノ耕種法ヲ以テ同一地ニ栽培シ所定ノ時期ニ調査セル生育狀況ヲ既往ノモノト比較對照シ之ニ基キ其ノ年ニ於ケル水稻ノ豊凶ヲ考照セムトスルモノニシテ既記ノ如ク麥作期中ノ氣象ハ冬季ヨリ早春ニ亘リ低温乾燥ノ爲生育遲滯セシカ出穂期以後略ホ順調ニ進ミ成熟期ハ一般ニ遲延セシモ何等收量ニ惡影響ナク大麥ハ平年ニ比シ二割七分五厘稈麥ハ一割六分五厘小麥ハ二割九分ノ何レモ增收ヲ示シ品質概シテ良好ナリ

種別	大正十四年度		平年		比較増減(△印減)	
	收量	一升重量	收量	一升重量	收量	一升重量
大麥三種平均	二・四七一	三〇九	一・九三八	三七	〇・五三	△
稈麥三種平均	一・七五五	三八五	一・五〇六	三八六	〇・二四九	△
小麥三種平均	一・九六四	三七七	一・五三三	三六六	〇・四四二	△

二、品種改良ニ關スル研究

イ、品種見本栽培

優良品種育成用母本ヲ選擇シ且麥類ノ諸形質研究上ノ參考ニ資セムカ爲優良ナル形質ヲ具備セル品種、全國著名品種、本場育成品種及畸形品種等ヲ合セテ大麥二十七種、稈麥四十八種、小麥二十八種ヲ栽培シ其ノ種子ヲ採取セリ

ロ、原種保存栽培

本縣麥獎勵品種ニ編入サレ又ハ將來編入サルヘキ見込ヲ有スル品種ヲ栽培シ嚴密ナル個体選抜ヲ施シ以テ原々種ヲ採取セリ

ハ、人工交配ニ依ル新品種育成

組 合		(一) 交 配		育 種 ノ 目 的	
稈麥三保	×	大麥關	取	最早熟短稈良實種ノ育成	
稈麥三保	×	大麥谷風一號	取	同	
稈麥團子	×	大麥關	取	早熟、短稈、良實(美味)種ノ育成	
稈麥團子	×	大麥谷風一號	取	同	
大麥ゴールテンメロン	×	大麥三保	取	早熟、強稈、耐病性品種ノ育成	
大麥ゴールテンメロン	×	大麥關	取	同	
小麥赤チク二號	×	小麥江島	取	早熟、短稈、耐病性品種ノ育成	
小麥赤チク二號	×	小麥五島西洋	取	同	
(二) 第一世代					
組 合		育 種 ノ 目 的			
稈麥紅梅	×	大麥谷風二號	取	早熟、短稈、豊産ノ稈麥育成	
小麥伊賀筑後	×	小麥フルツ	取	早熟、短強稈、良實種ノ育成	

(三) 第二世代

組合セ

育種ノ目的

栽植株數

選抜株數

大麥 ゴールアンメロン × 稈麥 香

川

強健ナル稈麥ノ育成

三一五〇

四〇

大麥 ゴールアンメロン × 大麥 大正

麥

早熟強健ナル大麥ノ育成

九七五

〇

小麥 白 茨 × 小麥 筑

摩

短強稈ナル早生小麥育成

三一五〇

四〇

小麥 赤 坊主 × 小麥 伊賀筑

後

早熟強健ナル小麥育成

三一五〇

四〇

(四) 雜種系統比較

組合セ

(世代)

系統數

選抜系統數

選抜株數

大麥 谷 風 × 大麥 大正

麥

(F3)

四〇

三〇

二

大麥 大正 麥 × 大麥 豐

年

(F3)

四〇

四七

一

稈麥 香 川 × 大麥 三

重

(F4)

七

一〇

一

稈麥 紅 梅 × 大麥 谷

風

(F4)

二三

〇

〇

小麥 西 國 × 小麥 赤坊

主

(F4)

一〇

五

〇

稈麥 紅 梅 × 稈麥 コピンカタギ

主

(F5)

五

一〇

〇

小麥 赤 坊主 × 小麥 赤坊

主

(F5)

六

一〇

〇

大麥 谷 風 × 大麥 三

重

(F5)

六

一六

〇

小麥 白 坊主 × 小麥 白

坊

(F6)

二

〇

〇

大麥 豐 年 × 大麥 谷

風

(F6)

一二

〇

一

ニ、純系分離

左記品種ニ就キ簡易ナル純系分離ヲ行フ爲選抜圃ヲ設ケ選抜ヲ行ヒタリ

小麥 中	村 × 小麥 赤	チ	ク	(F7)	一三	〇	二
稈麥 香	川 × 大麥 谷	風	ク	(F7)	六	〇	三
大麥 穗	揃	一三〇〇	〇	一〇	八名郡農會		
大麥 チ	ク	六〇〇	〇	一一	丹羽郡農會		
大麥 白	麥	六〇〇	〇	〇	丹羽郡農會		

品種名

栽植株數

選抜株數

種子取寄先

ホ、品種及系統收量比較試驗(單條廣播法ニ據ル)

(一) 大麥

品 種 名	來 歴	子 反當收量	子 一升重	品 質	摘 要
比較用 谷風一號	本場育成(分離)	三・九四九	三三〇・二	中	極メテ順調良好ノ生育、雨害稍多
富山大正	富山縣ヨリ取寄	四・〇七四	二九四・〇	稍不良	早熟短稈長芒ノ品種、稈柔軟ニシテ雲紋病多ク
在來短芒	岡山縣ヨリ取寄	四・一九九	三八〇・〇	中	谷風型ニシテ草丈稍高ク稍晚キ相異アリ
茨城關取	茨城縣ヨリ取寄	三・九六八	三〇〇・〇	中	前種ト同型
千葉關取	千葉縣ヨリ取寄	三・九六八	三〇〇・〇	中	穂揃種ト相異シタル爲發棄ス
群馬關取	群馬縣ヨリ取寄	三・九八一	三六〇・〇	稍良	谷風二號ニ似タル形態

品種名	來歴	子反當收量	一子升重量	品質	摘	要
比較用 谷風一號	本場育成(分離)	三・七六五	三二一・〇	中	生育順調、雨害稍多シ	
交野一號	畿内支場ヨリ配付	三・七八一	三二一・〇	稍不良	谷風ト同型ニシテ雨害少シ、有望	
交野二號	同	三・九一八	三二七・〇	稍良	前種ト類型ナルモ見込少シ	
香谷一號	本場育成(交配)	四・四〇七	二七五・〇	不良	晩熟、長稈、白銹病多ク見込ナシ	
香谷二號	同	三・七九九	三二七・〇	中	全	
谷風二號	本場育成(分離)	三・六九二	三三一・〇	中	生育順調雨害少ク良好	
比較用 谷風一號	本場育成(分離)	三・三三二	三七一・一	中	生育順調ナルモ雨害多シ	
豊谷一號	本場育成(交配)	四・一八	三〇四・〇	稍不良	豊年型ニシテ草丈高ク見込ナシ	
豊谷二號	同	三・五二二	三二〇・五	稍不良	豊年型ニシテ短稈、白銹病多シ	
豊谷三號	同	三・四三二	三二二・〇	中	豊年型ニシテ短稈、稍有望	
豊谷四號	同	三・五九六	三二九・〇	中	晩熟、長稈、見込ナシ	
豊谷五號	同	三・五四五	三二二・〇	中	晩熟、長稈、見込ナシ	
豊谷六號	同	三・三二七	三二五・〇	中	豊年型、短稈ニシテ有望	

(二) 裸 麥

品種名	來歴	子反當收量	一子升重量	品質	摘	要
兵庫紅梅	本場育成(分離)	二・八六七	三八五・七	中	生育順調	
兵庫縣ヨリ取寄	兵庫縣ヨリ取寄	二・八八三	三八五・〇	稍良	粗六條短芒短稈、有望	

(三) 小 麥

品種名	來歴	子反當收量	一子升重量	品質	摘	要
愛媛播磨	愛媛縣ヨリ取寄	二・八六七	三八二・〇	稍良	コピン型短稈、有望	
長崎膝八	長崎縣ヨリ取寄	二・六二〇	三七六・〇	稍不良	コピン型短稈、稍有望	
岐阜八石	岐阜縣ヨリ取寄	三・〇七六	三七三・五	中	短稈、有望	
比較用 コピンカタギ一號	本場育成(分離)	二・七六一	三八六・五	中	生育順調	
コピン三號	畿内支場配付	二・八五九	三八三・〇	中	コピンカタギ一號ト變リナシ	
於染五號	同	二・七〇二	三八三・〇	稍良	香川ト同型ニシテ稈ニ着色アリ有望	
共進會二號	同	二・六九二	三九〇・〇	稍良	香川ト同型	

品種名	來歴	子反當收量	一子升重量	品質	摘	要
比較用 赤チク一號	本場育成(分離)	二・七五九	三七二・五	中	生育順調	
京都珍子	京都府ヨリ取寄	二・六五四	三六六・五	稍良	生育良好ナレトモ稍不整	
伊賀筑後	愛媛縣ヨリ取寄	二・五九五	三六三・〇	中	早熟ニシテ強稈、稍有望	
茨城白茨	茨城縣ヨリ取寄	二・五七一	三八二・〇	良	最短稈分蘖多ク有望ナレトモ稈稍弱シ	
白坊×白チク一號	本場育成(交配)	二・六五八	三七一・〇	中	赤チクノ稈ヲ白クシタル形、病害多シ	
白坊×白チク二號	同	二・六七六	三四四・〇	稍不良	短稈、晩熟、病害多ク見込ナシ	
比較用 赤チク一號	本場育成(分離)	二・三三二	三六八・八	中	生育順調	
大分筑摩	大分縣ヨリ取寄	二・二九九	三五七・〇	稍不良	短稈ニシテ倒伏少キモ病害多ク見込少シ	

品 種 名	來 歴	子 反當 收量	子 一升 重量	品 質	摘 要
赤坊主辛酉六	本場育成(分種)	二・四六五	三七三・五	中	生育順調、稍短程、有望
赤坊主辛酉一	同	二・五八三	三七三・〇	良	稍細程ニシテ弱シ
赤坊主辛酉一	同	二・五三三	三七二・〇	中	生育順調、稍長程、有望
赤チク辛酉六	同	二・五一	三六三・五	中	赤稈、有望
比較用赤チク一號	同	二・三五	三六七・三	中	生育順調

右ノ外中村×赤チクノ固定系統六種ニ就キ全試驗ヲ施行シタルモ著シク優良ト認ムルモノナシ  
三、普通 作

本縣獎勵品種ヲ稍大面積ニ栽培シテ各品種ノ性狀ヲ參觀人其ノ他ニ周知セシメ併テ之カ栽培法ノ模範ヲ示サムトスルモノニシテ栽培ノ方法及收量左ノ如シ

品 種 名	栽培面積 作付方法	出穂期	成熟期	子 反當 收量	品 質	生 育 狀 況
大麥 谷風一號	二・二九 複條廣播	四月二八	六月三	四・〇三	稍不良	肥料不足ノ感アリ雨害約二割
大麥 改 良	二・二九 單條廣播	五月三	六月八	三・八八	中	生育畧ホ順調
稈麥 香川一號	二・二九 複條廣播	五月二	六月七	三・三〇九	良	生育畧ホ順調
稈麥 コピンカタギ一號	二・二九 單條廣播	五月三	六月九	三・二〇七	中	生育畧ホ順調
小麥 赤チク一號	二・二九 複條廣播	五月〇	六月九	二・四七八	中	生育順調、稔實稍不良
小麥 赤坊主	二・二九 單條廣播	五月九	六月七	二・四八六	良	生育畧ホ順調

陸 稻 作

耕 種 梗 概

- 一、種 子 唐箕選並鹽水選ヲ行フ
- 二、播種期 五月十五日ヨリ二十五日ニ至ル間
- 三、播種法 畦幅二尺ニ作付セラレタル麥ノ條間ニ播種スルモノニシテ先ツ土ヲ麥ノ片側ニ寄セ掛ケ淺溝ヲ設ケ足ニテ踏ミ付タル後人糞尿ヲ施シ土中ニ滲入スルヲ待チテ種子ヲ條播シ糞灰及堆肥ヲ種子上ニ施シタル後土ヲ覆フ
- 四、播種量 反當三升五合乃至四升トス
- 五、肥料 反當施肥量左ノ如シ 但シ前作等ノ關係ニ依リ適宜増減ヲナス

肥 料 名	元 肥	第一回追肥 六月三十日	第二回追肥 七月二十日	計	施 用 法
堆 肥	100・000	—	—	100・000	畦ノ一側ニ溝ヲ設ケ施シタル後土ヲ覆フ
大 豆 粕	—	八・000	—	八・000	畦ノ一側ニ溝ヲ設ケ施シタル後土ヲ覆フ
人 糞 尿	70・000	—	20・000	100・000	四倍ニ稀釋シ施用ス
過 磷 酸 石 灰	—	六・000	—	六・000	大豆粕ト混合施用
藥 灰	15・000	—	—	15・000	大豆粕ト混合施用

六、管 理 六月十日ヨリ七月二十五日迄ニ中耕三回行ヒ最後ニ根寄ヲナス除草ハ隨時之ヲ行ヒ乾燥ニ失スル場合ハ適宜灌水ヲ行フ



七、收穫 水稻ニ準ス

作 况 概 要

本年陸稻ノ作況、播種以來八月上旬ニ至ル間ハ多濕ニシテ生育順調ナリシカ八月中下旬乾燥ニ失シタル爲一部旱害ヲ蒙リ九月十一日出穂後暴風ニテ擦傷ヲ受ケタルモノ多ク且穂首稻熱病ノ發生著シク作柄極メテ不良トナレリ

一、陸稻品種比較試験

農林省元農事試験場九州支場ヨリ配付ヲ受ケタル九種ニ就キ之カ優劣ヲ比較セムカ爲施行セリ其ノ成績左ノ如シ

品 種 名	出穂期	成熟期	反當收量米	一升重量米	摘 要
陸稻二號	九・一	一〇・二八	〇・五四	三六五	螟虫第二化ノ被害甚大ナリ
孝之助	八・二五	一〇・二二	〇・八八	三七四	同
長柄早生	八・二四	一〇・二二	一・四〇	三六五	病虫害少シ
戦捷穂	八・二三	一〇・二〇	一・八七	三七七	同
てれんす	八・二三	一〇・二〇	一・五三	三七四	同
反二石	八・二二	一〇・一〇	一・〇〇	三七九	螟虫被害稍大ナリ
豊年	八・二二	一〇・一〇	一・三三	三七九	同
坊主糯	八・二二	一〇・一〇	三・七	三六二	螟虫及穂首稻熱病甚多シ
北海道糯	八・二三	一〇・一九	一・五二	三五〇	螟虫及穂首稻熱病ノ被害甚大ニシテ殆ト全滅セリ

比較用 大畑早生	比較用 早不知	比較用 晩生糯
八・一八	八・一九	八・二八
一〇・二二	一〇・二二	一〇・二七
一・七四	一・〇八一	〇・七七〇
三七六	三七三	三七五
病虫害少ク最良好	病虫害少キモ生育稍不良	螟虫ノ被害多シ

右ノ如ク本年ハ各種共螟虫ノ被害多ク且生育不均一ナリシ爲將來ノ見込ヲトスルヲ得ナリキ

二、人工交配第二世代栽培 支晩三十三號×戦捷第二世代三千百六十八株ヲ栽植シ其ノ中有望ト認ムルモノ十六株ヲ選出セリ

甘 藷 作

畑麥跡作トシテ栽培セル甘藷作ノ一部分ニ於テ左記品種試験ヲ施行セリ

甘藷品種比較試験

挿植時期 自五月二十三日至六月二日  
收 穫 十月三十日(特性ノ調査ハ收穫當時ノモノ)

品 種 名	種 類 又 ハ 種 取 寄 先	反當收量塊	大小形状	皮 色	塊 特 性	備 考
紅 赤	本場在來	四七・五	中、紡錘	鮮 紅	肉 質 食 味	貯性大ナリ
青 芽	西春日井郡	三八七・〇	中、紡錘	黄 白		
本 藷	西春日井郡	四〇二・〇	中、紡錘	淡 紅		
花 魁	埼玉縣ヨリ取寄	六八二・〇	中、長形	紫 紅	紫 帶 紫 白	貯性大ナリ

品名	種名	種苗取寄先	播種塊	大小形状	皮色	肉色	肉質	食味	備考
七福	愛媛縣ヨリ取寄	五九七・〇	中、紡錘形	黄白	黄白	粉	中上		
赤芽	渥美郡	二八〇・五	中、不正	帶紅白	黄白	粉	中上		
青芽	渥美郡	三三三・一	中、不正	黄白	白	粉	中上		
京蓆	渥美郡	四三三・〇	中、不正	黄白	白	粉	中上		

綠肥作

水田裏作トシテ紫雲英約一町歩ヲ作付ケ全部盛花期ニ刈採リ乾燥紫雲英トシテ稻作肥料ニ供セリ、播種期ハ九月二十八日播種量反當二升トシ十二月下旬肥料トシテ過燐酸石灰八貫糞灰十貫ヲ施用シ防寒ノ爲反當四十貫ノ切葉ヲ散布セリ

種子ハ左ノ各地ヨリ取寄セ之ヲ別々ノ田區ニ作付セリ

- 一、岐阜縣本巢郡合渡村產業組合 (晩生種)
  - 二、岐阜縣本巢郡本田村關谷俊治 (全)
  - 三、愛知縣丹羽郡樂田村吉野兼次郎 (全)
  - 四、愛知縣東春日井郡小牧町採種組合 (全)
  - 五、愛媛縣温泉郡小野村大字水泥採種組合 (全)
- 各田區ニ於ケル生育狀況並收量左ノ如シ

種目	生育反當收量	四日間乾燥後	生育狀況
乙十五號田	七三四・一	一一・四四	發育稍不十分ノ感アリ
原一號田	一一三九・一	一〇・九八	發育良好ニシテ長キモノハ三尺餘ニ達セリ
原六號田	八四二・一	一一・二九	發育不良ノ部分アリ一般ニ生育不十分ナリ
構外十號田	九七二・九	一二・六七	生育順調
關谷產 原七號田	一一二八・九	一〇・八六	生育最良好、莖葉幾分細小ノ感アリ
構外六號田	一〇九八・〇	一二・七九	生育順調
吉野產 構外七號田	八七三・〇	一四・三三	發芽ヲ害セルモノアリ一般ニ生育不十分ナリ
構外十二號田	九一五・〇	一一・八三	生育中庸
小牧產 構外八號田	七五〇・〇	一四・五三	排水不良ノ爲生育十分ナラス
水泥產 原八號田	一一五二・〇	一〇・四六	莖葉肥大ニシテ生育最良好ナリ

米麥原種圃

一、水稻原種圃

水稻原種圃ハ本場構外接續地ニ於テ一反歩ヲ經營セリ  
イ、供用品種、育成ノ方法並特性

品名	育成方法	特性ノ概要
愛知愛國三號	純系淘汰法ニ依リ本場ニ於テ在來愛國種ヨリ選出セルモノ	早稻、愛國ト同型ニシテ米質良シ

品 種 名	育 成 方 法	特 性 ノ 概 要
愛知器量好二號	純系淘汰法ニ依リ本場ニ於テ在來器量好ヨリ選出セルモノ	中稻、器量好ト同型ニシテ米質良好
愛知仲好	本場ニ於テ白玉ニ器量好ヲ交配シテ育成シタルモノ	中稻、短稈、分蘖多、米質良、病害多シ
愛知三河錦三號	純系淘汰法ニ依リ本場ニ於テ在來三河錦ヨリ選出セルモノ	中稻、在來三河錦ヨリ丈低ク分蘖多シ
愛知榮神力	本場ニ於テ神力ト三河錦トヲ交配シタルモノ	晚稻、神力ニ似テ稻熱病ニ強シ
愛知神力三號	純系淘汰法ニ依リ本場ニ於テ在來神力ヨリ選出シタルモノ	晚稻、神力ニ似テ稍早熟、米質良好
畿内剛力	畿内支場ヨリ配付ヲ受ケ品種比較試験ニ於テ優良ト認めタルモノ	晚稻、短稈、分蘖多、脱粒難
京都旭	京都府ヨリ取寄セ品種比較試験ニ於テ優良ト認めタルモノ	晚稻、稻熱病少ク米質良、脱粒易
愛知平和糯	本場ニ於テ神力ニ永田糯ヲ交配シテ育成セルモノ	晚稻糯、豊産良質ナレトモ性弱シ

ロ、作付反別、原種生産數量及配付數量

品 種 名	作 付 反 別	生 産 數 量	配 付 數 量	
			原 種 配 付 量	其 他 配 付 量
愛知愛國三號	一・〇五	〇・二五〇	〇	〇・〇四九
愛知器量好二號	一・〇〇	〇・一六五	〇・〇八〇	〇・〇八一
愛知仲好	二・〇五	〇・五六〇	〇・一四〇	〇・〇六九
愛知三河錦三號	一・三三	〇・三六〇	〇・一一〇	〇・一七一
愛知榮神力	五・一〇	一・三七〇	〇・二八〇	〇・四一一
愛知神力三號	三・一一	〇・七八〇	〇・二六〇	〇・一三〇
畿内剛力	一・三三	〇・四一〇	〇・〇八〇	〇・〇七四
計				〇・一五四

京都旭	二・一〇	〇・六一〇	〇	〇・二八〇	〇・二八〇
愛知平和糯	一・一〇	〇・四〇五	〇・一六〇	〇・二四	〇・二八四
計	二〇・一六	四・九一〇	一・一一〇	一・三三二	二・四九一

ハ、原種圃ヨリ配付セル種子ニ對スル世評

愛知愛國三號 在來愛國種ニ比シ米質特ニ良好ナル点好評アリ(但シ山間地方ニ限ル)

愛知器量好二號 在來器量好種ニ比シ米質一段ト向上セル点大ニ歡迎サル

愛知仲好 中稻良質ノ品種トシテ一般ニ好評アリ但シ本年ハ稻熱病ノ發生多ク成績不良ノモノアリ

愛知三河錦三號 淺キ山間地方ニ最好評アリ在來種ニ比シ米質稍劣ルモ草丈低キ点喜ハル

愛知榮神力 形態神力ニ近クシテ稻熱病ニ對スル抵抗力強ク且米質良好ナル爲縣下一般ニ好評アリ

愛知神力三號 在來神力種ニ比シ丈低ク稍早熟ニシテ特ニ米質ノ著シク向上セル点ヲ歡迎サル病害發生地ニハ不評ナリ

畿内剛力 病害稍少ク脱粒シ難キ点ニ於テ一部ニ歡迎サルルモ病害多キ地方ニハ適セストノ評アリ

京都旭 病害少ク品質良好ナルヲ以テ大ニ好評ヲ博シ近年之カ普及最モ顯著ナリ

愛知平和糯 收量多キ糯トシテ縣下大部分ニ最歡迎セラレ之カ普及著シキモノアリ

二、麥原種圃

麥原種圃ハ本場構外接續地ニ於テ三反歩ヲ經營セリ

イ、供用品種、育成方法並特性

品 種 名	育 成 方 法	特 性 ノ 概 要
大麥 愛知谷風一號	(純系淘汰法ニ依リ本場ニ於テ谷風在來種ヨリ選抜シタルモノ)	早熟短程ニシテ耐肥性強ク雨害多シ
大麥 愛知谷風二號	同	前種ニ似テ熟期數日晩ク雨害稍少シ
大麥 改 良	品種比較試驗ニ於テ優良ト認メタルモノ	稍長程ニシテ倒伏シ易キ處アルモ收量多シ
稈麥 愛知香川一號	(純系淘汰法ニ依リ本場ニ於テ香川在來種ヨリ選抜シタルモノ)	短程分蘗多品實良病害多シ
稈麥 愛知コピンカタギ一號	(純系淘汰法ニ依リ本場ニ於テコピンカタギ在來種ヨリ選抜シタルモノ)	稍長程ニシテ比較的強健ナリ
小麥 愛知赤チク一號	(純系淘汰法ニ依リ本場ニ於テ赤チク在來種ヨリ選抜シタルモノ)	短程分蘗多シ小粒、病害多シ
小麥 赤 坊 主	品種比較試驗ニ於テ優良ト認メタルモノ	長程品實良病害少シ

ロ、作付反別、原種生産數量及配付數量

品 種 名	作 付 反 別	生 産 數 量	配 付 數 量	
			原種配付量	其ノ他配付量
愛知谷風一號	五・三	〇・四四〇	〇・二四〇	〇・〇九六
愛知谷風二號	三・二	〇・三九〇	〇・一九〇	〇
改 良	二・二	〇・三四〇	〇・一九〇	〇・〇五六
愛知香川一號	三・七	〇・五二〇	〇・二二〇	〇・二八二
計				〇・二九一

ハ、原種圃ヨリ配付セル種子ニ對スル世評

各品種共生育狀況並品質齊一ニシテ黑穗病、斑葉病等極メテ稀ナルヲ以テ一般ニ好評ナルカ品種別世評トシテハ

大麥 愛知谷風一號	多肥ニ耐ヘ廣播栽培ニ適スルト早熟ナル爲蔬菜栽培地ニ於テ好評アリ病害多ク且雨ノ爲腐粒ヲ生シ易キヲ以テ往々成績不良ノ場合アリ	四・〇〇	〇・五七〇	〇・三〇〇	〇・三〇元
大麥 愛知谷風二號	前種ト全型ニシテ多收用ニ適シ粒着稍粗キ爲雨害少ク且熟期カ養蠶上簇期ヲ過キタル後ナル爲作業上前種ヨリモ本種ヲ歡迎スル向多シ	四・一七	〇・五七〇	〇・二二〇	〇・一〇〇
大麥 改 良	山間地、瘠薄地等ニ於テハ歡迎サルルモノアレトモ平坦部ニ於テハ希望者漸減ノ傾向ニ在リ	三・〇四	〇・四六〇	〇・二二〇	〇・〇六八
稈麥 愛知香川一號	瘠地又ハ病害多キ地方ニ於テハ往々不評アレトモ肥沃地ニ於テハ最モ成績良好ナリ	二・七〇	三・二七〇	一・九二〇	〇・四三〇
稈麥 愛知コピンカタギ一號	地味稍瘠薄ナル地方又ハ山間部ニ普及著シク一般ニ好評アリ	計			二・三五〇
小麥 愛知赤チク一號	三河東部ニ於テハ成績概ネ不良ナレトモ其ノ他ノ地方ニテハ概ネ好適シ殊ニ畑地用トシテ適スルカ如シ				

小麦赤坊主 三河東部又ハ瘠地ニ於ケルニ毛作用トシテ最モ好適シ著シク之カ普及ヲ見タリ  
 種苗配付

米麥原種圃生産種子以外試作其ノ他ノ目的ヲ以テ配付セル種苗ノ種類、數量並配付人員左ノ如シ

品 種 名	品 種 數	無 價 配 付		有 價 配 付		其ノ他
		數	量	數	量	
水 稻	二	三	三五四	二	二六四	水害地ニ對シ縣ノ命令ニ依リ三十石無價配付ヲ爲ス
陸 稻	一	三	〇・〇九三	一	四五	
粟 麥	八	〇	〇・一六六	三	三四	
大 麥	二	〇	〇・一一〇	一	一八	
小 麥	四	〇	〇・二六八	二	二五	

農 藝 化 學 部

水 稻 作

水稻耕種梗概

- 一、供試品種 榮神力
  - 二、苗 本場水田式苗代ニシテ仕立テタルモノヲ用フ
  - 三、本田整地 備中鍬ニテ耕起シ土塊ヲ碎キ灌水シ插秧ニ先チ施肥シ備中鍬ニテヨク肥料ヲ土中ニ混淆セシメ代掻ヲナシタル後插秧ス
  - 四、插秧期 六月二十七日
  - 五、株數並苗數 坪當五十株(一尺×七寸二分)一株四本植
  - 六、除草・管理 種藝部普通作ニ準ス
  - 七、收穫・調製 穂首淡批把色ニ變色シタルトキ刈取り數日間稻架ニ掛ケ日乾ノ上扱落シ充分蕚乾ヲナシタル後糶摺精選ス
- 調 査 事 項
- 一、插秧當時ノ調査 草丈・色合・莖ノ剛柔等ニ就キ調査ス
  - 二、生育調査 七月下旬・八月下旬・成熟期ノ三回ニ亘リ草丈・分蘗數・葉色等ニ就キ調査ス

三、出穂成熟期調査 出穂期・穂揃期・成熟期ヲ調査ス

四、收量調査

畦畔ニ接セルニ列ヲ除キ内部ヲ刈取リ籾ノ重量・籾一升ノ重量・藁ノ重量・糞ノ重量・糞一升ノ重量・玄米ノ重量・玄米一升ノ重量・屑米ノ重量・糶摺歩合・品質(特殊ノモノニ就テハ硬度千粒重量其ノ他)ヲ調査シテ反當ニ換算ス

五、其ノ他 病虫害發生ノ有無・被害歩合・風水旱害ノ多少等ニ就キ調査ス

水 稻 試 驗

一、三要素適量試驗

本場土壤ニ對シ三要素ノ適量ヲ明ニセムカ爲左ノ設計ニ依リ圃場試驗ヲ繼續施行セリ(收量ハ總テ玄米反當石數ヲ表ハシ一升重ハ玄米トス以下之ニ倣フ)

試驗區別	反當施肥量			備考
	堆肥	石灰	硫酸アンモニウム	
窒素適量試驗	四五〇	五〇	不定	各試驗共七區ニ分ツ、堆肥ハ各試驗共無 窒素區ニハ施用セズ、堆肥中ノ窒素濃度 加里ハ各計算ノ上硫酸アンモニウムヲ 加シテ各區ニ以テ含有成分ヲ補 給セリ尚堆肥中ノ三要素量ハ其ノ他ノ區 ニ於テハ計算ニ加ハス
磷酸適量試驗	四五〇	五〇	不定	
加里適量試驗	四五〇	五〇	不定	
加里適量試驗	四五〇	五〇	不定	

堆肥・石灰ハ挿秧數日前其ノ他ノ肥料ハ挿秧前日・七月下旬・八月上旬ノ三回ニ分施セリ

區別	大正十四年		比較増減(△ハ減)		自大正二年至大正十四年十箇年平均	
	收量	一升重	收量	一升重	收量	一升重
無窒素	一・四〇二	三八六	二・一五〇	三八〇・四	△〇・七四八	五・六
窒素五百匁	一・七三三	三八七	二・二四二	三八〇・六	△〇・五〇八	六・四
一貫五百匁	一・六八四	三八八	二・三六二	三七九・七	〇・六七八	八・三
二貫五百匁	二・〇三二	三八三	二・四五八	三七八・九	〇・四二七	四・一
三貫五百匁	二・一八六	三八五	二・五二四	三七九・五	〇・三三八	五・五
無磷酸	二・四五四	三八三	二・六五五	三七八・六	〇・四四〇	五・四
一貫五百匁	二・〇〇五	三八六	二・二六五	三七九・八	〇・二六〇	六・二
二貫五百匁	二・〇四四	三八三	二・四四五	三七八・九	〇・四一一	四・一
三貫五百匁	二・四〇九	三八八	二・四三三	三七八・三	〇・〇四四	九・七
無加里	二・〇六二	三八五	二・四九四	三七八・九	〇・四三二	六・一
一貫五百匁	二・二〇三	三八二	二・四四三	三七八・五	〇・四四〇	三・五
二貫五百匁	二・二二二	三八四	二・三六六	三七八・六	〇・二六四	五・四
三貫五百匁	二・一五五	三八一	二・五八一	三七九・一	〇・四二六	一・九
無加里	二・三七四	三八五	二・五〇四	三七九・四	△〇・一三〇	五・六
一貫五百匁	二・三三九	三八四	二・五二二	三七九・〇	〇・一九三	五・〇
二貫五百匁	二・三九九	三八六	二・四八九	三七九・四	〇・〇九〇	六・六
三貫五百匁	二・四〇三	三八四	二・六二八	三七九・三	〇・二二五	四・七
無加里	二・二五七	三八四	二・五六五	三七八・八	〇・三〇八	五・二
一貫五百匁	二・三四四	三八六	二・五八〇	三七九・三	〇・二二六	六・七
二貫五百匁	二・二五九	三八三	二・五七四	三七九・五	〇・三二六	三・五
三貫五百匁	二・二五九	三八三	二・五七四	三七九・五	〇・三二六	三・五

區別	大正十四年		比較増減(△ハ減)		自大正二年至大正十四年十箇年平均	
	收量	一升重	收量	一升重	收量	一升重
無窒素	一・四〇二	三八六	二・一五〇	三八〇・四	△〇・七四八	五・六
窒素五百匁	一・七三三	三八七	二・二四二	三八〇・六	△〇・五〇八	六・四
一貫五百匁	一・六八四	三八八	二・三六二	三七九・七	〇・六七八	八・三
二貫五百匁	二・〇三二	三八三	二・四五八	三七八・九	〇・四二七	四・一
三貫五百匁	二・一八六	三八五	二・五二四	三七九・五	〇・三三八	五・五
無磷酸	二・四五四	三八三	二・六五五	三七八・六	〇・四四〇	五・四
一貫五百匁	二・〇〇五	三八六	二・二六五	三七九・八	〇・二六〇	六・二
二貫五百匁	二・〇四四	三八三	二・四四五	三七八・九	〇・四一一	四・一
三貫五百匁	二・四〇九	三八八	二・四三三	三七八・三	〇・〇四四	九・七
無加里	二・〇六二	三八五	二・四九四	三七八・九	〇・四三二	六・一
一貫五百匁	二・二〇三	三八二	二・四四三	三七八・五	〇・四四〇	三・五
二貫五百匁	二・二二二	三八四	二・三六六	三七八・六	〇・二六四	五・四
三貫五百匁	二・一五五	三八一	二・五八一	三七九・一	〇・四二六	一・九
無加里	二・三七四	三八五	二・五〇四	三七九・四	△〇・一三〇	五・六
一貫五百匁	二・三三九	三八四	二・五二二	三七九・〇	〇・一九三	五・〇
二貫五百匁	二・三九九	三八六	二・四八九	三七九・四	〇・〇九〇	六・六
三貫五百匁	二・四〇三	三八四	二・六二八	三七九・三	〇・二二五	四・七
無加里	二・二五七	三八四	二・五六五	三七八・八	〇・三〇八	五・二
一貫五百匁	二・三四四	三八六	二・五八〇	三七九・三	〇・二二六	六・七
二貫五百匁	二・二五九	三八三	二・五七四	三七九・五	〇・三二六	三・五
三貫五百匁	二・二五九	三八三	二・五七四	三七九・五	〇・三二六	三・五

二、紫雲英ニ對スル石灰加用試験

乾燥紫雲英ヲ施用スル場合ニ併用スヘキ石灰ノ適量及其ノ連用カ收量品質並土壤ノ性質ニ如何ナル影響ヲ及ホスカヲ知ラムトスルモノニシテ左ノ設計ニ依リ繼續施行セリ

試験區別	施用期		共通肥料	備考
	元肥	七月月中旬		
無石灰	—	—	乾燥紫雲英 (元肥) 七月二十日 六十貫	
石灰三十貫加用	一五	一五	堆肥 (元肥) 同 三百貫	
全六十貫加用	四五	一五	過磷酸石灰 (元肥) 七月二十日 二五五貫	
全九十貫加用	六〇	三〇	硫酸加里 (元肥) 七月二十日 一貫	
			硫酸加里 (元肥) 八月十旬 一貫	

乾燥紫雲英ハ二寸程ニ截斷シタルモノヲ六月十六日鋤起後施用シテ淺ク土中ニ混入シ追肥ノモノモ全様施用シ直チニ除草器ニテ土中ニ埋入ス  
試験ノ成績左表ノ如シ

區別	大正十四年		大正十三年		備考
	收量	一升重	收量	一升重	
無石灰	二・〇九〇	三八五	二・四七六	三八七	大正二年ヨリ大正十二年ニ至ル十箇年ハ生草紫雲英ニ對スル石灰加用ノ成績ヲ示ス
石灰三十貫加用	二・一〇三	三八六	三・〇四三	三八五	
全六十貫加用	二・二〇九	三八四	三・三二九	三八七	
全九十貫加用	二・三九五	三八二	三・一〇四	三八八	
			二・六〇七	三六八・〇	

自大正十二年平均 一升重

三、紫雲英ニ對スル磷酸加用試験

乾燥紫雲英ヲ施用スル場合過磷酸石灰加用ノ適量ヲ知ラムトスルモノニシテ左ノ設計ニ依リ繼續施行セリ

試験區別	過磷酸石灰施用量		共通肥料	備考
	元肥	七月月中旬 八月月上旬		
無磷酸	—	—	乾燥紫雲英 (元肥) 七月二十日 七十五貫	
磷酸少量	五	—	硫酸アンモニア (元肥) 七月二十日 四十五貫	
全中量	五	—	硫酸加里 (元肥) 七月二十日 一貫	
全多量	五	—	堆肥 (元肥) 八月十旬 三百貫	
			灰元肥 二十貫	

試験ノ成績次ノ如シ

四、紫雲英ニ對スル磷酸分施肥試験

乾燥紫雲英ヲ施用スル場合過磷酸石灰ノ分施カ米ノ收量ニ如何ナル影響ヲ與フルヤヲ知ラムトスルモノ

區別	大正十四年		大正十三年		備考
	收量	一升重	收量	一升重	
無磷酸	二・〇七六	三八七	二・八八八	三八五	大正三年ヨリ大正十二年ニ至ル九箇年ハ紫雲英生草ヲ用ヒタル成績トス
磷酸少量	二・二二三	三八六	三・〇二二	三八五	
全中量	二・二〇二	三八八	三・〇七〇	三八九	
全多量	二・一九七	三八三	二・八六二	二・五二四	
			二・五二四	三七八・二	

自大正十二年平均 一升重

ニシテ施肥設計左ノ如シ

試験區別	元肥	七月中旬	八月上旬	共通肥料	乾燥紫雲英	元肥	百二十貫
一回施用	一五	一	一	大 豆	元	七月二十日	六貫
二回分施	七	八	一	硫酸アンモニア	元	肥	一貫
三回分施	五	五	五	硫酸加里	元	八月上旬	二一貫
試験ノ成績左ノ如シ				灰	元	肥	二十貫

大正十四年

大正十三年

五、紫雲英施用法試験

乾燥紫雲英ヲ施用スル場合之カ施用ノ時期並回数如何カ稻ノ生育収量ニ及ホス影響ヲ知ラムトスルモノニシテ左ノ設計ニ依リ繼續施行セリ

試験區別	元肥	七月中旬	八月上旬	共通肥料	硫酸アンモニア	元肥	一貫
一回施用	一二〇	一	一	過磷酸石灰	元	七月二十日	八五貫
二回分施	七五	四五	一	硫酸加里	元	七月二十日	二一貫
三回分施	五五	四五	二〇	灰	元	七月十五日	十五貫

本年度及前年度収量左ノ如シ

區別	大正十四年	大正十三年
一回施用	二・三三七	三・二二一
二回分施	二・四〇一	二・九二六
三回分施	二・三三八	二・九〇四

右ノ成績ニ依リ之ヲ推定スルニ乾燥紫雲英ノ施用ハ本場土壤ノ如キ粘質土性ニテハ數回ニ分施スルヨリモ一回ニ施用スルヲ利トスルカ如シ

六、紫雲英トザートウイツケン肥効比較試験

紫雲英トザートウイツケンノ肥効ヲ比較セムカ爲生草・乾草ニ就キ左ノ設計ニ依リ施行セリ

試験區別	生草量	乾草量	共通肥料
紫雲英生草	八〇〇	一	堆肥
ザートウイツケン生草	八〇〇	一	硫酸アンモニア
紫雲英乾草	一	七五	過磷酸石灰
ザートウイツケン乾草	一	七五	硫酸加里

本年度及前年度収量次ノ如シ



七、有機質肥料肥効比較試験

堆肥・稻藁・紫雲英ノ三種ニ就キ之カ肥効ヲ比較セムトスルモノニシテ堆肥ハ五百貫(稻藁ヲ原料トセル屋外堆肥) 稻藁ハ三百貫、紫雲英ハ生草五百貫(乾燥細斷シテ施用)ヲ何レモ元肥ニ施用シ外ニ共通肥料トシテ大豆粕七貫餘、硫酸アンモニア一貫、過磷酸石灰十二貫餘、硫酸加里三貫、石灰二十貫ヲ適宜分施セリ收量調査ノ成績左表ノ如シ

區別	大正十四年		大正十三年	
	收量	一升重	收量	一升重
堆肥區	二・〇五四	三八一	三・〇五一	三八七
稻藁區	一・九一一	三八五	二・六七九	三八七
紫雲英區	二・二四四	三八八	三・一六五	三八五

八、磷酸アルミナ肥効試験

堆肥ヲ施用スル場合併用スル磷酸肥料中過磷酸石灰ト磷酸アルミナト何レカ肥効多キヤヲ知ラムトスル

モノニシテ基本肥料トシテ堆肥四百五十貫、硫酸アンモニア一貫、藁灰二十五貫、大豆粕二十貫ヲ施用シ之ニ磷酸肥料ノ少量及多量ヲ併用セリ  
試驗區別及收量左ノ如シ

試驗區別	磷酸肥料施用量		大正十四年		大正十三年		
	元肥	七月月中旬	八月月上旬	收量	一升重	收量	一升重
無磷	—	—	—	二・〇〇六	三八六	二・八七八	三八五
過磷酸石灰少量	二・〇	五・〇	—	二・二四一	三八五	三・三〇六	三八五
磷酸アルミナ少量	一・〇	二・五	—	二・二二九	三八五	二・八二一	三八八
過磷酸石灰多量	五・〇	五・〇	—	二・一四三	三八六	二・四八五	三八六
磷酸アルミナ多量	二・五	二・五	—	二・〇八八	三八四	二・八八〇	三八七

九、紫雲英地上部地下部肥効比較試験

紫雲英ノ地上部ト地下部トノ肥効ヲ比較スルヲ以テ目的トシ共通肥料トシテ堆肥三百貫、硫酸アンモニア二貫、過磷酸石灰十三貫、硫酸加里三貫、石灰二十貫ヲ施用セリ  
本年度及前年度收量左ノ如シ

試驗區別	大正十四年		大正十二年		備考
	收量	一升重	收量	一升重	
地上部	二・〇〇七	三八七	三・一六一	三八七	大正十四年七百十五貫五百匁 紫雲英生草施用
地下部	一・八四八	三八三	二・七五九	三八九	同地下
地上部	一・七七三	三八一	二・七六四	三八五	大正十四年四百三十二貫 紫雲英生草施用
地下部	一・五九九	三八六	二・七七一	三八五	同地下

10、麥作紫雲英作跡地比較試驗

麥作及紫雲英作跡地ノ地力並土性ノ變化ヲ知ラムカ爲繼續施行セリ其ノ成績左ノ如シ

試驗區別	大正十四年		大正十三年	
	收量	一升重	收量	一升重
麥作跡地	二・〇三八	三八五	二・九七六	三八五
紫雲英跡地	一・九八〇	三八三	三・〇八九	三八六

二、加里用量試驗

加里肥料ノ多施ト收量トノ關係ヲ知ラムカ爲繼續施行セリ成績左ノ如シ

區別	大正十四年		大正十三年	
	收量	一升重	收量	一升重
無加里	一・九五二	三八六	三・〇〇六	三八七
硫酸加里二貫施用	二・〇九八	三八三	二・六一一	三八五
硫酸加里四貫施用	二・〇六六	三八七	二・七六四	三八五
硫酸加里六貫施用	二・一八一	三八七	二・九二〇	三八七
木灰十五貫施用	二・一二〇	三八〇	二・七七九	三八九
木灰三十貫施用	二・一六六	三八四	二・七九二	三八五

三、木灰施用試驗

木灰ノ適當ナル施用ヲ究ムカ爲繼續施行セリ其ノ成績ハ追肥ト爲シタルモノ僅ニ優レリ

三、紫雲英ニ石灰窒素加用試驗

乾燥紫雲英ヲ施用スル際硫酸アンモニアト石灰窒素トノ何レヲ加用スルヲ以テ得策トナスヤヲ知ラムカ爲繼續施行セリ本年ノ成績ハ硫酸アンモニア區稍優レリ

四、有機質無機質肥料連用試驗

有機質、無機質肥料ノ連用カ米ノ收量並土質ニ如何ナル影響アルヤヲ究ムカ爲繼續施行セリ本年度ノ收量成績ハ無機質肥料ニ屬スル大豆粕、硫酸アンモニア等ヲ施用セシモノ良好ニシテ有機質肥料ニ屬スル綠肥及堆肥ヲ施用セシモノ不良ナルヲ示セリ尙後年ノ成績ヲ見ルノ要アリ

五、窒素被吸收歩合査定試驗 (木框)

主ナル窒素質肥料ニ付キ其ノ被吸收歩合ヲ知ラムカ爲碧海郡六ツ美村大字土井(矢作川沖積土)ノ土壤ニ就キ繼續試驗セリ其ノ成績ハ調査完了ノ上發表スル所アルヘシ

六、磷酸被吸收歩合査定試驗 (木框)

主ナル磷酸質肥料ニ就キ其ノ被吸收歩合ヲ査定セムトスルモノニシテ窒素被吸收歩合査定試驗ト同様ノ土壤ニ就キ繼續施行セリ其ノ成績ハ調査完了ノ上之ヲ示サム

七、鶏糞施用試驗 (土管)

鶏糞ノ施用、施用ノ時期並之ト配合スヘキ適當ナル速効肥料ノ種類等ヲ知ラムカ爲行フ本年度ノ成績次ノ如シ

試驗區別	籾收量	糶收量	藁收量
堆肥ト共ニ堆積施用	二四二・八	三三・六	二二六・五

試験區別	稲收量	糶收量	藁收量
土壤ト堆積、鶏糞二回追肥	二八九・七	六・二	二四五・五
全 鶏糞一回追肥	二二〇・八	三・九	二一五・〇
鶏糞元肥、堆肥加用	三一九・四	八・五	二九八・五
全 元肥、全	三三二・五	一〇・九	三〇六・五
全 元肥、追肥、全	三三三・六	八・九	二八六・〇
全 元肥、全	三三七・八	九・八	三一〇・八
全 堆肥大豆粕加用	三三〇・五	一〇・五	二八一・八
全 堆肥硫酸アンモニア加用	三一九・八	一〇・三	二九二・〇
全 堆肥乾燥紫雲英加用	三三四・〇	一八・八	二七四・〇
全 乾燥紫雲英硫酸アンモニア加用	三〇四・六	一七・五	二六六・三
全 乾燥紫雲英大豆粕加用	三一〇・六	一一・六	二三六・八
鶏糞追肥一回	二三八・〇	六・五	二二二・〇
全 追肥二回	二六五・五	四・三	二三二・五
硫酸アンモニア元肥、鶏糞追肥	二二二・一	八・七	一八一・〇
硫酸アンモニア二回分施	九二・四	四・三	九三・三
全 三回分施	一〇四・四	三・三	一〇六・五
全 四回分施	一二三・六	五・三	一二三・〇

全 元肥 一〇八・一 五・一 一一五・五

一八、沈降磷酸三石灰肥効試験 (土管)

沈降磷酸三石灰、磷酸アルミナ、過磷酸石灰ノ肥効ヲ明カニセムカ爲試験セリ本年度ノ成績沈降磷酸三石灰ハ無磷酸區ニ劣ルノ結果ヲ示セリ

區別	稲收量	糶收量	藁收量
無 磷酸	三〇一・二	六・五	二七五・五
過磷酸石灰	三〇二・〇	八・四	三〇八・〇
磷酸アルミナ	三〇三・二	六・二	三〇五・三
沈降磷酸三石灰	二七二・五	六・七	二八四・三

一九、大豆粕粒形、深度、分施試験(ポット)

大豆粕ノ粒形、施用ノ深淺並分施カ稻ノ生育ニ如何ナル影響アルヤヲ究ムトセリ

二〇、磷酸分施試験 (ポット)

磷酸肥料ノ分施ト肥効トノ關係ヲ知ラムカ爲施行セリ

二一、加里分施試験 (ポット)

加里肥料ノ分施ト肥効トノ關係ヲ知ラムカ爲施行セリ

二二、鶏糞施用試験 (ポット)

鶏糞ノ施用法、施用量ニ就キ土管ニ於ケル同試験ノ如ク試験ヲ施行セリ

二三、刺戟肥料ニ關スル試験 (ポット)

刺戟肥料ノ施用カ稻ノ發育並收量ニ如何ナル影響アルヤヲ究メムカ爲繼續施行セリ本年度ノ成績ハ鹽化マンガン最優レ速肥素、無加用、硫酸マンガンノ順位ニ漸次劣レリ

四、沈降磷酸三石灰肥効試驗 (ポット)

土管ニ於ケルト全樣磷酸三石灰、磷酸アルミナ、過磷酸石灰ノ肥効比較試驗ヲ施行セリ其ノ成績ハ次ニ示スカ如ク磷酸アルミナ、沈降磷酸三石灰畧ホ同等ノ收量ヲ示シ過磷酸石灰、無磷酸ノ順ニ漸次劣ル

試驗區別	収收量	
	糶收量	藁收量
無 磷 酸	四六・二	五一・〇
過 磷 酸 石 灰	四九・五	五六・〇
磷 酸 阿 ル ミ ナ	五一・六	五三・一
沈 降 磷 酸 三 石 灰	五〇・八	五四・〇

麥 作 (大正十四年收穫)

麥作耕種梗概

- 一、供試品種 稈麥・コピンカタギ
- 二、試驗用地 畑、洪積層ノ粘質壤土
- 三、整地及播種 前作物收穫後備中鋤ニテ耕起シ土塊ヲ碎キ石灰ヲ圃上全面ニ撒布シヨク土壤ト混淆セシメ後整地ヲナス
- 整地後幅八寸ノ作條ヲ設ケ肥料ヲ施シ作條内ヲ淺ク耕肥シテ肥料ヲ土中ニ混入セシメ踏壓シ種子ヲ

條播シ堆肥ヲ被ヒ淺ク覆土シ平鋤ヲ以テ輕ク鎮壓ス

- 四、畦 幅 一尺八寸
- 五、播種量 反當三升
- 六、播種期 十一月下旬
- 七、中耕追肥及管理 種莖部普通作ニ準ス  
但シ追肥ハ第一回一月下旬第二回三月月上旬トシ液肥トシテ施用ス
- 八、收 穫 黃熟期ニ刈取り扱落シテ充分莖乾ヲ爲シタル後普通ノ如ク調製ス

調 査 事 項

- 一、生育調査 發芽後生育中庸ナル部分ヲ選定シ一尺間ノ莖數及草丈ヲ調査ス調査ノ時期ハ次ノ如シ  
發芽當時 一月下旬 三月下旬 四月下旬 成熟期  
外ニ發芽期、出穂期、成熟期ノ調査ヲ行フ
- 二、收量調査 各區ノ兩側一畦及各畦ノ兩端一尺ヲ除キテ中央部ヲ刈取り全收量、稈ノ重量、芒稈ノ重量、子實一升ノ重量等ヲ調査シ之ヲ反當ニ換算ス
- 三、子實調査 石灰加用試驗ニ在リテハ粒ノ整否、千粒ノ重量等ニ付キ調査ス

麥 作 試 驗 (大正十四年收穫ニ係リ 作付年度ハ大正十三年度ニ屬ス)

- 一、三要素適量試驗 本場土壤ニ對スル三要素ノ適量ヲ知ラムカ爲繼續施行セリ施肥設計ハ次ノ如シ

試験種別	堆肥	石灰	硫酸アンモニア		過磷酸石灰		硫酸加里		備考
			モニア	アン	灰	加里			
窒素適量試験	400	300	不定	200	70	70	70	堆肥ハ各要素區ニハ之ヲ施用セズ 大正十二年迄ハ石灰五十貫施用ス 堆肥ハ大正十二年迄ハ施用セズ	
磷酸適量試験	400	300	不定	200	70	70	70		
加里適量試験	400	300	不定	200	70	70	70		

右ノ内石灰ハ十一月月上旬圃場全面ニ撒布シ土壤トヨク混淆セシメ堆肥・過磷酸石灰・硫酸加里ハ全量ヲ元肥トシ硫酸アンモニアハ元肥一月下旬三月月上旬ノ三回ニ分施セリ  
收量調査ノ成績左表ノ如シ

試験區別	大正十三年		大正十二年		自大正四年至大正十年七箇年平均	
	收量	一升重	收量	一升重	收量	一升重
無窒素	0.894	356	0.597	356	0.961	380.1
窒素一貫	2.081	362	1.261	360	1.658	382.3
全一貫五百	2.268	362	1.845	360	1.995	378.3
全二貫	2.759	348	2.133	351	2.262	378.3
全二貫五百	2.914	359	1.838	345	2.597	371.4
全三貫	2.910	355	2.332	343	2.734	369.0
無磷酸	1.350	350	1.469	348	1.759	369.7
磷酸五百	2.496	359	1.745	353	1.802	376.3
全一貫	2.593	332	2.155	352	1.999	376.4

二、石灰加用試験

麥作ニ施用スヘキ石灰ノ適量及其ノ連用カ土壤ノ性質並麥ノ品質ニ及ホス影響ヲ知ラムトスルモノニシテ基本肥料トシテ堆肥四百貫、大豆粕八貫、過磷酸石灰五貫三百、硫酸アンモニア四貫七百、藁灰十貫ヲ施用シ之ニ石灰ノ相當量ヲ加用シタルモノナリ收量調査ノ成績左表ノ如シ

全一貫五百	2.575	353	2.181	351	2.171	374.9
全二貫	2.496	355	1.818	350	2.322	372.9
全二貫五百	2.669	356	1.762	346	2.329	374.6
無加里	0.322	—	0.113	—	0.510	326.5
加里五百	2.569	349	2.063	347	1.672	362.3
全一貫	2.768	356	2.089	359	2.122	370.7
全一貫五百	2.578	360	2.254	359	2.257	375.3
全二貫	2.648	353	2.233	351	2.343	370.5
全二貫五百	1.998	354	1.862	338	2.330	374.8

試験區別	大正十三年		大正十二年		自大正六年一箇年平均至大正十二年(大正十一年ヲ除ク)	
	收量	一升重	收量	一升重	收量	一升重
無石灰	1.007	345	1.010	361	0.844	373.2
石灰三十貫加用	2.186	362	2.264	366	2.127	377.6
全六十貫加用	1.993	362	2.295	354	1.996	376.8

品 種 區 別	大正十三年		大正十二年		自大正十二年一箇年平均 至大正十二年(大正十一年ヲ除ク)
	收 量	一 升 重	收 量	一 升 重	
石灰百貫加用	二・三七	三三七	二・六八	三六九	二・二二
					三八〇・一

三、刺戟藥劑ニ關スル試驗

種子ニ刺戟藥劑ヲ塗布シタル場合麥ノ生育並收量ニ好影響アリヤ否ヤヲ知ラムトスルモノニシテ本年度ノ成績ニ依レハ、チランチン、ウスブルンハ幾分其ノ效果ヲ表ハシ速肥素モ僅ニ之ヲ認メラレタリ

四、窒素被吸收歩合査定試驗 (木框)

主ナル窒素肥料ニ就キ肥料成分ノ多少カ窒素ノ被吸收歩合ニ如何ナル差異ヲ生スルヤヲ知ラムカ爲繼續施行セリ其ノ成績ハ調査完了ヲ俟テ發表スヘシ

五、磷酸被吸收歩合査定試驗 (木框)

主ナル磷酸肥料ニ就キ其ノ被吸收歩合ヲ査定セムカ爲繼續施行セリ其ノ成績ハ試驗完了ノ上報告セムトス

六、磷酸ニ關スル試驗

磷酸ノ施用量及分施回数ノ多少ト麥ノ生育トノ關係ヲ知ラムトスルモノニシテ本年度ノ收量成績ハ元肥全量施用區及元肥追肥一回區最優レ分施回数多キ程不良ノ結果ヲ示セリ而シテ磷酸ノ施用量ヲ増加スルニ隨ヒ收量亦増加セリ

七、加里ニ關スル試驗 (ボント)

加里肥料ノ種類、施用量並分施法ト麥ノ生育トノ關係ヲ知ラムトスルモノニシテ分施ニ在リテハ三回分

八、刺戟劑ニ關スル試驗  
施區最優レ二回分施區並一回施用區之ニ亞キ四回分施區最劣レリ施用量ハ著シキ優劣ヲ示サス而シテ肥料ノ種類ハ藁灰最優レ木灰、硫酸加里ハ略ホ伯仲ノ間ニ在リ

種子消毒刺戟劑ノ效果如何ヲ知ラムカ爲チランチン、ウスブルン、硫酸銅等ノ藥劑ニ就キ試驗セリ其ノ成績ニ依レハ或物ハ多少ノ效果ヲ認ムルカ如キモ尙繼續試驗ノ上報告スル所アルヘシ

分 析 調 査

本年度中ニ施行セル分析件數並其ノ成分數ハ次ノ如シ

一、依頼分析

種 別	分析件數	依頼者内譯	
		農會・組合等	肥料營業者等
動物質肥料	八二	三一	五一
植物質肥料	二一四	三三	一八一
礦物質肥料	四一	一七	二四
調合肥料	三六	二三	一三
雜質肥料	六	三	三
飼料等	二五	二二	三
計	四〇四	一二九	二七五

二、研究資料分析



成分種類	依頼分析										肥料研究資料	土壤	計					
	磷	窒	有	全	全	洗	其	計	他	計								
磷酸吸收力											七	二	一					
窒素吸收力																		
有效磷酸																		
全加里																		
全石里																		
洗滌分析																		
其他																		
計											七	二	一	五				
肥料											四	四						
研究											八	二						
資料											三	三	三	六				
土壤											四	八	六					
計											一	六	五	六				

一、施肥慣行調査

三河方面寶飯郡及岡崎市ノ調査ヲ施行セリ

施肥標準調査

二、三要素試験

左記土壤ニ對シ有効三要素量ヲ知ラムカ爲ボット試験ヲ行ヒタリ各試験區ノ収量順位左表ノ如シ

郡市名	區別	試驗年數	地質	採集地名	無肥料	無窒素	無磷酸	無加里	完全	完全	完全
西加茂	西加茂	三	洪	猿投村	五	六	四	一	三	四	二
西加茂	西加茂	三	洪	好村	六	五	一	四	二	二	三

三、委託試験

ボット三要素試験ヲ終リタル土壤ニ就キ原地ニ於テ肥料試験ヲ施行セリ其ノ設置箇所ハ次ノ如シ

所在地名	試驗年數	地質	採集地名	無肥料	無窒素	無磷酸	無加里	完全	完全	完全
西加茂	三	沖	舉母町	四	四	二	一	三	一	一
東加茂	三	花崗岩	盛岡村	四	六	六	六	三	一	一
額加茂	三	額家雲母岩及片麻岩	山中村	六	六	六	六	三	一	一
寶飯	三	沖	大塚村	六	六	五	五	三	一	一
寶飯	三	洪	大津村	六	六	五	五	三	一	一
知多	三	洪	富貴村	四	五	四	一	三	二	一
知多	三	花崗岩	作手村	五	五	四	一	三	二	一
南設	三	沖	祖父江町	七	七	五	四	三	二	一
中島	三	洪	北里村	七	六	六	六	三	二	一
西春日	三	洪	高岡村	六	五	六	六	三	二	一
碧海	三	沖	一色町	五	六	六	五	三	二	一
幡豆	三	沖		五	六	六	五	三	二	一
一本場	三	洪		六	五	六	五	三	二	一
本場對照	三	洪		六	五	六	五	三	二	一

所在地名

額田郡豐富村  
中島郡大和村

太田熊治  
淺井悅次郎



八名郡金澤村

以上第一年度

水野 諦 一郎

西加茂郡猿投村大字四郷

井 上 農 場

渥美郡二川町大字二川

二 川 町 農 會

渥美郡野田村大字野田

鈴 木 市 太 郎

寶飯郡牛久保町大字正岡

柴 田 傳 藏

額田郡男川村大字大平

神 谷 嘉 一

碧海郡依佐美村大字野田

藤 井 半 重

碧海郡新川町

岩 田 以 手 紙

碧海郡高岡村大字吉原

野 場 要 吉

東春日井郡志段味村大字諏訪原新田

坪 井 田 次

海部郡永和村大字鱒江

伊 藤 俊 一

四、土壤ノ分析調査

前年ニ繼續シ本年度ハ寶飯郡及岡崎市ノ代表的土壤並本調査施行上必要ト認ムル土壤百五十点ニ就キ理學的並化學的分析調査ヲ施行セリ而シテ其ノ成績ハ追テ一括シ報告セムトス

五、生産力不良土壤ノ改良ニ關スル試驗

縣下第三紀層及洪積層ニ屬スル生産力不良土壤ヲ蒐集シ來リ米麥ニ就キ之カボット試驗ヲ施行シタルニ相當顯著ナル成績ヲ得大体ニ於テ改良ノ象徴ヲ認メタリ

鶏 飼 料 試 験

一、雌鶏ノ飼料トシテヴイタミンA、B、C、ノ關係ヲ調査セシニA及Bハ絶對ニ必要ナルモCハ初期ニ之ヲ十分給與スルトキハ爾後給與セサルモ發育ニハ障害ヲ與ヘサルコトヲ確メタリ詳細ハ既ニ報告セリ

二、雌鶏ノ飼養上適當ナル蛋白質量ヲ試驗セシニ全飼料ノ一八——二〇%ノ蛋白質ヲ給與セルモノ最良好ノ發育ヲ遂ケタリ

三、産卵鶏ニ給與スヘキ蛋白質ノ經濟的給與量ヲ試驗セリ本試驗ハ試驗完了ノ上報スル所アルヘシ

卵ニ對スルヴイ、 A 並 Bノ影響ヲ試驗セシニA、Bヲ多ク給與スルトキハ産卵ヲ増加スル傾向アリ殊ニAヲ與フル場合ハ其ノ傾向稍著シ

五、大豆粕ノ飼料的價值ニ就キ試驗セリ詳細ハ更メテ報セムトス

病 蟲 ノ 部

病 理 部

稻ノ病蟲害ニ關スル試驗

一、稻熱病ニ對スル稻品種及系統ノ抵抗力檢定試驗

前年ニ繼續シ稻熱病ニ對スル抵抗力優良品種ノ育成母本用トシテ強度ノ抵抗力ヲ有スル稻ノ選抜ヲナシ併セテ在來諸品種並諸系統ノ該病ニ對スル抵抗ノ程度ヲ比較研究セムカ爲從來當場ニ於テ栽培セララル水稻品種中必要ト認メタル約七十種及約三百八十系統ニ就キ前年同様ノ方法ニ依リ夫々五十個体以上小鉢ニ培養シ温床框内ニテ五六寸ニ伸長セル頃之ニ純粹培養ニ依ル稻熱病菌ヲ接種シ發病狀況ヲ比較調査セリ

其ノ成績ハ大体前年度ト一致シ戰捷・凱旋糯・劍一六〇號・臺灣柳州種ハ最強クシテ全然發病ヲ認メヌ萎縮不知・仙石一三〇號・二番稻・澁皮千本・赤笹・白千本・愛國三號・須賀一本・赤神力・雄町二號・小二本・源一本・榮神力・晚白笹・三河錦・道徳・國安等ハ之ニ亞キテ強ク神力三號・畿内一八一號・畿内一八八號・彌七・器量好・仲好・伊豫辨慶二號・和歌山早生神力等ハ著シク發病セリ系統中ニハ榮神力F<sub>3</sub>(四十四系)京都旭×愛知早稻一號F<sub>3</sub>(三十三系)愛知糯一號×京都旭F<sub>4</sub>(六十五系)京都旭×竹成F<sub>7</sub>(五系)等ハ稍強ク平和糯×畿内剛力・神力×尾張坊主・神力×畿内剛力ハ比較的抵抗力弱シ尙今後繼續施行シ確實ナル

抵抗力品種及系統ヲ選定セムトス

二、稻品種ノ稻熱病本田發病調査

本縣獎勵品種ノ普通作並主要品種ノ收量比較試驗及品種見本等ノ本田栽培水稻ニ就キ穂首稻熱病ノ發病狀況ヲ調査セリ本縣獎勵品種ニ對スル調査成績左表ノ如シ

發病調査成績

品 種 名	調査總株數	一株平均本數 (三十株平均)	穂首稻熱病 發病本數	全上 %	調査月日	發病順位	備考
愛國三號	一・七〇三	一八・三	三三七	一・〇八	九月廿八日	九	
器量好二號	八五〇	二〇・一	二・六二	一三・二九	十月二日	四	
仲好	八五〇	二二・三	四・〇〇九	三三・四	十月二日	一	
三河錦三號	八五〇	一七・六	三八〇	二・五四	十月三日	七	
榮神	八五〇	二二・〇	五・六	二・八九	十月三日	六	
畿内剛力	八五〇	二二・七	二・七三	一七・八	十月三日	三	
神力三號	八五〇	二〇・八	三・三三	一八・七	十月三日	二	
京都旭	八五〇	一七・六	二・七九	一・八六	十月五日	八	
平和糯	八五〇	二二・八	二・八六	一・八一	十月五日	五	

備考 本年ハ七月中下旬頃ヨリ抵抗力弱キ品種ニ葉稻熱病ヲ發生シ又秋季ニ至リ穂首稻熱病ノ發生特ニ激甚ヲ極メタリ

三、稻熱病豫防藥劑撒布試驗

發病被害ノ顯著ナル水稻品種仲好ニ對シ各種藥劑ノ撒布ニ依リ爾後本病ノ發生、蔓延防止上其ノ效果如何ヲ試ミムトスルモノニシテ八月七日一回撒布區ニ在リテハ石灰撒布區最良好ナルヲ示シ普通ボルドー液・砂糖ボルドー液・石鹼ボルドー液・布海苔ボルドー液之ニ亞キ八月七日及八月十四日ノ二回撒布區ニ在リテハ普通ボルドー液最良好ニシテ石灰撒布之ニ亞ケリ

四、稻白葉枯病ニ對スル稻品種ノ抵抗力比較委託試驗

前年度ニ繼續シ多數品種並系統ニ就キ白葉枯病ニ對スル抵抗力ヲ比較檢定シ交配用母本トシテ高度ノ耐病性品種又ハ優良系統ヲ選拔スルノ目的ヲ以テ年々本病ノ發生被害激甚ナル地方ノ水田ニ於テ現地試驗ヲナス爲碧海郡矢作町大字新堀及中島郡千代田村大字井堀ノ二箇所ニ委託試驗地ヲ設置シ試驗ヲ施行セリ其ノ成績ハ中島郡地方ニ於テハ發病極メテ輕微ニシテ充分目的ヲ達スル能ハサリシモ碧海郡矢作町ノ試驗地ニ於テハ八月下旬頃ヨリ甚シク發病シ其ノ成績顯著ニシテ左ノ如ク大体前年度ニ一致セリ

抵抗力強キモノ 滋賀關取十一號、須賀一本、庄兵衛、赤神力  
 抵抗力稍強キモノ 尾張坊主、晚白笹、九州晚八號、赤穂、曾本錦、小錦、道德、富士、源一本  
 抵抗力弱キモノ 神力、榮神力、道後中稻一號、道後晚稻一號、愛知晚稻十一號、黃金錦、京都旭、愛知旭、龜治、畿内剛力

五、稻白葉枯病原菌接種ニ因ル被害影響試驗

尙滋賀關取×小穀ノ交配第二代個体中次年度ノ材料トシテ小穀型ノ耐病性ノモノ數系ヲ選拔セリ前年度ニ繼續シテ二萬分一ポットニ栽培シタル稻ニ就キ時期ヲ異ニシテ接種發病セシメ調査シタルモ後期稻熱病ノ發生被害甚シクシテ成績判明セス

六、稻麴病ニ關スル試驗

獎勵品種中特ニ京都旭種ニ發病著シキ稻麴病原菌ノ傳染カ種子ニ依テ行ハルモノナルヤ又種子消毒ノ效果等ヲ明ニセムカ爲前年度開花中特ニ病原菌ノ孢子ヲ接種シタル種子及播種前特ニ本病菌(自然ノ材料ヨリ)孢子及人工培養上ノ孢子又ハ菌系)ヲ附着セシメタル種子等ヲ播種栽培シ又前年度ノ著シキ罹病株ヨリ採取シタル種子ニ就キ各種ノ種子消毒劑ヲ作用セシメテ下種栽培シ夫等ノ發病狀態ヲ比較セムトセリ其ノ成績ハ何レモ發病極メテ僅少ニシテ不明ニ終レリ

七、二化性螟蟲越年狀況ノ調査

二化螟蟲第一化期ノ被害ト直接關係ヲ有スル越年幼蟲ノ藁及稻株内ニ於ケル春季蟄伏狀況ヲ知ラムカ爲五月上旬場ノ内外ニ於テ之ヲ調査セリ

調査藁本數	存在蟲數	備考	調査坪數	全株數	全莖數	存在蟲數	備考
四・五三 <sup>本</sup>	一四五 <sup>四</sup>	藁ハ九箇所ヨリ蒐集ス全部健全ナル幼虫ナリ	二三 <sup>坪</sup>	五六 <sup>株</sup>	一一・二七 <sup>本</sup>	三四 <sup>二</sup>	調査田區九全部健全幼虫ナリ

八、二化性螟蟲發生狀況調査(年々繼續)

構内水田ニ電光誘蛾燈(二十燭光)一箇ヲ設置シ之ニ飛來スル成蟲ノ數ニ依リ二化性螟蟲其ノ他農作物害蟲ノ發生狀況ヲ調査シタリ其ノ成績ニ依リ二化性螟蟲ノ發生狀況ヲ示セハ次ノ如シ

發生期	發蛾初期	發蛾盛期	發蛾終期	雌	雄	總數	計
第一期	五月廿三日	六月下旬 (最多二十七日)	七月廿七日	八七	五七〇	一・三九七	

發生期	發蛾初期	發蛾盛期	發蛾終期	誘蛾總數
第二期	八月九日	八月下旬 (最多二十三日)	九月十五日	計
				雌 四七九
				雄 一五六
				計 六三七

第一、第二期共前年ニ比シ其ノ發蛾四日乃至八日ノ遲延ヲ來シ誘蛾數ニ於テハ著シク減少セリ  
 誘蛾數減少ノ原因ハ因ヨリ本年ノ成蟲發生ノ甚小ナリシニ因ルコト其ノ後ノ加害狀況ヨリ推察シ得レト  
 モ試驗都合上本年ヨリ點火個所ヲ移動シ附近ニ苗代等ノ成蟲ヲ誘引スヘキモノナカリシニモ因ルヘシ  
 九、誘蛾燈ト二化性螟蟲產卵數トノ關係調査(十三年度創始)  
 構内水田ノ相並行セル四列ニ插秧直後ヨリ十燭光誘蛾燈一個宛點シ置キ之ヨリ種々ナル距離ニ於ケル各  
 田區百坪ニ對スル二化性螟蟲ノ產卵數ヲ調査シタル成績左ノ如シ

燈ヨリノ距離 (中央マテ) 百坪ニ對スル 平均卵塊數 比率	最近キ場所		稍近キ場所		中間		稍離レタル場所		最離レタル場所	
	雌	雄	雌	雄	雌	雄	雌	雄	雌	雄
五・四	二五・八	四七・六	七九・七	一一一・五	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
三七・八	三八・三	四〇・八	五九・五	六二・〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

即前年度ト同ク概シテ誘蛾燈ヲ離ルルニ從ヒ漸次產卵數ノ増加スルヲ示セリ

10、誘蛾燈ノ光力ト誘蛾數トノ關係調査

電燈ヲ誘蛾燈ニ利用スルニ方リ之カ光力ノ大小ニ對スル二化性螟蟲蛾ノ趨向性如何ヲ知り併セテ經濟上  
 有効ナル光力ヲ知ラムカ爲構内水田中ニ於テ九四・五米ノ正方形ノ四隅ニ五・一〇・二五・五〇ノ各燭電燈

ヲ點火シ六月十三日ヨリ全二十八日ニ至ル十六日間ニ於ケル各燭誘蛾數ヲ調査セリ其ノ成績左ノ如シ

燭光種別	雌蛾	雄蛾	合計	雌雄ノ割合		五燭光ニ比較シテ誘殺歩合	
				雌	雄	雌	雄
五燭	二八六	九四	一・二〇〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇
十燭	二八六	六五五	九四〇	一〇〇・〇	二二九・〇	一〇〇・〇	七二・七
二十五燭	四三〇	五九五	一・〇〇五	一〇〇・〇	一三八・四	一五〇・三	六五・二
五十燭	四三四	三八三	八二七	一〇〇・〇	八八・二	一五二・七	四二・九

其ノ成績ハ右ノ如ク誘蛾總數ニ於テハ各燭ノ間ニ明ナル關係ヲ認メ難キモ雌雄ノ割合ニ於テハ光力ノ増  
 加ト共ニ漸次雄蛾ニ對スル雌蛾ノ割合ヲ増加シ又雌蛾ノ絕對數モ之ニ伴フノ傾向ヲ示セリ

麥ノ病害ニ關スル試驗

一、大麥斑葉病豫防ニ關スル試驗

前年度ニ繼續シ硫酸銅液ノ各種濃度、時間並冷水温湯浸、風呂湯浸及諸種ノ販賣種子消毒劑等ヲ用ヒテ  
 種子發芽ニ及ホス影響ヲ室内及圃場ニ於テ調査スルト共ニ斑葉病並黑穗病豫防上ノ効果ヲ比較調査セリ  
 圃場ニ於ケル二坪宛ニ區制ノ平均成績次表ノ如シ

處理法別	斑葉病株數	粉黑穗株數	收穫量		穀實重量		穀實容積	
			秤量	量	重量	量	容積	容積
無處理	二・五	四・五	四六九	七五二	二・四六	二・四六	二・四六	
冷水温湯浸法	四・〇	〇	四九四	七七九	二・五二	二・五二	二・五二	

處理法別	斑葉病株數	粉黑穗株數	收量			
			稈重	穀實重量	穀實容	容積
硫酸銅 ○・四%液六時間	一・五	三・〇	四八九	八四〇	二・七	
昇 ○・〇五%液十分間 (豫メ水浸一時間)	一三・〇	二・〇	四九三	八三〇	二・六	
ウ ○・二%二時間	二・〇	三・五	四九二	八一〇	二・五	
チ ○・二%二時間	四・〇	〇・五	五二三	八〇六	二・三	
石灰硫黃合劑 ホーメー一度液十二時間	二・〇	二・五	五一	八五	二・三	
硫化加里 ○・二%十二時間	四・〇	一・五	五二	八三	二・五	

供試品種 大麥小備前 下種期 大正十三年十二月三日

斑葉病豫防法トシテハ硫酸銅○・四%(水一斗ニ對シ硫酸銅二十匁ヲ溶解ス)ニ六時間内外浸漬シ更ニ石灰乳中ニ數分間浸シテ攪拌シ陰乾シタルモノ石灰硫黃合劑浸法等ハ經濟的ニシテ發芽勢ヲ害スルコトナク効果充分ナルカ如シ尙他ノ販賣藥劑ハ共ニ斑葉病豫防上ニハ大差ナク相當効果アルモ粉黑穗病ニ對シテハ物理的處理法ノ效果確實ナルニ反シ化學的處理法ハ共ニ效果充分ナラサルカ如シ

二、

小麥ノ葉枯病ニ對スル品種ノ抵抗力比較試驗  
前年度ヨリ研究ニ着手セルモノニシテ本病ニ對シ小麥ノ諸品種並諸系統ノ抵抗力ヲ比較調査シ尙品種改良用トシテ強度ノ抵抗力母本ヲ選抜セムカ爲約五十ノ品種並系統ヲ植木鉢又ハ圃場ニ栽培シ人工培養上

ノ病原菌ヲ以テ數回ニ亘リ接種試驗ヲナシ發病被害ノ程度ヲ比較調査セリ其ノ成績ハ普通小麥ノ品種間ニハ發病程度ニ著シキ差異ヲ示セリ

殆ド發病ヲ認メサルモノ フルツ、ベルツルカ、江島(島根)メリケン(長崎)ベデグリー(長崎)

五崎西洋(長崎)菊池×オレゴン(長崎)

抵抗力稍強キモノ 畿内銹不知、全白小麥二號、全白小麥五號、全一五六號、全一六〇號、ハイカ

ラ十五號(長崎)バン小麥(長崎)

著シキ罹病性ノモノ 本縣赤チク、赤坊主諸系、伊賀筑後、神奈川白坊主、千葉相州、大分筑摩、

畿内四ノ五、全四ノ六等

三、小麥ノ葉枯病被害影響調査

圃場ニ於テ小麥ノ諸品種ヲ同一狀態ニテ栽培シ其ノ一部分ニ五月二日及五月廿一日ノ二回ニ病原菌ヲ撒布接種シテ發病セシメタル部分ハ他ノ無接種部トノ收穫物ニ就キ比較セシニ其ノ穀實ノ充實程度著シク相違セリ數品種ニ於ケル千粒重量ヲ調査セル成績左ノ如シ

品種名	比較千粒重量	接種部千粒重量	耐病性程度
赤チク	三二・二五	二一・五三	最弱シ
赤坊主	三五・四〇	二八・二〇	弱シ
神奈川白坊主	二九・五三	二四・五七	弱シ
畿内銹不知	三四・八五	三一・六五	稍強シ
畿内一五四號	三一・七七	三〇・二九	強シ

即チ罹病性品種ニ在リテハ若シ本病ノ發生蔓延ヲ見タル年ニ於テハ著シク其ノ充實ヲ阻害シ收量品質ヲ減損スルモノナリ

四、種子處理ニ關スル試驗

病害豫防或ハ增收劑等ト稱シテ宣傳販賣サルル各種ノ處理藥劑ノ幼植物ニ對スル影響ヲ比較調査セムカ爲硫酸銅其ノ他ノ化學的處理法並冷水温湯浸法等ノ物理的處理法ト共ニウスブルン、チランチンB、チランチンC、セメザン、ウベルチン等ヲ使用シ稈麥、大麥、小麥、稻、白菜、蕪菁、菠薐草等ノ種子ニ就テ發芽歩合、發芽勢並幼根幼芽ノ伸長程度等ヲ比較セリ

其ノ成績ハ概シテ物理的處理法ニ比シ發芽勢及幼芽長等ハ良好ナルモ無處理ノモノニ比較スレハ稍劣ルカ如シ尙各種ノ作物ニ就キ繼續試驗セムトス

圖藝作物ノ病蟲害ニ關スル試驗

一、西瓜ノ病害豫防上藥劑撒布ノ被害及効果ニ關スル試驗

碧海郡安城地方ノ西瓜ニハ諸種ノ病害アルモ豫防藥劑ノ撒布ハ被害アリト稱シテ實行セサルモノ多キヲ以テ該地方ノ状態ニ於ケル藥害ノ程度及効果等ヲ知ラムカ爲調査法ヲ異ニシタル各種藥劑ヲ幼植物ノ時ヨリ數回撒布シテ之ヲ比較セリ其ノ成績ニ依レハ四斗式普通ボルドー液、全石灰半量ボルドー液、銅石鹼液等ノ普通藥劑ハ殆ト被害ナク無撒布區ニ比較シテ後期ニ於ケル炭疽病其ノ他ノ病害極メテ僅少ナルヲ認メタリ但シ撒布ノ前後一兩日中ニ強風雨アリタル場合ハ多少ノ藥害アリ即チ機械的傷害ニ起因スルモノ、如シ

二、胡瓜ノ露菌病(ガサ)藥劑豫防試驗

本病豫防上各種撒布藥劑ノ效果ヲ比較セムカ爲六月初旬ヨリ十日毎ニ四斗式石灰等量ボルドー液、全石灰半量ボルドー液、全石鹼ボルドー液、六斗式銅石鹼液、十斗式銅石鹼液、四斗式曹達ボルドー液、炭酸銅アムモニア、ノスベラー、コロイドボルドー等ヲ同様ニ撒布シ發病葉ノ數比及收量等ニ就キ比較調査セリ

其ノ成績ハ各藥劑撒布區ハ何レモ無撒布區ニ比シ發病葉數著シク少ク收量ニ於テモ曹達ボルドー液撒布區以外ハ何レモ比較區ヨリ著シク多シ他ノ各藥劑ノ間ニハ著シキ差ナキカ如シ

三、瓜類ノ蔓割病(病原菌 Fusarium 屬)並蔓枯病(病原菌 Mycosphaerella vitulina (Fr.) 病原菌ノ病原性ニ關スル試驗

近縁病原菌及寄主ヲ異ニスル同種病原菌ノ瓜類四種ニ對スル病原性ヲ比較研究セムカ爲豫メ消毒シタル鉢及土壤ニ消毒シタル西瓜(コールスアーリー)胡瓜(青節成)甜瓜(ナツメ)及南瓜ノ種子ヲ各鉢十粒宛病原菌ト共ニ下種接種シ温床内ニ保チ夫等ノ發病状態ヲ調査セリ

其ノ成績ハ西瓜及胡瓜ヨリ分離シタル「フザリウム」菌ハ何レモ瓜類ヲ浸害スルモ馬鈴薯・甘藷・蕪菁・大豆・小麥・稻等ヨリ分離シタル同屬菌ハ瓜類ニ對シテハ殆ト侵襲力ヲ有セサルカ如シ而シテ蔓枯病菌ハ西瓜・胡瓜・メロン・南瓜等ヨリ分離シタルモノハ何レモ共ニ瓜類四種ノ侵スモノ、如シ

四、十字科植物ノ根瘤病豫防消毒ニ關スル試驗

白菜及蕪菁等ヲ早播スルトキハ根瘤病ノ被害多キヲ以テ之カ豫防上種子消毒ノ效果ヲ知ラムカ爲昇汞・フォルマリン・硫酸銅・ウスブルン・チランチンB・C及ウベルチン・硫化加里・石灰硫黃合劑等ヲ以テ處理

シ九月九日下種シテ發芽ニ及ホス影響並同場ニ於ケル發芽歩合ヲ調査セリ  
其ノ成績ハ何レモ多少ツ、發病シ本種豫防上種子消毒ノ効果ハ殆ト認メラレサルカ如ク又收量及ホス影  
響モ著シカラサルカ如シ發芽ニ對シテハ硫酸銅一%液及チランチンハ多少惡影響ヲ及ホシ他ハ無消毒ノ  
モノト大差ナキカ如シ

五、梨ノ介殼蟲驅除ニ關スル試驗

梨ノ介殼蟲(主トシテながくろほし介殼蟲)驅除ニ對シ秋季及冬季ニ於ケル有効ナル驅除藥劑ノ種類及  
濃度ヲ驗知セムカ爲左ノ如キ各種藥劑ヲ被害樹ノ枝ニ撒布シ後其ノ一部ヲ採集シテ死蟲歩合ヲ調査セリ  
秋季十一月四日撒布二月十二日調査ノ成績左表ノ如シ

藥劑種類及濃度		長十郎梨ノ枝	死 蟲 歩 合	廿世紀梨ノ枝
標 準 (無撒布)			六	七
石油乳劑十倍液		五四	四五	
全 廿 倍 液		四九	三六	
機械油乳劑十倍液		九四	九三	
全 廿 倍 液		九六	七六	
全 卅 倍 液		七二	七三	
松脂合劑十倍液		四二	三八	
全 廿 倍 液		四三	二〇	

硫酸銅乳劑	四二	四七
石灰硫黃合劑一度液	五三	三二
全 二 度 液	四九	四八

冬季二月十七日撒布三月廿三日調査ノ成績左表ノ如シ

藥劑ノ種類及濃度	長十郎梨ノ枝	死 蟲 歩 合	廿世紀梨ノ枝
標 準 (無撒布)	七	六	
機械油乳劑十倍液	八九	八六	
全 廿 倍 液	五六	八二	
全 卅 倍 液	五八	四七	
石油乳劑五倍液	二三	二九	
全 十 倍 液	二五	四七	
石灰硫黃合劑五度液	四六	七〇	
松脂合劑十倍液	三六	四九	

右藥劑中機械油乳劑ノ調製法ハ機械油(マシン油A一斗ノ市價二圓八十錢位)一升ヲ温メ一方水一升ニ  
對シテアデカ石鹼四十八匁ヲ煮沸溶解シタルモノトヲ石油乳劑調製法ニ準シテ噴霧器ニテ強ク混合シテ  
乳劑トス

六、特殊害蟲ノ分布調査

前年度ヨリ始メテ縣内ニ發生ヲ認メタルイセリヤ介殼蟲ノ分布町村名次ノ如シ

知多郡 上野村、旭村、三和村、常滑町

寶飯郡 御津村、國府町

幡豆郡 幡豆村

發生地ハ何レモベタリヤ瓢蟲ノ放飼ニ依リ顯者ナル効果ヲ收メタルモノノ如シ

七、ルビー蠟蟲ノ發生及驅除

大正十五年一月知多郡上野村大字荒尾ノ柑橋畑約二反歩ニルビー蠟蟲ノ發生ヲ認ム(既ニ數年前侵入セルモノノ如キモ經路不明ナリ)三月四日ヨリ全廿二日ニ亘リ晴天十三日間ニ發生ヲ認メタル畑ヲ中心トシテ危險ト認ムル周圍約二町歩ノ柑橋園樹數千四百九十六本ノ青酸瓦斯燻蒸ヲ行ヘリ内容積計算法トシテ幕垂、圓周測定法ヲ採用シ布製天幕ヲ使用セリ日中燻蒸ノ樹十數本ニ多少ノ藥害落葉ヲ認メタルモ成績概シテ良好ニシテ生存成蟲ヲ認メヌ殆ト全滅セシモノノ如シ

野鼠チブス菌ニ關スル試驗並配付

前年ニ繼續シ培養保存セル野鼠チブス菌ヲ毒性檢定ノ上鼠害地ヘ配付シ驅除實施ノ指導ヲ行フ本年度野鼠チブス菌ヲ配付シ驅除ヲ施行シタル町村名及實施面積左ノ如シ

額田郡山中村 八十町歩

海部郡三和村 百二十町歩

愛知郡豊明村 八十町歩

農具試驗部

普及獎勵事業

一、農具運轉實演

常時參觀人ニ對シ各種優良農具ヲ實演シ之カ効果ヲ知ラシメタリ

二、農具貸與

優良農具ヲ農家ニ貸與シテ之ヲ使用セシメ其ノ効果ヲ熟知セシムルト共ニ技術員ヲ派遣シテ之カ取扱法ヲ指導セリ

三、農具設置及修理指導

共同作業場ノ建設及動力農具ノ設置並其ノ故障修理等ノ場合ニハ申請ニ依リ現地ニ技術員ヲ派遣シテ之カ實地指導ニ努メタリ

四、講習講話

イ、縣下農業技術員ニ對シ動力農具講習會ヲ開催セリ修得者二十一名トス

ロ、郡市又ハ郡市農會ノ主催ニ係ル講習會ニ係員ヲ出張セシメタリ

五、農具見習生ノ養成

動力農具ニ關シ研究希望者ヲ見習生トシテ入場センメ之ヲ養成セリ本年修得証ヲ授與セルモノ四名トス



六、農具試驗說明ノ配付

試驗成績並動力農具取扱ニ關スル印刷物千部ヲ配付セリ

試驗事業

一、トラクター

三馬力ノ農業用小型石油發動機ヲ利用スルケープル式トラクターノ製作ヲナシ其ノ運轉ヲ試ミタルニ未タ完成ニ至ラス引續キ研究セムトス

二、播種器

前年度ニ引續キ水田直播器ヲ試驗セリ前年度製作セル本器ノ両端二列ノパイプハ傾斜緩ニシテ粗カ途中ニ停滯スル爲之ヲ除キ五列式ニ改メタルモノヲ試ミタルニ其ノ結果ハ播種量整一發芽整齊ニシテ成績良好ナリ尙引續キ乾田直播ノ場合ヲモ研究セムトス

三、水田直播播溝付器

前項水田直播器使用ニ當リ豫メ播溝ヲ作り其ノ溝底ニ播種セサレハ秋季成熟當時ニ至リ根際ヨリ傾倒スルモノ多キ嫌アルヲ以テ本年畜力用播溝付器ヲ考案シ使用シタルニ作業迅速ニシテ結果良好ナリ尙引續キ試驗セムトス

四、水田除草機

イ、水田畜力除草機

前年マテニ畜力除草機使用法使用時期並小埒間除草トノ關係及稻作收量ニ及ホス關係等ニ就キ知ルヲ得タリ本年モ引續キ之カ試驗ヲ施行セリ

本試驗ニ供シタル圃場ハ面積二反八畝歩(長六十三間幅十三間餘)ニシテ中央ニ畦畔アリ此ノ畦畔ヲ踏ミ越エテ同時ニ作業スル様縦ノ方向(大埒間)ハ田ノ長キ方向トシ畦間一尺ノ正條植トナス横ノ方向(小埒間)ハ株間ヲ七寸二分トシ概ネ正條植トセリ而シテ之ニ對シ施行セル畜力除草作業ノ成績ヲ反當ニ換算シテ述フレハ左ノ如シ但シ一日純作業時間八時間(始業午前六時終業午後六時三十分此ノ間休憩三時間トス)助手ハ女又ハ子供ニテ勞働能力〇・七ト見ル

種目	牛(禦者共)	人夫	手直シヲ要シタル株數	全上ノ中補植ヲナシタル株數	摘	要
一番除草七月九日	0.048	0.029	1	1	縦ノ方向ニ畜力除草機使用	
移植後九日	0.048	0.029	1	1	枕ノ除草殘ハ人力回轉除草機使用	
同株手直シ補植	0.048	0.029	27	27	株手直シハ助手カ常ニ機ニ追隨シテ行フモノナレトモ十分ナラサリシ爲除草後一通リ行フ	
二番除草七月十六日	0.050	0.021	1	1	一番除草ニ同シ	
同株手直シ補植	0.050	0.021	24	24	補植株數ノ一番除草ニ比シ多キハ一番除草ノ際補植洩ヲモ合算セシニ因ル	
三番除草七月二十日	0.048	0.029	1	1	横ノ方向(小埒間)ヲ人力回轉除草機ニテ作業ス	
四番除草七月二十三日	0.048	0.029	1	1	縦ノ方向ニ畜力除草機使用	
五番除草八月一日	0.048	0.029	3	3	枕ノ除草殘ハ人力回轉除草機ニテ作業ス	
六番除草八月六日	0.048	0.029	3	3	使用株手直シハ助手カ機ニ追隨シテ行フモノニテ十分ナリ	
計	0.310	1.023	1	1	同前	

中耕並除草ノ狀況ハ概ネ良好ニシテ人力回轉除草機使用田ニ比シ遜色ナシ

備考 本試驗ヲ他ニ適用セムトセハ左ノ注意ヲ要ス

(一) 一番除草ハ移植後九日目ニ行ヒタルモ時期過早ニテ稻ノ活着未タ十分ナラス倒レ稻多ク之カ手直

シニ多クノ勞力ヲ要スルヲ以テ除草時期ヲ移植後十五日前後ニ於テ稻ノ相當活着シタル時ニ着手スルヲ良シトスルカ如シ

- (一) 田區ハ一反歩以上ヲ同時ニ除草シ得ルヲ要ス小ナル田區ハ連續除草シ得ル様挿秧ヲ爲シ置クヘシ
- (二) 縱ノ方向ハ絶對正條植ヲ爲ス爲特ニ多クノ田植勞力ヲ要スルコトヲ考慮スヘシ
- (四) 從來格別雜草多キ田ニ在リテハ最後ニ尙一回小埒間ノ除草ヲ人力回轉除草機又ハ手取ニテ行フヲ要ス

ロ、畜力除草機使用ノ場合ニ於ケル作付方式試驗

畜力除草機使用ニ方リ牛ノ足ニテ損傷スル稻株及倒レタル稻株ノ手直シ並補植ニ要スル勞力ノ多少ハ作業功程ニ大ナル關係ヲ有シ又作付方式ノ如何ハ米ノ收量ニ影響スルモノナルヲ以テ如何ナル作付方式カ最適當ナルカヲ知ラムカ爲左ノ如ク區分シテ試驗ヲ施行セリ

- 第一區 畦幅一尺 株間七寸二分 坪五十株
- 第二區 畦幅九寸五分 株間七寸二分 全
- 第三區 畦幅八寸七分 株間七寸二分 全
- 第四區 畦幅一尺二寸 株間六寸 全

右各區ニ於テ牛ニ踏マレ手直シヲ要シタル株數及其ノ中補植ヲナシタル株數(括弧内)並反當收量左ノ如シ

試驗區	一番除草		二番除草		四番除草		五番除草		六番除草		反當收量	
	十三年度	十四年度	十三年度	十四年度	十三年度	十四年度	十三年度	十四年度	十三年度	十四年度	十三年度	十四年度
第一區	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	2.76	2.76
第二區	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	2.57	2.57
第三區	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	2.57	2.57
第四區	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	2.57	2.57

- (一) 本試驗ハ一區面積四畝二十八歩ノモノヲ反當ニ換算セリ
  - (二) 第四區ノ株數ハ第二區ノ株數ヲ適用セシモノトス
  - (三) 三番除草ハ小埒間ノ除草ヲ人力回轉除草器ニテ行ヒタルモノトス
- 右ノ成績ハ十三年度十四年度ニ於テ多少數字ニ差アレトモ大体各區ノ割合ハ同一ナリ作付方式ハ土質及牛ノ体格ニ依リ決定スヘキモノニシテ一概ニ論シ難キモ本試驗ニ供用シタル土地並牛ニテハ通路一尺二寸以上ヲ必要トスルモノ、如シ

五、乾燥機

前年度ニ引續キ本場ニ於テ考案完成シタル粃殻ヲ燃料トスル穀物火力乾燥機ノ試驗ヲ行ヒタリ尙本縣指定安城機械農場、全蘇東機械農場ニ各一組ヲ本場直接指導ノ下ニ新設シ實驗シタルニ其ノ成績良好ニシテ實用ニ適シ得ルヲ確メ得タリ

本機ハ粃殻ノ燃燒氣ヲ直接利用スルモノニシテ一塔ノ粃容量十石ノモノ二塔ヲ設置シ約二千圓ヲ要ス動

力ハ二馬力半ニテ足り糶穀ハ八時間燃スモ一塔分即チ十石ノ糶穀(約三十貫)ニテ足ル乾燥能率ハ刈取後地干二日乃至三日ノ糶(水濕二〇%程度)ニテ夏越シ得ル水濕即チ一三・五%内外ニ乾燥スルニ約八時間ヲ要シ架干セル一六%内外ノ水濕ヲ有スル糶ハ五時間程ニテ乾燥スルヲ得、糶一石ノ乾燥費ハ人力ナラハ四十錢以上ヲ要スヘキモ本機ヲ使用シテ二十町歩以上ノ生産糶ヲ乾燥スル場合三十錢以下ニテ爲シ得ヘシ

安城、蘇東兩機械農場ニテ試験シタル成績ノ概要左ノ如シ

安城機械農場調査ノ一

品 種 畿内剛力

圃場乾燥 地干二日

期 日 大正十四年十二月九日 晴天

水 濕 %	未 乾	一時間	二時間	三時間	四時間	五時間	六時間	七時間	平均一時間 毎ノ乾減
	一・〇・七	一・九・二	一・九・〇	一・六・六	一・五・三	一・五・〇	一・四・〇	一・三・三	

水濕一%乾減スル毎ニ胴割米ノ増加率〇・九五%

安城機械農場調査ノ二

品 種 畿内剛力

圃場乾燥 稻架干

期 日 大正十四年十二月十一日 晴天

水 濕 %	未 乾	一時間	二時間	三時間	四時間	平均一時間 ノ乾減
	一・六・二	一・五・七	一・五・六	一・四・七	一・三・五	

水濕一%乾減スル毎ニ胴割米ノ増加率一・〇三%

蘇東機械農場調査

品 種 京都旭

圃場乾燥 稻架干

期 日 大正十五年一月十五日

水 濕 %	未 乾	一時間	二時間	三時間	四時間	五時間	平均一時間 ノ乾減
	一・六・七	一・六・四	一・五・八	一・五・二	一・四・五	一・三・八	

水濕一%乾減スル毎ニ胴割米ノ増加率一・二二八%

六、石油發動機

前年度ニ引續キ輸入又ハ新規ニ製作セラレタルモノニ就キ比較試験ヲ行ヒタリ近時内地製作品カ漸次優秀ニ進ミツ、アルコトハ慶スヘクトバタ式、クボタ式等相當優良ト認メラレタリ

七、石灰發動機燃料節減ニ關スル調査

馬力ト廻轉數トノ關係及之カ季節ニ如何ナル相異ヲ生スルヤヲ檢シ燃料節約上之等ヲ考慮スヘキ必要アリヤ否ヤヲ確メムカ爲七月及二月ノ二回ニ亘リ試験ヲ施行セリ尙今後引續キ試験セムトス今試験成績ノ

二三ヲ示セハ左ノ如シ  
供用機關 三馬力 ウイツテ型  
公稱廻轉數 五三〇回

調査一、(大正十四年六月—七月調査)

一分 間ノ 回数	無負荷		一馬力		二馬力		三馬力		最大馬力	
	時間 消費	温度	時間 消費	温度	時間 消費	温度	時間 消費	温度	時間 消費	温度
四〇〇	二・二四	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
四一〇	二・二六	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
四二〇	二・二八	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
四三〇	二・三〇	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
四四〇	二・三二	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
四五〇	二・三四	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
四六〇	二・三六	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
四七〇	二・三八	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
四八〇	二・四〇	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
四九〇	二・四二	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
五〇〇	二・四四	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
五一〇	二・四六	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
五二〇	二・四八	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
五三〇	二・五〇	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
五四〇	二・五二	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
五五〇	二・五四	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
五六〇	二・五六	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
五七〇	二・五八	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
五八〇	二・六〇	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
五九〇	二・六二	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
六〇〇	二・六四	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三

調査二、(大正十五年二月調査)

一分 間ノ 回数	無負荷		一馬力		二馬力		三馬力		最大馬力	
	時間 消費	温度	時間 消費	温度	時間 消費	温度	時間 消費	温度	時間 消費	温度
四〇〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七
四一〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七
四二〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七
四三〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七
四四〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七
四五〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七
四六〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七
四七〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七
四八〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七
四九〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七
五〇〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七
五一〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七
五二〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七
五三〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七
五四〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七
五五〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七
五六〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七
五七〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七
五八〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七
五九〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七
六〇〇	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七	三・三	七・七

右ノ調査ニ依リ公稱馬力ヨリ小ナル馬力ノ作業ヲ爲ス場合ハ石油發動機ノ廻轉數ヲ或程度迄減スル方燃料節約上得策ナルヲ確メ得タリ尙公稱馬力ノ程度ニテ使用スル場合ニ在リテハ公稱廻轉數ヲ標準トシテ使用スルヲ適當ナリト認ム

前表ノ外クボタ・トバタ等ノ石油機關ニ就キテモ同様ノ調査ヲ行ヒタルニ何レモ同一ノ傾向ヲ生セリ

八、勞力節減ニ關スル試驗

イ、水 稻 作

努メテ本場考案並改良ニ係ル動力・畜力用器具機械ヲ利用シ以テ人力ヲ節約シ生産費ノ輕減ヲ圖リ且ツ之等器具機械ノ適否ヲ研究スル爲水田六反三畝歩ニ對シ大農式栽培法ヲ施行セリ

耕耘トシテハ畜力及トラクターヲ使用シ作付ニハ一部直播ヲ行ヒテ勞力ノ分配ヲ圖リ除草ハ専ラ畜力除草機ヲ使用シ收穫ニハ動力掛脱穀機ヲ用ヒ火力乾燥機ニテ乾燥ノ上動力掛摺摺精選機ニテ調製セリ而シテ之等動力・畜力用農具ハ設備ニ多額ノ經費ヲ要スルモノナレトモ共同利用ヲナサハ容易ニ設置シ得テ其ノ効果極メテ多カルヘシ

ロ、水田裏作麥

水稻作ト同一ノ目的ヲ以テ本年一反二畝歩ニ就キ試驗ヲ行ヒ目下繼續耕作中ナルカ耕耘ニハトラクター

ヲ用ヒ播溝立・畦立等ニハ畜力ヲ用ヒ中耕・除草・根寄等ニハ專ラトラクター・畜力等ヲ利用セリ脱穀・乾燥・調製等モ亦動力・畜力用農具ヲ使用スヘキ豫定ナリ

九、農具ノ比較試験

既製ノモノ及新ニ製作販賣サルル動力機及各種農具ニシテ農具商・農家等ノ申請ニ依リ比較試験ノ上一面ニ於テハ之カ缺点ノ改良ヲ指導シ一面ニ於テハ使用獎勵上ノ參考ニ資セリ

園藝部

果樹

一、梨品種試験

和洋梨合セテ三十餘種ニ就キ前年度ト全ク二反八畝歩ノ園地ニ棚・自然・垣根作ノ仕立法ニテ施行セリ本年度ハ九月ニ二回暴風雨ノ被害アリテ成績稍劣ルモ既往ノ成績ニ鑑ミ日本梨中有望ト認めタルモノヲ舉クレハ次ノ如シ

早生

市原早生 樹性强健・豊産・果形大・色澤良好外觀頗ル美麗ナルモ品質稍佳良ナラス  
博多青 樹性强健豊産ニシテ近來二十世紀ノ如キ外皮青色ヲ帶フルモノ嗜好セラルル傾向アルヲ以テ相當栽培スルノ價值アルモノト認ム

中生

廿世紀 各種中品質最優秀ニシテ需要激增シ市價良ク收利極メテ多シ然レトモ樹性强健ナラス病虫ノ害ヲ蒙リ易キヲ以テ病虫害ノ防除ニ努ムルコト肝要ナリ  
太白 品質廿世紀ニ劣レトモ稍佳良ナリ樹性强健ニシテ收量多ク病虫害ニ強シ  
長十郎 強健豊産ニシテ實用的ノ品種ナルモ品質良好ナラス近時嗜好ノ向上ニ依リ本種ノ如キ歡迎セラレズ市價低廉ナリ

晩三吉 晩生中ノ最良種ニシテ收量多キモ品質良好ナラス  
重次郎 收量多キモ品質佳ナラス

笠ノ川 味宜シキモ收量少キ缺点アリ

西洋梨ニ在リテハ「ブレイクス」「バートレット」最結果良好ナリ之ニ亞クハ「キーパー」「ルコント」ニテ十一月ノ頃販賣スレハ相當ノ利益アリ

二、桃品種試験

供用品種十四種ヲ一反歩ニ試作セリ前年度ニ於テモ多少胴枯病發生セルモ本年度ハ該病ノ發生著シ、既往ノ成績ニ於テハ次ノ品種ヲ優良ト認ム

日 月 小形ニシテ品質良好ナラサルモ最早生ニシテ市價高シ

早早生 田 中 新品種中ノ早生ニシテ果形大、品質良好、收量比較的多ク有望種ナリ

橘早生 新品種ニシテ品質良ク營利的栽培ニ適ス

早生 東 雲 前種ニ亞ク早生種ニシテ特性前種ニ似タリ胴枯病ニ對シ抵抗力強シ  
小 林 前種ニ似タリ

中生 傳 十郎 胴枯病ニ強ク良好ナリ  
離 核 大顆ニシテ品質良好ナリ

晩生 上 海 品質最良ナルモ落果シ易ク收量少キ缺点アリ  
金 桃 黃肉種ニシテ甘味強ク罐詰用トシテ最歡迎セラル

三、葡萄品種試験

供用品種ハ從前三十餘種ニ達シタルモ大正十二年度ヨリ十種ニ減シ試作セリ試験ノ結果優良ト認ムルモノ左ノ如シ

デラウエア 早熟ニシテ樹性强健豊産ナリ果穂果粒小ナル缺点アルモ賣行良好ナリ

ナイヤガラ 極メテ豊産ニシテ栽培シ易シ中生種ニ屬ス

キャンベルス・アーリー 熟期デラウエアト全ク早生種ニシテ樹性强健・果粒ハ紫黒色ヲ帶ヒ大粒ニシテ外皮厚ク輸送ニ耐ヘ品質稍良好ナリ

四、柿品種試験

供試品種ハ四十餘種ニシテ一反八畝歩ニ試作セリ本年度ハ前年度ト全ク多クノ結果ヲ見タルモ九月ノ暴風被害ヲ受ケ收量僅少ナリキ從來ノ成績ニ鑑ミ營利的栽培ニ適スル品種次ノ如シ

「甘柿」 富有、次郎、天神御所、甘百目、國富

「澁柿」 横野、蜂屋、田倉、祇園坊

以上各種中甘柿ハ富有、澁柿ハ横野ヲ最良ト認ム天神御所ハ果形色澤佳良ニシテ早生種トス次ニ良品種ハ次郎、國富、甘百目ノ順ナリ横野ハ樹性强健果形色澤頗ル良好ナリ殊ニ熟期晚ク柿實ノ出荷殆ト皆無ノ際ナレハ相當收益ヲ舉クルコトヲ得大ニ有望ナル品種ナリ

五、柑橘種類試験

大正十二年一月ノ酷寒及降雪ノ爲大部分枯死セシカ被害少キモノハ本年度ニ至リ樹勢回復シ來レリ尙大正十三年四月補植セル苗木ノ發育ハ頗ル良好ナリ

本年度ノ成績ニ依レハ廣島早生温州及大分早生温州ハ尾張温州ニ比シ原産地ニ於ケルカ如ク早生ノ特徴

ヲ發揮セス收穫期略尾張温州ト等シク樹勢稍弱キ感アレトモ豊産ナリ本縣ノ風土ヨリ見レハ品質優良並  
收量ノ多キ点ヨリ見ルモ尾張温州ヲ以テ最營利的品種トス

蔬 菜

夏 作

一、橋田系統茄子比較試驗

本試驗ハ各地ニ於テ栽培セル橋田系統茄子六種ヲ蒐集シ之カ栽培ヲ行ヒ其ノ收量ヲ調査シ優良ト認ムル  
モノヲ選抜セムトスルモノニシテ本年度ニ於ケル成績ハ次ノ如シ

上 條 系	一五八・七九〇	方 領 系	一五〇・四二〇
堀 江 系	一四五・〇五〇	石 造 系	一三九・六八〇
萱 津 系	一三三・五八〇	清 洲 系	一二五・七三〇

二、茄子品種試驗

本場ニテ多年試驗調査ノ結果優良ト認メタル十五品種ヲ保存、交配又ハ調査上ノ資ニ供セムカ爲試作ス  
ルモノニシテ中生千成・古河・大蔵・橋田・横田・矢原・蓆紫・砂村・大阪長・黒中生・眞黒・三島・初月・河邊・三  
十三號等ニ就キ試驗ノ結果優良ト認メタルモノ左ノ如シ

- 橋 田 樹性强健ニシテ特ニ立枯病ニ對スル抵抗力強ク中生種ニシテ果形中長・色澤良好・最豊産ナリ
- 横 田 橋田ノ一變種ニシテ全種ニ類似シ早魁ニ對シ一層強シ
- 矢 原 稍晩生種ニシテ樹性强健・果形豊大・品質良好ナリ

大阪長 最晩生種ニシテ樹性中庸・果ハ長形・肉質柔軟ニシテ品質特ニ良好ナリ

三、茄子連作病害豫防試驗

本試驗ハ大正九年以來引續キ施行シツ、アルモノニシテ茄子連作ニ因リ起ル立枯病ニ對シ石灰硫黄合劑  
ノ効力如何ヲ確ムルヲ以テ目的ト爲シ連年栽培セル畑地ヲ左記ノ方法ヲ以テ土壤消毒ヲ行フモノトス

- 第一區 無消毒 初年ヨリ引續キ消毒ヲ行ハス
- 第二區 一回消毒 移植前ボーメー比重計ノ二度液ヲ一坪一升五合ノ割合ニ撒布ス
- 第三區 二回消毒 移植前ボーメー比重計一度液ニテ消毒シ六月中下旬〇・五度液ニテ消毒ス
- 第四區 三回消毒 第二區ニ準シ消毒ヲ行ヒ六月中旬及七月中旬ノ二回ニ亘リ〇・三度液ニテ同様消毒ス
- 第五區 三回消毒 初メ第二區ニ準シ六月中旬及七月上旬ノ二回ニ亘リ〇・五度液ニテ同様消毒ヲ行フ

右試驗ノ成績ニ依レハ各區共殆ト立枯病ノ發生少ク僅ニ〇・三ノ歩合ヲ呈スルノミニテ極メテ良好ナル  
成績ヲ示セリ

四、茄子一代雜種優劣比較試驗

本試驗ハ茄子ノ一代雜種中如何ナル組合セカ最優良ナルカヲ比較調査セムトスルモノナリ而シテ之カ供  
試一代雜種中形狀兩種ノ中間ヲ得良好ト認ムルモノハ大阪長×中生千成、大阪長×黒中生、橋田×黒中  
生、河邊×中生千成等ニシテ總收量多カリシハ橋田×黒中生、橋田×大阪長、橋田×早生茄子等ニシテ  
結局實用價值最高キモノハ橋田×黒中生、橋田×大阪長ノ兩組合セト認メラレタリ

本年度收量調査ノ結果左表ノ如シ

一代雜種名	親		父		母		一代雜種收量	
	個數	重量	個數	重量	個數	重量	個數	重量
河邊×早生茄	二・九三	二・九三	二・七六	一〇・四	二・六四	二・六四	二・五〇	一一・二〇
橋田×古河	二・二九	二・二九	二・三三	一〇・一	二・三三	二・三三	二・一〇	九・七〇
黒中生×横田	二・一五	二・一五	二・二九	一〇・一	二・二九	二・二九	二・一〇	九・九〇
大阪長×中生千成	一・九四	一・九四	二・〇三	七・七	二・〇三	二・〇三	二・四〇	一〇・四〇
橋田×河邊長	二・六六	二・六六	二・四三	六・六	二・四三	二・四三	二・四〇	一〇・三〇
中生千成×眞黒	二・〇三	二・〇三	二・二七	六・六	二・二七	二・二七	二・六〇	一一・八〇
大阪長×黒中生	一・九四	一・九四	二・二五	八・五	二・二五	二・二五	二・六〇	一一・四〇
中生千成×橋田	二・〇三	二・〇三	二・六六	一〇・一	二・六六	二・六六	二・一〇	一〇・九〇
中生千成×早生茄	二・〇三	二・〇三	二・七六	一〇・一	二・七六	二・七六	二・一〇	一〇・九〇
橋田×中生千成	二・六六	二・六六	二・〇三	七・七	二・〇三	二・〇三	二・一〇	一〇・九〇
橋田×黒中生	二・六六	二・六六	二・二五	八・五	二・二五	二・二五	二・一〇	一〇・九〇
早生茄×橋田	二・四三	二・四三	二・二五	八・五	二・二五	二・二五	二・一〇	一〇・九〇
古河×早生茄	二・三六	二・三六	二・六六	一〇・一	二・六六	二・六六	二・一〇	一〇・九〇
橋田×三島	二・六六	二・六六	二・七六	一〇・一	二・七六	二・七六	二・一〇	一〇・九〇
橋田×大阪長	二・六六	二・六六	二・七六	一〇・一	二・七六	二・七六	二・一〇	一〇・九〇
橋田×早生茄	二・六六	二・六六	二・七六	一〇・一	二・七六	二・七六	二・一〇	一〇・九〇
河邊×早生千成	二・九三	二・九三	二・〇三	七・七	二・〇三	二・〇三	二・一〇	一〇・九〇
橋田×眞黒	二・六六	二・六六	二・一〇	七・七	二・一〇	二・一〇	二・一〇	一〇・九〇
大阪長×早生茄	一・九四	一・九四	二・七六	一〇・一	二・七六	二・七六	二・一〇	一〇・九〇

五、節成胡瓜優良系選抜試験

本試験ハ在來節成種ヲ大正九年以來栽培シ其ノ中ヨリ結果・顆形・色澤良好ニシテ成節早ク各節毎ニ雌花ヲ着生セシムル目的ヲ以テ栽培淘汰ニ努メ大正十年度ニ四十系統ヲ選出シ大正十三年度更ニ其ノ中ヨリ三十系統ヲ選出セリ本年ハ之カ三十系統ヨリ更ニ相互ノ優劣純否ヲ比較調査シ最優良ト認ムルモノ十五系統ヲ選出セリ

六、胡瓜品種試験

從來試作シ來レル優良品種ニ更ニ新品種ヲ加ヘテ收量・色澤・樹勢等ニ就テ其ノ何レカ優良ナルカヲ比較調査シ併セテ品種保存交配等ニ資セムカ爲施行セルモノニシテ試験ノ結果優良ト認メタルモノ左ノ如シ  
改良尾張節成 早生太蔓ニシテ發育良好、果ハ綠色ニシテ特ニ長形ノ節成種ナリ

尾張節成 樹性前種ニ全シク稍短形ノ半白種ニシテ豊産ナリ

落合節成 蔓太ク強健、果ハ稍長形豊産ニシテ色澤暗綠色ニシテ顆粒大ナリ

七、葱品種試験

本試験ハ葱品種中優良ト認メタル越津・千住・砂村・九條ノ四種ニ就キ其ノ品質收量特性ヲ比較調査シ更ニ之カ採種ヲナサムカ爲施行シ優良ト認メタルモノ左ノ如シ

越津 根深葱ノ細莖種ニシテ分蘖多ク煮食シテ極メテ柔軟甘味多シ

千住 根深葱ノ太莖種ニシテ分蘖少ク收量多シ品質稍前者ニ劣ル

九條 本種ハ葉葱トシテ分蘖多ク最良好ナリ

八、葱頭品種試験

本試験ハ前年度ヨリ試作採種セルエーローダンバース・エーロースキン・佛十號ノ三種ニ就キ之カ收量品



質等ヲ調査セリ

エーローダンバース 中生扁圓種ニシテ收量最多ク貯藏ニ耐ヘ實用的品種ナリ

佛十號 早生種ニシテ早出用トシテ良好ナルモ貯藏ニ耐ヘサル缺點アリ

#### 九、甘藍品種試驗

本試驗ハ多年試作ノ結果良好ト認メタル野崎系・中野系・豊田系ノ三系統ニ就キ其ノ特性・品質・收量等ヲ比較調査セムトスルモノニシテ其ノ成績ニ依レハ野崎早生ハ結球ノ形狀品質他種ニ優ルコト多キモ其ノ栽培ノ如何ニ依リテハ抽莖スルノ缺點アリ、豊田早生ハ結球ノ形狀品質前者ニ劣ルモ結球歩合極メテ良好ナリ、中野系ハ殆ト豊田系ト同様ナリ中生種トシテハ野崎中生種最良好ニシテ他ニ次クモノナシ

#### 一〇、西瓜品種試驗

本試驗ハ現今各地ニ栽培セララル品種中何レカ品質・收量・樹勢等ニ於テ最優良ニシテ本縣地方ノ風土ニ適スルヤヲ知り併セテ品種改良上ノ參考トナサムトスルモノニシテ傳法寺・嘉寶・甘露・スキートサイベリアン・アイスクリーム・大和・野田・大和純一號・大和純五號・チリアン・ベビー・デライト等ノ品種ヲ供用セリ其ノ中品質良好豊産ニシテ實用的品種ト認メラルハ大和ニシテアイスクリーム之ニ亞ク其ノ他甘味最優良ノモノハ甘露・嘉寶等アルモ實用種ト認ムル能ハス

#### 秋 作

#### 一、結球白菜品種試驗

本試驗ハ結球白菜中有望ト認メタル六種ニ就キ之カ收量結球歩合ヲ調査シ併セテ何レカ本縣ノ氣候土質ニ好適スルカラ試験セムトスルモノニシテ發芽後ノ成績ハ何レモ可良ナリシカ其ノ後心喰虫ノ被害ヲ受

ケ好成绩ヲ擧ケ得サリシモ茨城白菜ノ如キハ結球緊密ニシテ優品アリ直隸白菜ハ半結球ナリシモ重量最多ク且害虫濕氣ニ對スル抵抗力強キカ如シ

#### 二、宮重大根抽莖期ニ於ケル枝狀態ト根部伸長トノ相關關係調査

本試驗ハ宮重大根ノ抽莖期ニ於ケル枝狀ノ變化ト根部ノ伸長トノ間ニ如何ナル相關關係ヲ有スルヤヲ研究セムトスルモノニシテ其ノ區別左ノ如シ

- 一 號 型 枝細ク枝數多ク橫繁性ノモノ
- 二 號 型 枝太ク枝數少ク稍直立性ノモノ
- 三 號 型 枝細ク枝數多ク直立性ノモノ
- 四 號 型 枝太ク枝數中庸、稍橫繁ノモノ
- 五 號 型 枝稍太ク枝數中庸枝ノ立テ方中様ノモノ

右試驗ノ成績ニ依レハ其ノ根部ノ伸長收量ニ於テ最優良ナルハ第二號型ニ屬スルモノニシテ第一號型之ニ亞ク依テ其ノ間ヲ考察スルニ枝狀ノ一般ニ直立性ノモノハ根部ノ伸長モ多カルヘク橫繁性ノモノハ稍短形ニ屬スルニ非サルカト思ハルルモ尙連續調査ヲ爲シ採種上ノ參考ニ資セムトス

#### 三、宮重大根長太系及堀江大根尻細系選抜試驗

本試驗ハ澤庵漬用トシテ最良好ナル宮重長太系及堀江尻細系ノ優良ナルモノヲ選抜セムトスルモノニシテ前年選抜セル十三系統中ヨリ更ニ本年ハ三十系統ヲ選抜セリ

#### 四、水田裏作委託試驗

冬季水田裏作トシテ蔬菜ヲ栽培スルハ農家ノ副業トシテ收益多カルヘキモノナルヲ以テ本場ハ之カ獎勵

ノ目的ヲ以テ左ノ四ヶ所ニ委託試験ヲ設ケ苺・胡瓜・甘藍・胡蘿蔔・午莠・蒿苳・馬鈴薯・蠶豆・葱頭等ノ試作ヲ行ヘリ

知多郡富貴村

渥美郡高師村

西春日井郡新川町

碧海郡新川町

右各所ニ於ケル試作ノ結果ハ何レモ良好ニシテ裏作トシテ如上ノ各作物ヲ栽培シ得ヘシトノ觀念ト其ノ栽培法トヲ地方民ニ示スヲ得タリ而シテ前記蔬菜中特ニ其ノ栽培有望ト認メタルハ市街附近ニ在リテハ苺・甘藍・午莠等ニシテ都市ニ遠隔セル地方ニ在リテハ甘藍・胡瓜・午莠等トス

蔬菜種子ノ改善

本縣ノ蔬菜ハ其ノ栽培起源古ク從テ特産蔬菜ニ富ミ之等種子ハ年々六千石以上ヲ生産スルノ盛況ヲ呈ス而シテ縣内ノ蔬菜ヲ改良シ縣外ニ於ケル種子ノ需要ヲ益々多カラシメトスル根本問題ハ種子ノ改善ニ在リ本場ニ於テハ夙ニ此ノ点ニ着目シ大正六年度ヨリ先ツ其ノ生産量ノ最多キ宮重大根ニ就キ着手シ爾來専心努力シタル結果其ノ成績極メテ良好ニシテ蔬菜栽培上多大ノ効果ヲ奏シツツアリ其ノ方法ハ十二月下旬普通栽培ニ係ル母本畑ヨリ優良ト認ムル母本ヲ選抜シテ之ヲ集團栽植シ其ノ開花ニ先チ一分目ノ金網室ヲ組立テ被覆ヲナシ交媒用トシテ内ニ一箱ノ密蜂ヲ入レ以テ結實ノ完全ヲ圖リ其ノ大部分結莢セルヲ見計ヒ金網室ヲ撤去スルモノナリ本年栽培ノ面積ハ五十五坪ニシテ五升六合ノ原種ヲ採取スルヲ得之ヲ左記ノ如ク配付セリ

中島郡農會

五合

東春日井郡農會

五合

碧海郡農會

六合

愛知郡農會

一升

知多郡大府町木ノ山山口友吉

二合

碧海郡高岡村駒場手島代吉

二合

知多郡上野村名和三盛權太郎

一合

知多郡大府町木ノ山山口三治郎

二合

知多郡大府町共和坂野芳之助

一合

知多郡大府町共和深谷作一

一合

知多郡武豊町農會長石川善次郎

一合

知多郡八幡町青年團神谷嘉一郎

一合

知多郡野間村農會宇野榮

五合

西春日井郡豊山村北島河村淺吉

一合

西春日井郡豊山村坪井秀一

一合

葉栗郡宮田村後飛保瀧市次郎

一合

大阪府立農事試驗場

一合

丹羽郡千秋村小山佐藤一太郎

五合

丹羽郡千秋村加茂農場重一

五合

丹羽郡千秋村加納馬場長谷川文三郎

五合

丹羽郡千秋村浮野兒島義治

五合

丹羽郡岩倉町稱荷片岡泰次郎

五合

丹羽郡丹陽村多架野村富十郎

五合

丹羽郡千秋村加納馬場河口三好

五合

丹羽郡布袋町五明岩田周一

五合

丹羽郡千秋村淺野羽根春日井精三郎

五合

丹羽郡西成村丹羽林喜榮

五合

丹羽郡布袋町寄木大島角右衛門

五合

丹羽郡布袋町五明岩田源藏

一合

丹羽郡布袋町五明岩田郁一

五合

丹羽郡千秋村小山佐藤一太郎

五合

丹羽郡西成村定水寺祖父江善藏

五合

丹羽郡千秋村浮野兒島義治

五合

愛知郡幡山村本地矢野千代太

一合

種 苗 配 布

本場ニテ多年試驗ノ結果優良ト認メタル蔬菜品種ニ就キ隨時之カ採種ヲ行ヒ縣下一般ノ希望者ニ無償配布ヲ行ヘリ本年度配付ニ係ルモノ左ノ如シ

一、秋蒔蔬菜種子

宮重大根	八五〇 <sup>※</sup>	方領大根	五五〇 <sup>※</sup>	大治蕪菁	七五〇 <sup>※</sup>
春福大根	四二〇	早生甘藍	一二〇	中生甘藍	一五〇
堀江大根	六二〇	雪白体菜	三〇〇	越津葱	一〇〇
九條葱	七〇	愛知白菜	七八〇		

二、春蒔蔬菜種子

茄子	五〇〇 <sup>※</sup>	胡瓜	二五〇 <sup>※</sup>	南瓜	三五〇 <sup>※</sup>
糸南瓜	一二〇	西瓜	一五〇	蕃茄	一三〇

温室及促成栽培

一、マスクメロン品種試験

從來栽培シ來レルモノノ内良好ト認メタルモノニ新品種ヲ加ヘ優劣ヲ試験セリ成績良好ナルモノ左ノ如シ

- スカーレット 強健豊産、肉ハ鮮色ニシテ香氣高ク甘味強シ
  - エノラルドゼム 性強健豊産綠肉種ニシテ甘味強ケレトモ香氣少シ
  - ヒーローオブロッツキンジ 強健豊産、白肉種ニシテ甘味強ケレトモネツト粗ナル缺点アリ
- 二、葡萄品種試験  
左記ノ四種ヲ供用セリ

三、茄子品種試験

グローコールマン 最晩生ニシテ強健且極メテ豊産ナリ果ハ黒色ニシテ大粒ナレトモ品質稍劣ル  
 マスカット・オブ・アレキサンドリヤ 中生ニシテ豊産ナリ果ハ白色、品質極メテ良好ナリ  
 ホースター・シードリング 強健豊産早熟ニシテ品質良好ナリ  
 ブラツクハンボलग 強健ニシテ早生ナレトモ品質收量共ニ劣ル

從來試験ノ成績ニ鑑ミ良好ト認メタル四種ニ就キ試験ヲ施行セシニ左ノ兩種ハ成績最良好ナリキ  
 中生千成 強健豊産、中生種ニシテ果圓ク色澤稍劣ル  
 眞黒 強健豊産、中生種ニシテ果ハ中長、色澤良好ナリ

四、メロン交媒試験

英國種ト東洋種(棗瓜)トノ交媒ヲナシ強健ニシテ且品質ノ良好ナル品種ヲ作付セムトシ左ノ如ク交媒採種セリ

雌	雄	雌	雄
棗瓜 × スカーレット	スカーレット × 棗瓜	スカーレット × 棗瓜	スカーレット × 棗瓜
棗瓜 × A I	A I × 棗瓜	A I × 棗瓜	A I × 棗瓜

五、茄子連作試験

茄子ヲ連作セムトスル場合如何ナル薬剤ヲ用フルヲ可トスルヤヲ知ラムカ爲左記區分ニ依リ試験ヲ施行セリ

(一)標準區 新田土六分、堆肥四分ノ割合ニ混合セルモノ

- (二)石灰硫黃合劑消毒區 前年茄子床ニ使用シタル土壤七分ト堆肥三分トヲ以テ作成セル用土一框分ヲ石灰硫黃合劑ボーメー比重三度ノモノニ升ヲ以テ消毒セルモノ
- (三)藁灰消毒區 前年茄子床ニ使用シタル土壤七分ト堆肥三分トヲ以テ作成セル用土一框分ニ對シ藁灰六百々ヲ混入消毒セルモノ
- (四)石灰消毒區 前年茄子床ニ使用セシ用土七分ト堆肥三分トヲ以テ作成セル床土一框分ニ對シ消石灰二升ヲ混入消毒セルモノ

右試驗ノ結果品質ニ於テハ藁灰消毒區最良好ニシテ石灰硫黃合劑區之ニ亞キ消石灰消毒區最劣レリ收量ニ於テハ各區共大差ナク且各區共枯死株ナシ

六、胡瓜品種試驗

從來試驗ノ成績ニ鑑ミ良好ト認メタル四種ヲ供用セリ其ノ特性左ノ如シ

- T 號 強健豐産、果ハ濃綠色長形ニシテ品質良好ナリ
- 落合節成 強健豐産、果ハ濃綠色ニシテ長シ肥料分ヲ要スルコト多シ
- 金 澤 強健豐産果ハ濃綠色ニシテ形狀最長シ肥料分ヲ多ク要ス
- 在來種 強健豐産、果ハ綠色ニシテ中長形トス

七、作試及品種試驗

- 蕃 椒 二框 鵲 豆 二框
  - 山 椒 二框 冬 瓜 二框
- 右ノ外不耐冬性花卉類ノ試作ヲ行ヘリ

加工

漬物ニ關スル研究

一、茄子鹽漬成績

刻漬物原料トナス鹽漬中呼水ノ注入並漬替塩量ノ多少カ製品並貯藏期ノ長短ニ影響スル關係ヲ知ラムカ爲前年ニ引續キ試驗シタル成績左ノ如シ

- イ、呼水ノ多少 茄子漬込ノ際水揚リ遲キ爲腐敗ヲ來スコト多ク呼水ノ注入ハ最必要ナル事項ニシテ四斗樽ヲ用ヒ生茄子十貫々ヲ漬込ミ呼水トシテ淺水三升・四升・五升ノ三種ニ分テ試驗シ二週間ノ後調査セシ處ニ依レハ呼水少キモノハ殆ト腐敗多ク四升・五升ハ共ニ比較的良好ナリ
- ロ、塩量ノ多少 漬込ノ際原料十貫々ニ對シ一貫・一貫三百々・一貫五百々ノ三種ニ就キ試驗シタルニ塩量多キ程肉質良好ナリシモ一貫々以上使用スル要ナキカ如シ一箇月後ニ於テ調査セシ結果ヲ示セハ左ノ如シ

區 別	品質	色澤	備 考
一貫 々	不良	稍不良	鹹味少ク酸味強シ
一貫三百々	稍良	良	鹹味アリ酸味ヲ帶フ
一貫五百々	良	良	鹹味強ク果皮硬キモノ多シ

右ノ如ク一貫三百々ノモノ最良好ニシテ一貫五百々使用スル必要ナキカ如シ第二回漬替トシテ原料十貫ニ對シ鹽量一貫・一貫三百々・一貫五百々ノ三種ニ漬込ミ目下貯藏中

ハ、茄子漬漬成績

大正十三年度施行成績ヲ示セハ左ノ如シ

回数	月日	四斗樽漬込量	茄子量調査	生茄子量ニ換算
漬込	七・二三	生茄子 10,000	生茄子 10,000	10,000
第一回漬替	八・九	漬込茄子 18,000	漬替ノモノ 6,000	30,000
第二回漬替	九・二〇	第一回漬替茄子 18,000	第一回漬替ノモノ 14,000	38,000
製品	翌年 九・二二		第二回漬替ノモノ 16,000	40,000

右表ノ如ク製品十六貫ヲ得ルニハ生茄子三十八貫乃至四十貫ヲ要スカ如シ

二、越冬奈良漬試験

越冬奈良漬製造ニ對シ鹽量及粕量ノ多少並漬替方法ノ如何カ製品ノ品質貯藏期間ニ影響スル關係ヲ知ラ

ムカ爲前年ニ引續キ左記ノ如ク試験ヲ施行セリ

イ、青瓜漬込法試験 青瓜(カリモリ)ヲ以テ原料瓜十貫ニ對シ塩量ニ於テ九百九十匁(三升)一貫三百二十匁(四升)一貫六百五十匁(五升)ノ三種ニ酒粕量八貫・九貫・十貫・十一貫ノ四種・漬込方法ニ於テ橫向

下向ノ二種ニ分テ試験シタルニ左ノ如キ成績ヲ得タリ

(一)生漬トシテ其ノ儘食用トナスニ適スルモノ(一箇月内外後ニ於テ)  
 瓜 量 九貫 酒粕量十貫乃至十一貫  
 塩 量 九百九十匁 下向漬

(二)漬替用ノ原料トシテ適スルモノ(一箇月内外後ニ於テ)

瓜 量 十貫乃至十一貫 酒粕九貫

塩 量 一貫三百二十匁乃至一貫六百五十匁 橫向漬

ロ、漬替法試験 前記原料ヲ以テ二斗樽ニ味淋粕漬・味淋粕酒粕半量漬・味淋粕七分酒粕三分漬ノ三種ニ就キ試験セリ原料並製品左ノ如シ

種類	原料	調味材料	製品	品質
味淋粕漬	五・〇〇〇	味淋粕五貫、味淋一升、砂糖百二十匁	四・七二八	甘味多キニ過キ外皮稍硬シ品質上
半味淋粕漬	五・〇〇〇	味淋粕二貫五百匁、酒粕二貫五百匁、味淋一升、砂糖百二十匁	五・〇三五	甘味多ク肉質良好ニシテ果皮軟ク齒切良好
七・三味淋粕漬	四・八〇〇	味淋粕三貫、酒粕二貫、味淋一升、砂糖百二十匁	四・三二五	風味良ク肉質良

以上ノ成績ニ依リ味淋粕ハ甘味多キニ過キ半味淋最良好ナリ

ハ、漬替調味材料比較試験 酒粕漬ニセシ瓜ヲ原料トシテ二斗樽ニ味淋粕・古味淋粕・酒粕味淋砂糖ノ材料ヲ以テ製造シ製品ノ品質ヲ比較セシニ左記ノ如キ結果ヲ得タリ

(一)味淋粕ノミノモノニ味淋砂糖ヲ加ヘタルモノハ甘味多キニ過ク

(二)味淋粕ノ内三分ノ一古粕(昨年度ノ味淋粕)ヲ混入シタルモノハ製品ノ色澤濃褐色ヲ呈シ美麗ナリ

(三)味淋粕酒粕等量使用シタルモノニ砂糖ヲ加ヘサルモノハ甘味稍少シ

ニ、糖漬瓜奈良漬試験 青瓜白瓜ノ二品種ヲ收穫後鹽漬トナシ貯藏シ置キタルモノヲ粕ニ漬替シ兩種ノ品質ヲ比較セシ結果左ノ如キ成績ヲ得タリ

- (一) 青瓜 (カリモリ) 製品ノ水分少ク外皮極メテ硬クシテ歩減リ甚シク品質優良ナラス
  - (二) 白瓜ハ前者ニ比シ肉質柔軟ニシテ外皮軟ク品質比較的良好ナリキ
  - (三) 右ノ成績ニ依リ奈良漬原料トシテ青瓜ヲ塩漬トシテ貯藏シ漬替ヲ行フ價值乏シキモ白瓜ハ之ニ反シ良好ナリト雖多量ノ塩ヲ混入セシ古粕中ニ貯藏シ置クヲ以テ最良好トス
- 三、越冬品種試験

「カリモリ」早生「カリモリ」桂瓜・高田・相澤・東京大ノ六品種ヲ栽培シ奈良漬並塩漬ニ製造シ各種ノ品質ヲ比較セシニ青瓜トシテハ「カリモリ」白瓜トシテハ桂瓜ヲ以テ最優良ナル結果ヲ見タリ

四、澤庵大根品種試験

宮重系五種練馬系七種ヲ栽培シ之カ特性ヲ知り澤庵漬トナシ品質貯藏期ヲ比較シ適種ヲ選出セムトセリ其ノ成績ハ宮重系中當場選出長形ノモノ練馬系中堀江大根漬物用(尻細)ノ二種最良好ナリシモ尙引續キ試験スル所アルヘシ

五、澤庵漬壓石重量試験

壓石ノ重量カ製品ノ品質ニ及ホス關係ヲ知ラムカ爲宮重大根ヲ本乾燥トナシ漬込ノ上十五貫・二十貫・二十五貫ノ三種ニ區別シ目下貯藏中

六、澤庵大根乾燥對塩量試験

大根ノ乾燥程度ニ對スル塩量カ貯藏期間並品質ニ及ホス影響ヲ知ラムカ爲宮重・堀江ノ二品種ヲ用ヒ目下貯藏中ナレトモ調査終了セル成績ヲ示セハ左ノ如シ  
(鹽量ハ四斗樽ヲ標準トス)

品 種	乾燥程度	塩 量	調査月日	色 澤	甘 味	風 味	備 考
宮 重	中 乾	一・五〇〇	四・八	良	稍 少	多	多
全 堀	全	一・〇〇〇	四・八	稍 良	稍 多	多	多
全	全	一・〇〇〇	四・八	稍 良	稍 少	多	多
全	全	一・三〇〇	四・八	稍 良	稍 少	淡	白
							稍 多

七、淺漬澤庵調味材料混入試験

淺漬澤庵ニ甜味並風味ヲ附與スルノ目的ヲ以テ麴・味淋粕・胡椒・桂皮・白砂糖・甘草・アジマスヲ混合シ試験シタル結果ヲ示セハ次ノ如シ

但シ大根ハ淺乾燥トナシ四斗樽ニ付大根二十貫鹽一貫米糠一貫二百匁ヲ用ヒタリ

種 目	大根品種	混合量	色 澤	甘 味	風 味	備 考
麴	宮 重	八〇〇	良	最 多	稍 アリ	肉質稍硬キカ如シ
味 淋 粕	全	一・〇〇〇	良	稍 多	奈良漬同様ノ風味アリ	内部ノ色澤最良好ナリ
胡 椒 及 桂 皮	全	各一〇	良	稍 多	桂皮ノ風味多シ	肉ノ内部マテ色澤淡シ
白 砂 糖	全	五〇〇	稍 淡 黃	多	稍 アリ	
甘 草	全	四〇〇	稍 不 良	多	稍 アリ	肉色良好
桂 皮	全	一〇	最 良	多	桂皮風味多シ	最 淡 白 ナリ
標 準	全	一	稍 良	稍 少	稍 アリ	

種目	大根品種	混合量	色澤	甘味	風味	備考
アジマス	堀江	四〇	着色セス	稍多	稍アリ	品質ニ於テ兩種ノ區別困難ナリ
黄粉	全	三〇	淡黄色	稍多	全	
味淋	全	一〇〇〇	着色セサル 箇所アリ	稍多	最多	
砂糖	全	三〇〇	稍長	最多	稍アリ	
麵粉	全	三升	稍良	稍多	稍多	

以上ノ成績ニ依リ調味ノ種類ハ人ノ嗜好ニ依リ異ル所アリト雖甘味ヲ増加セシムルニハ麴・砂糖・甘草等ニシテ風味ヲ附與スルニハ味淋・胡椒・桂皮ノ如ク殊ニ桂皮ノ如キハ一種ノ藥香アリテ人ニ依リ嫌忌セラルルモ胡椒ノ如キハ風味ヲ與ヘ良好ナルヲ認メタリ

八、澤庵漬用器試験

澤庵漬製造器トシテ酒樽・酢樽・醬油樽・味噌樽・餠樽ノ五種ニ漬込ミ目下貯藏中

九、食塩品質試験

澤庵漬製造並普通使用セラルル食塩ハ二等鹽五等鹽ノ二種トナスモ之カ製品ニ及ホス關係ヲ知ラムカ爲宮重大根ヲ用ヒ淺漬貯藏用ノ二種ニ分テ漬込ミ貯藏用ハ目下貯藏中ナルモ調査終了セシ淺漬ニ付キ之カ比較ヲ示セハ左ノ如シ  
但シ淺乾燥大根二十貫ニ對シ何レモ食塩一貫匁米糠七升ヲ以テ漬込セシモノナリ

區別	調査	色澤	肉質	品質
三等鹽	四・一〇	良	良	鹹味殆トナク甘味多クシテ良好ナリ
五等鹽	全	良	良	鹹味稍多ク殊ニ苦汁ノ口中ニ殘ルチ感シ良好ナラス

以上ニ依リ色澤肉質ニハ大差ナキモ宮重大根淺漬用トシテハ三等鹽ヲ以テ良好ナリトス

罐詰ニ關スル研究

一、グリーンピース品種試験

グリーンピース罐詰用適種ヲ選出スルノ目的ヲ以テ十四品種ヲ栽培シ其ノ特性ヲ調査シ罐詰ニ製造ノ上品質ノ優劣ヲ比較セリ其ノ結果良好ト認メタル品種ト之カ特性ヲ示セハ左ノ如シ

品名	強弱	收量	粒ノ大小	摘要
アラスカ	弱	稍多	小	粒圓形小ニシテ適當ナルモ寒害ヲ受クルコト甚シク生育不良ナルヲ缺點トス
フレンチキャンデー	強	最多	稍小	強壯ニシテ收量多ク良好ナルモ粒形稍不正ナルヲ缺點トス
ポールビー	弱	稍多	稍小	粒形良好ナルモ寒害ニ弱キヲ缺點トス
ブレンテフル	強	最多	中	粒形濃緑ニシテ甘味多ク良好ナルモ粒皮薄キニ過キ罐詰後破裂粒ヲ多ク生スルヲ缺點トス

二、ソース用トマト品種試験

トマトノ品種カトマトソースノ色澤品質生産量ニ影響スヘキ關係ヲ知リ以テ適當ナル品種ヲ選出スルノ目的ヲ以テ二十品種ニ就キ製造比較シタルニ愛知トマト・ジョンペーア・アーリーアナ・ベストオブオー等成績良好ナリシモ尙引續キ試験セムトス

三、トマトソース製法試験  
 トマトソース製造上煮熟ノ時間並其ノ方法カ製品ノ品質ニ及ホス關係ヲ知ラムカ爲試験シタル成績左ノ如シ

方法別	原料五貫匁 ヨリノソノ 重量	全上容量 一升ノ重量	色澤	濃度	甘味	酸味	品質	香氣
鉄鍋一時間半煮沸	二・二九〇	四・七	四・六	濃暗紅	稍淡	多	多	多
銅鍋一時間半煮沸	二・三〇〇	四・七	四・九〇	稍暗紅帶黃	淡	多	多	多
二重鍋四十分間煮沸	二・〇三五	四・一	四・九四	稍暗紅	稍淡	多	多	多
十分間蒸煮後袋濾	一・九二〇	三・九	四・八八	鮮紅	濃	多	少	稍アリ
二十分間蒸煮後袋濾	一・九一八	二・六	四・九〇	濃鮮紅	最濃	少	少	少
二十分間蒸煮	二・九六〇	六・一	四・八四	鮮紅稍淡	最淡	少	少	稍アリ
三十分間蒸煮	一・八二〇	三・八	四・八六	稍暗紅	濃	少	少	稍アリ
十分間蒸煮二十分間煮沸	二・三二〇	四・七	四・九〇	稍暗紅	稍淡	稍多	稍アリ	稍アリ

四、トマトソース濾過法試験

トマトソース製造上濾過ノ方法カ製品品質ニ及ホス影響ヲ知ラムカ爲施行セリ其ノ成績左表ノ如シ

區別	ソノスノ量 (五貫匁ノ生果ヨリ)	容量	一升重量	ソノ品質
二十三目篩	二・三〇〇	四・八	四・八四	最粗ニシテ纖維ヲ混ス
二十六目篩	二・〇八〇	四・二	四・八二	緻密ニシテ良好

區別	ソノスノ量 (五貫匁ノ生果ヨリ)	容量	一升重量	ソノ品質
濾過後 二十三目篩	二・二六〇	四・五	四・八〇	稍粗ニシテ纖維ヲ混ス
濾過後 二十六目篩	一・八二〇	三・八	四・八二	最緻密ニシテ液濃厚ナリ

五、罐詰用トマト品種試験

トマトノ罐詰用適種ヲ選出セムカ爲六品種ヲ用ヒテ製造セリ容器一封度罐ニシテ完全ナル試験ヲ施行シ得サリシモ製品成績ヲ示セハ左ノ如シ

品種名	内部	外皮	果形	肉質	風味
ジョンベア	稍淡シ	稍濃シ	稍良	水分少ク良	良
ニュービクトリアボールサラダ	稍淡シ	稍淡シ	良	水分多ク稍不良	稍良
アーリーフリードム	良好	稍濃シ	稍良	良	良
ウインタービュータイ	淡シ	不	不	水分多ク稍不良	良
ボンニーマスト	淡シ	稍良	稍不良	水分多ク稍不良	稍良
札幌	稍淡シ	稍良	不良	水分多ク稍不良	稍良

六、各種罐詰製造  
 鵲豆・枝豆ノ罐詰・梨桃枇杷ノ砂糖漬・苺夏橙ノジャム・トマトケチャップ製造等ヲ施行セリ

乾燥ニ關スル研究

一、大根切干品種試験

大根品種カ切干生産量並品質ニ及ホス關係ヲ知ラムカ爲宮重系九種ヲ蒐集シ栽培ノ上切干製造ヲ行ヒ之



カ製産量並品質ヲ比較セシニ大要左ノ如キ結果ヲ見タリ

切干收量多キモノ 氏永・明治・宮重  
品質良好ナルモノ 下津・氏永・宮重・宮重長太

二、乾燥程度試験

宮重大根ヲ用ヒ生大根ニ對シ一割二分・一割・八分・七分ニ相當スル乾燥程度ノモノヲ調製シ之カ貯藏中ニ於ケル品質色澤ノ變化ヲ調査スルノ目的ヲ以テ目下貯藏中ナリ

畜 産 部

本年度ニ於ケル畜産部ノ業務ハ前年度ヨリ繼續セル鶏種改良事業就中産卵能力増進ニ關スル試験名古屋種三河種ノ改良種鶏種卵ノ配布・飼養ニ關スル試験等カ其ノ主ナルモノナリ

成鶏飼料配合表

本場ニ於ケル成鶏飼料配合法左ノ如シ但シ季節ニ依リ多少ノ變更ヲ加フルモノトス

		粒 餌	
		(一) 大 麥 芽 出	五〇%
		小 麥	三〇%
		大 麥	二〇%
		挽 割 玉 蜀 藜	
		粉 餌	
		糠	二五%
		在 粕	三〇%
		豆	二〇%
		粉	一〇%
		魚 粉	一五%

給與法

朝 (午前七時)	大麥芽出	一羽當	三・六
夕 (午後五時)	粒餅 <small>前記(二)ノ配合ノモノ</small>	全	一〇・〇
終日	粉餅	全	一五・〇 (豫定)

右ノ外石片・貝殻・青菜ハ適宜之ヲ給與ス

一、原種蕃殖

イ、白色レグホーン種

白色レグホーン種ニ在リテハ前年度米國ハリウッド農場ヨリ輸入セルハリウッド系白色レグホーン種並  
富山縣正覺園ヨリ購入セル同系ヲ基礎種トシテ蕃殖シ又種禽及種卵ヲ正覺園・農林省畜産試驗場及千葉  
縣茂原養鶏場ヨリ購入蕃殖シ白色レグホーン種ヲ全部ハリウッド系トセリ

而シテ當場産同系ノ一箇年産卵能力ハ未タ之ヲ知ルヲ得サレトモ極メテ優秀ナル成績ヲ收メツツアリ  
ロ、三河種並名古屋種

三河種並名古屋種ニ在リテハ各其ノ種類ノ特徴ヲ具備セルモノニシテ産卵能力一箇年二百卵以上ノモノ  
ノミヲ基礎種トシテ蕃殖ヲ行ヒタリ而シテ其ノ蕃殖ヲナスニ方リテハ血統籠ヲ使用シテ一々其ノ父母ヲ  
明カニシ其ノ血液關係ニ依リテ雌雄ノ交配ヲナシタリ其ノ結果ハ未タ之ヲ知ルヲ得サルモ極メテ優秀ナ  
ル産卵能力ヲ發揮シツツアルモノ多數生シタリ

ハ、産卵能力調査

本年度ニ於ケルトラツブネスト調査ノ結果ハ次ノ如シ

種別	平均一箇年産卵數	備考
白色レグホーン種	一六四・四七	二十一羽ノ平均
名古屋種	一五七・〇八	三十五羽ノ平均
三河種	一五三・四四	二十五羽ノ平均

右ノ中白色レグホーン種ノ最高記録ハD三三〇號ニシテ二百七十八個、名古屋種ハE一〇八號ニシテ二  
百四十四個、三河種ハB一九一號ニシテ二百三十三個ナリ

二、種鶏無償配布

從來行ヒ來リシ各都市ヘノ種鶏無償配布ノ目的ヲ一層徹底セシメムカ爲配布數ヲ五十羽内外トシ其ノ  
品質ノ向上ニ極力努メタリ即チ配布スヘキ種鶏ハ當場ニ於ケル能力最優秀ニシテ其ノ血統明白ナル種  
禽ノ仔禽中其ノ孵化後四五箇月ニ於テ更ニ種類ノ特徴發育等ニ依リ淘汰シタルモノニシテ之ヲ配布スル  
ニ方リテハ夫々血統證ヲ附シ血液關係ヲ明ニシテ雌雄配偶ニ便ナラシメタリ

郡市	名古屋種	三河種	白色レグホーン種	計
名古屋市	六羽	一	一	六羽
豊橋市	一	一	一	一
岡崎市	一	二羽	一	二羽
一宮市	一羽	一	一	一羽
愛知郡	二羽	一	一	二羽

郡	東春日井郡	西春日井郡	丹羽郡	葉栗郡	中島郡	海部郡	知多郡	碧海郡	幡豆郡	額田郡	西加茂郡	東加茂郡	北設樂郡	南設樂郡	寶飯郡	渥美郡	八名郡
名古屋種	二羽	二羽	四羽	一羽	一羽	二羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽
三河種	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽
白色レグホーン種	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽	一羽
計	三羽	三羽	四羽	一羽	一羽	二羽	一羽	四羽	四羽	二羽	二羽	一羽	二羽	二羽	三羽	三羽	二羽

三、種卵ノ拂下

本年度ニ於テ當業者ニ拂下セル種卵ノ數ハ九千三十四個ニシテ拂下人員ハ二百六十四名ナリ尙拂下希望者極メテ多數ナルモ其ノ需要ニ應シ得サリシハ遺憾ナリ各郡市別拂下數量左ノ如シ

計	一九羽	一四羽	一三羽	四六羽
名古屋種	二・五四〇 <small>個</small>	八二四 <small>個</small>	九七三 <small>個</small>	四・三三七 <small>個</small>
三河種	一	一	一	一
白色レグホーン種	一	一	一	一
計	一九六	二七	一一	三三九
愛知郡	四六四	一三	一七九	二三五
東春日井郡	三六	三九	一一二	六五六
西春日井郡	二二九	二二〇	六八七	一八七
丹羽郡	一三六	一一	一七三	一・一三六
葉栗郡	四二	一	一	三二一
中島郡	二〇	七四	一七一	四二
海部郡	三二	二六	五二九	二六五
知多郡	一五	四〇	五七	五八七
碧海郡	二四	四九	八四	一一二
八名郡	一	一	一	一五七

郡市	名古屋種	三河種	白色レグホーン種	計
幡豆郡	1	93	110	213
額田郡	1	70	50	120
西加茂郡	12	1	163	175
東加茂郡	1	1	10	10
北設樂郡	16	1	10	26
南設樂郡	1	1	1	3
寶飯郡	1	1	1	3
渥美郡	1	1	124	126
八名郡	1	1	12	14
計	3762	1609	3663	9034

四、試験事項

多産鶏ノ作出、名古屋種三河種ノ改良ニ着手セル外換羽ニ關スル研究、食毛辯ニ關スル研究等ニ着手セルモ未タ其ノ結果ヲ見ルニ至ラス

五、家禽現在數

本年度末ニ於ケル家禽現在數ハ次ノ如シ

種類	種		計	成		計	合計
	雄	雌		雄	雌		
白色レグホーン種	3	48	51	22	58	80	131
三河種	1	3	4	1	3	4	8
名古屋種	1	16	17	1	17	18	35
雜種	5	77	82	44	217	260	342
計	10	134	144	68	195	263	527

雜ノ部

一、出張	本年度中場員ノ出張ハ左ノ如シ	回数
出張種別		
農事講話		一三八
農事調査		一四〇
委託試験用務		六〇
農事視察		一八三
品評會審査用務		七五
害虫驅除		二七
農事指導		一七六
農具試驗用務		一七六
其他		三五九
計		一・三三四
二、印刷物	本年度發行セシ印刷物左ノ如シ	發行部數
種別		

安城農報		一・七一〇	
業務功程		六〇〇	
米麥獎勵品種説明		一・〇〇〇	
練習生規則		五〇〇	
蔬菜栽培一覽表		一・〇〇〇	
蔬菜種子特產地一覽表		一・〇〇〇	
蔬菜採種組合表		一・〇〇〇	
特別報告、鶏ノ營養ニ關スル研究		二〇〇	
農具試驗説明		一・〇〇〇	
三、文書受發件數			
受	安城	清洲	計
信	三・〇七二	三・六七八	六・七五一
發	二・五三九	二・六四八	五・一八七
四、參觀人			
安城	一〇・七三〇	清洲	計
一六・四六五		二七・一九五	
五、質問應答			
安城	七六二	清洲	計
二八七		一・〇四九	
六、職員			

大正十四年十一月就職  
大正十四年八月退職

自大正十四年八月  
至同 年十一月  
大正十四年五月就職

大正十四年六月就職

大正十四年四月熊本縣へ出向

場長、技師	愛知縣廳農務課兼務	上野操
技師 (安城農林學校長)		佐々木林太郎
技師 (農藝化學部)	愛知縣廳農務課兼務	大森謹平
技師 (園藝部)		金井眞澄
技師 (病理部)		安藤安孝
技師 (畜産部)		飯塚喜久治
技師 (種藝部)		白石代吉
技師 (種藝部)		岩槻信治
技師 (畜産部)		本多千要
技師 (農藝化學部)		米津兼治
技師 (農具試驗部)		杉山治雄
技師 (園藝部)		鈴木孝之
技師 (種藝部)		尾崎重夫
技師 (園藝部)		尾崎五平治
技師 (畜産部)		大窪弘行
技師 (農具試驗部)		久保田繁一

技師 (農藝化學部)	松田方延
技師 (病理部)	野口兵作
技師 (園藝部)	鈴木竹治郎
技師 (農具試驗部)	水谷建三
技師 (農藝化學部)	横田捨三
主事補 (庶務部)	三輪松五郎
主事補 (庶務部)	杉浦幸三郎
主事補 (庶務部)	丹羽孝平
助手 (庶務部)	小川哲齊
助手 (種藝部)	石川喜一郎
助手 (農具試驗部)	立松鑑一郎
助手 (農具試驗部)	眞下友義
助手 (畜産部)	植村貞一
助手 (園藝部)	服部桓勇
助手 (園藝部)	大山逸男
助手 (畜産部)	山本俊造
助手 (種藝部)	氏原光二

大正十四年八月就職

七、農業練習生

農業技術員養成ノ目的ヲ以テ本年度入場セシメタル農業練習生養成ノ概要左ノ如シ

- イ、採用人員 二十名
- ロ、途中退場人員 三名 (病氣二名、入營一名)
- ハ、修了者氏名

助手 (病理部) 鈴木 新市 光  
 助手 (農藝化學部) 鈴木 丈市  
 助手 (園藝部)

出身郡市

大谷 文平  
 秋田 弘延  
 大野 四郎  
 内藤 泰親  
 加古 賢一  
 水野 竹治郎  
 中野 録太郎  
 高橋 貢  
 野村 惣松

氏名

二、教授科目及時間數

教授科目	擔當	講師	教授時間 (一年間通算)	實地練習時間 (一年間通算)
修身 (訓話)	場長	佐々木 太郎	二〇	一五〇
米麥品種改良	技手	上野 信治	四四	一五〇
米麥栽培法	技手	岩内 千治	三三	五〇〇
土壌	技手	津兼 治	三三	一〇〇
不良土壌ニ就テ (科外)	農林省農事試驗場	關農學 博士	一〇	一〇〇
肥料試驗ニ就テ	技師	金井 眞澄	三〇	一〇〇
肥料取締法	主事補	三輪 松五郎	一〇	一〇〇

幡豆 幡豆 幡豆  
 額田郡 額田郡 額田郡  
 西加茂郡 西加茂郡 西加茂郡  
 北設樂郡 北設樂郡 北設樂郡  
 寶飯郡 寶飯郡 寶飯郡  
 水野 三平  
 山本 豊吉  
 星野 武夫  
 齋藤 正治  
 加藤 鎮  
 芦澤 岩夫  
 近藤 信太郎  
 小野 田治雄

教授科目	擔當	講師	教授時間 (一年間通算)	實地練習時間 (一年間通算)
農作物病理	技師	鍛塚喜久治	二八	二〇
農作物害虫	技師	尾崎重夫	二三	五〇
害虫防除ニ就テ(科外)	大原研究所	春川技師	四	〇
農具(構造方面)	技師	杉山治雄	一九	〇
農具(利用方面)	技師	久保田繁	五	〇
果樹	技師	安藤孝一	一七	〇
蔬菜	技師	鈴木孝之	一四	〇
全(促成)	技師	鈴木孝之	一四	〇
畜産	種畜場長	鈴木孝之	一〇	〇
養鶏(科外)	農林省畜産試験場	萩原技師	一〇	〇
養蠶	技師	飯田左翼	七	五
米穀改良	縣農林技師	安藤春美	七	五
小作ニ就テ	小作官	木下信三	七	五
畑作經營	種畜場技師	加藤正三	五	〇
農事改良實行組合	縣農林技師	服部廉平	五	〇
農事統計	技師	尾崎重夫	二	〇
農業組合法	縣農林主事	真鍋	八	〇
農產會	縣農會技師	赤松	四	〇

八、見習生

農業技術見習ノ爲本年度入場ヲ許可シ一箇月乃至一箇年在場セシメタル見習生ノ數左ノ如シ

- 園藝見習生 二十八名
- 農具見習生 四名
- 計 三十二名

(附) 一、科外講義トシテ國語・英語・數學・博物・物理・化學等ヲ適宜課シタリ  
 二、實地ノ狀況ヲ見學ノ爲縣内及近縣ノ各種農業機關、成績良好ナル各種組合、農場ヲ視察セシメタリ

耕地整理	縣農林技師	大澤時藏	七	〇
縣ノ農業施設	縣屬	政雄	四	〇
技術員經驗談	郡技師	原二名	七	〇
計			三九	一・二四〇



大正十五年十月三十一日印刷  
大正十五年十一月五日發行

愛知縣立農事試驗場

愛知縣碧海郡刈谷町大字刈谷字下町三十三番地  
印刷者 田中啓三郎

愛知縣碧海郡刈谷町大字刈谷字下町三十三番地  
印刷所 余活版印刷所

14.2  
134

NO.

PATENTED NO. 119016

"F-M"

**PAMPHLET BINDERS**

are carried in stock in the following sizes

Catalog No.	High	Wide	Thick
851(菊倍)	30. cm. x	22.5cm. x	1cm.
852(四六倍)	26. " x	18.5 " x	1 "
853(菊)	22.5 " x	15. " x	1 "
854(四六)	18.5 " x	12.5 " x	1 "
855(特)	24. " x	15. " x	1 "

Special sizes are made to order

LIBRARY SUPPLIES IN ALL KINDS  
**F. MAMIYA & CO.**  
OSAKA-TOKYO-FUKUOKA

終